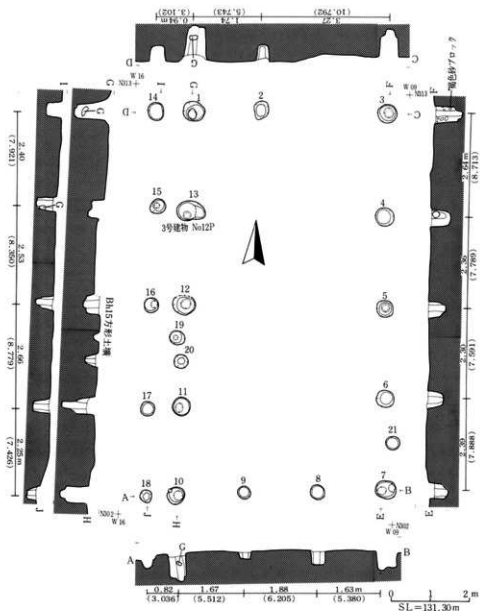


また、北西の隅柱柱穴に重複する16号焼土遺構は3号建物に先行し、1号方形整穴状遺構はこれより後の構築である。

4号 (Bf18) 掘立柱建物跡 (第84図 第59表 写真図版38)

東西9.76m (32.211尺) 4間、南北5.95m (19.624尺) 5間の南北棟である。建物方向はN-1、2°-Wを計る。柱配置は内部柱穴や東面に明確でない柱穴が含まれるが、ほぼ対応して矩形をな



第84図 4号 (Bf18) 掘立柱建物跡

す。西1間を庇とみると身舎の梁行は5.11m (16.871尺) 3間となる。

柱間は東西方向の西1間が0.80 (2.640) ~0.94m (3.102尺) でもっとも狭く、他の4間が1.63 (5.380) ~1.88m (6.205尺)、北面の1間が3.27m (10.792尺)、内部3間が5.01 (16.535) ~5.28m (17.426尺) となる。南北方向は2.25 (7.426) ~2.64m (8.713尺) で等間とみられ、P 6-21-7、P 12-20-11では1.16 (3.828) ~1.46m (4.818尺) となり、やや不揃いである。

柱穴の掘り方は径0.32~0.56mのほぼ円形を呈し、柱痕はP 14、21を除いて径0.14~0.20mである。深さは0.20~0.95mを計り、隅柱に深い。また、柱痕部分が掘り方底部より更に深いものが含まれる。

掘り方の埋土は大部分褐色砂の混入する黒色土であり、P 1、15には礫が混在する。柱痕部分では黒色土のほか、P 7、9、19に若干の褐色土塊が含まれる。

重複する遺構には3号掘立柱建物と1号長方形土壇がある。前者はP 13を切り、後者はP 12を切って共に4号掘立柱建物より新しい遺構である。

第59表 4号掘立柱建物跡柱穴計測表

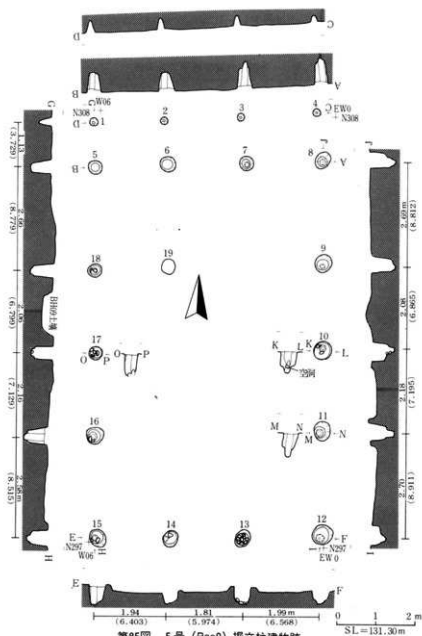
柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱間隔	備考	柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱間隔	備考
1	56×50cm	95cm	131.22m	130.27	20cm		12	58×55cm	47cm	131.15m	130.68m	25cm	北側を他は掘り方土壇に切られる
2	35×45	45	131.21	130.76	17		13	59×53	46	131.17	130.71	15	東側を3号建物跡No.12に切られる
3	48×45	72	131.04	130.32	15		14	39×45	41	131.20	130.79		埋土記録なし
4	50×48	54	131.09	130.55	18		15	38×38	52	131.15	130.63	16	
5	42×42	46	131.08	130.62	15		16	35×35	50	131.16	130.66	15	
6	45×45	44	131.05	130.62	18		17	35×37	47	131.15	130.68	15	
7	50×45	49	131.95	130.46	18		18	30×35	34	131.96	130.62	14	
8	38×38	39	131.01	130.62	16		19	35×35	55	131.15	130.60	15	
9	32×34	30	131.02	130.82	15		20	35×35	33	131.14	130.81	14	
10	45×42	74	131.02	130.28	17		21	36×35	44	131.06	130.62		埋土記録なし
11	45×48	46	131.11	130.25	16								

5号 (Bg09) 掘立柱建物跡 (第85図 第60表 写真図版38)

東西5.78m (19.087尺) 3間、南北10.72m (35.363尺) 5間の南北棟である。建物方向はN-2.0°-Wを計る。柱配置は東西に対応して矩形をなし、北2間に内部柱穴が配される。北1間を庇とみると南北方向は9.55m (31.502尺) 4間となる。

柱間は東西方向が1.81 (5.974) ~2.04m (6.733尺) の等間となるほか、P 19-9が3.91m (12.904尺)、総長では5.71 (18.845) ~5.84m (19.274尺) となり、それぞれ前者の2、3間相当の柱間となる。南北方向では北1間が1.11 (3.663) ~1.26m (4.158尺) でもっとも狭く、中央2間で2.06 (6.799) ~2.18m (7.195尺)、他は2.58 (8.515) ~2.70m (8.911尺) である。

掘り方は共に円形をなし、径0.36~0.52mを計り、深さは0.35~0.70mである。北面の柱穴は打込み状を呈し、径0.19~0.22m、深さ0.19~0.30mとそれぞれほぼ一定している。柱痕は北面と内部の1柱穴を除いて認められ、径0.14~0.18mの円形と推定される。柱根はP 18に遺存し、木口径11.0×5.2cm、高さ16.1cmを計る。木口には密着して寛永通寶2点が検出され、埋納され



た遺物とみられる。

柱穴の埋土は細砂やシルトの小塊が混入する黒褐色土であり、柱痕部分では黒色土で柔らかい。

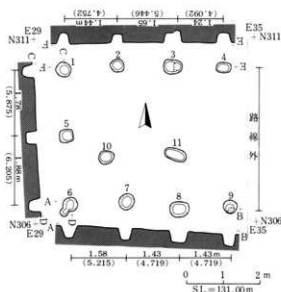
埋土中の遺物はP 8より須恵器2点、内黒の土師器1点のほか、他柱穴より台付坏1点、環状の鉄製品1点が出土する。また、検出段階では摺鉢3個体の破片、陶磁器片13点以上が出土している。後者はいずれも近世以降の遺物である。

同一検出面の遺構には3号円形土壌がP17-18間に認められる。しかし、共伴する遺構が前後関係を含めて明らかでない。

第60表 5号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	検出面の位置	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱径	備考	柱穴番号	検出面の位置	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱径	備考
1	21×22m	33m	131.01m	130.69m	cm		11	40×50m	64m	130.82m	130.18m	16cm	
2	19×20	30	130.98	130.68			12	52×50	38	130.78	130.40	15	
3	20×19	27	130.97	130.70			13	40×43	48	130.85	130.37	15	
4	20×19	19	131.95	130.76			14	38×40	35	130.74	130.39	15	
5	36×36	55	131.00	130.45	14		15	42×45	56	130.90	130.34	16	
6	40×39	50	131.01	130.51	15		16	45×41	41	130.88	130.27	18	
7	37×36	70	130.98	130.28	16		17	35×34	56	131.03	130.47	15	
8	38×42	68	130.93	130.25	15		18	37×35	62	131.07	130.45	14	柱間本口に東向き遺構3枚検出面の長さ11.04m
9	42×45	62	130.84	130.22	15		19	35×39					柱間本口に東向き遺構3枚検出面の長さ11.04m
10	44×47	61	130.81	130.20	16								柱間本口に東向き遺構3枚検出面の長さ11.04m

6号 (Bg77) 掘立柱建物跡 (第86図 第61表 写真図版38)



東西4.35m (14.356尺) 3間、南北3.78m (12.459尺) 2間であるが、東面は1間である。建物方向はE-2.4°Sの東西棟である。柱配置は南北に対応し、内部の2柱穴は伴うものか明確でない。

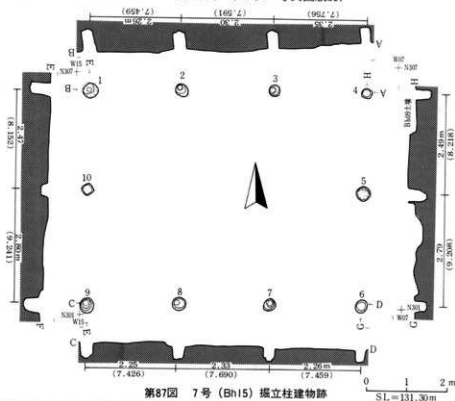
柱間は東西方向で1.24 (4.092) ~ 1.65m (5.446尺)の等間をなし、南北方向では東面より3間が3.71 (12.244) ~ 3.87m (12.772尺)、西面はこれを2分する1.78 (5.875) ~ 1.88m (6.205尺)である。内部のP10-11、P11-8はそれぞれ1.89m (6.238尺)、1.48m (4.884尺)を計る。

柱穴の掘り方は径0.27~0.55mの円形、または隋円形をなし、深さは0.24~0.36mである。柱底はP10、11を含めて8柱穴に認められ、径0.16~0.21mの円形とみられる。埋土については明らかでない。

第61表 6号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	検出面の位置	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱径	備考	柱穴番号	検出面の位置	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱径	備考
1	40×40m	29m	130.92m	130.63m	cm		7	42×43m	33m	130.96m	130.63m	21m	
2	36×36	24	130.93	130.69	18		8	55×42	36	130.94	130.58		
3	50×40	32	130.90	130.58	20		9	40×36	32	130.90	130.58	20	
4	40×27	28	130.92	130.64			10	40×36	31	130.94	130.63	16	
5	37×36	30	130.95	130.65	20		11	60×31	27	130.92	130.65	17	
6	42×36	36	130.96	130.60	20	No.12より新しい	12	20×?	32	130.96	130.64		No.6より古い

7号 (Bh15) 掘立柱建物跡 (第87図 第62表 写真版39)



第87図 7号 (Bh15) 掘立柱建物跡

東西6.88m (22.706尺) 3間、南北5.29m (17.450尺) 2間である。矩形をなす東西棟であり、整然とした柱配置を示す。建物方向はE-1.4'-Sである。

柱間は東西方向の3間が2.25 (7.426) ~2.35m (7.756尺) の等間をなし、南北方向では北1間が2.47 (8.152) ~2.49m (8.218尺)、南1間が2.79 (9.208) ~2.80m (9.241尺) で広狭がある。総長では殆ど近接値を示す。

掘り方は径0.25~0.40を計り、北・西面で方形を呈し、他はほぼ円形をなす。深さはP10が0.15m、他は0.34~0.55mであるが、柱痕部分は掘り方底部より更に深く、径0.12~0.15mの円形と推定される。埋土は記載がなく、柱痕部分を含めて不明である。

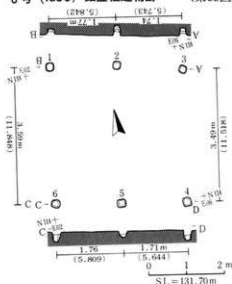
重複する遺構には30号焼土遺構があり、P4がこれを切って7号建物に先行する焼土遺構である。

第62表 7号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	掘り出しの深さ	掘出面の高さ	底面の高さ	柱痕径	備考	柱穴番号	掘り出しの深さ	掘出面の高さ	底面の高さ	柱痕径	備考
1	40×37cm	55cm	131.15m	130.60m	円	6	29×32cm	32m	130.77m	130.45m	円
2	30×32	48	131.08	130.60		7	30×30	37	130.81	130.44	
3	27×29	48	131.03	130.55	方形	8	34×30	34	130.84	130.50	
4	25×25	42	131.90	130.48	方形田の焼土遺構より新しい	9	34×37	40	130.95	130.55	
5	34×35	50	131.02	130.52		10	28×27	15	131.10	130.95	方形

8号 (Ia50) 掘立柱建物跡

(第88図 第63表 写真図版39)



第88図 8号 (Ia50) 掘立柱建物跡

遺物は遺構検出段階で須惠器環の破片5点、同
壺片1点、内黒土師器の坏片2点、土師器の壺片5点の合わせて13点が出土している。

東西3.49m (11.502尺) 2間、南北3.57m (11.782尺) 1間の小規模な建物である。建物方向はE-11.3°-Sを計る東西棟である。柱配置はほぼ方形をなすが、北東の隅柱がやや内側にあつて歪みがある。

柱間は東西方向が1.71 (5.644尺) ~1.77m (5.842尺)の等間をなし、南北方向では3.49(11.518) ~3.63m (11.980尺)である。

掘り方は径0.17~0.23mの方形をなし、深さ0.17~0.29mである。柱痕は北東を除く隅柱3柱穴に認められ、径0.10~0.12mの円形を呈する。

遺物は遺構検出段階で須惠器環の破片5点、同

第63表 8号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	検出位置の径	深さ	検出位置の高さ	底面の高さ	柱間距	備考	柱穴番号	検出位置の径	深さ	検出位置の高さ	底面の高さ	柱間距	備考
1	20×22cm	17m	131.64m	131.47m	11m		4	22×22m	25m	131.62m	131.33m	12m	
2	17×21	29	131.45	131.36			5	22×21	18	131.62	131.44		
3	18×20	24	131.64	131.40			6	21×22	28	131.63	131.35	10	

9号 (Mf62) 掘立柱建物跡

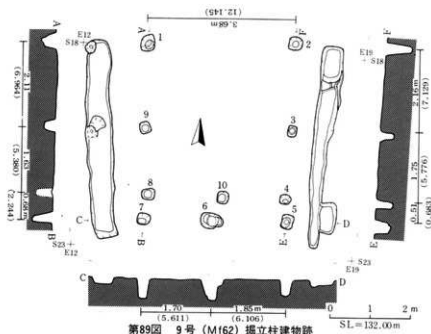
(第89図 第64表 写真図版39)

東西3.59m (11.832尺) 2間、南北4.41m (14.554尺) 3間であるが、更に西1間を加えるならば東西は5.03m (16.584尺)となる。建物方向はN-1.2°-Wを計る南北棟である。

柱配置は北西に僅かに広いほか、南面の内側柱列が共に中央寄りに位置して不揃いとなる。また、南1間が東西2間であるが、全体に矩形を呈する。そのほか西面に張りだす1間は北西1間に対応する配置であるが、伴う柱穴であるか明らかでない。

柱間は東西方向の南2間が1.56 (5.149) ~1.85m (6.101尺)でやや不揃いとなり、他は3.66 (12.079) ~3.68m (12.145尺)の等間である。南北方向は北2間が2.11 (6.964) ~2.29m (7.558尺)、南1間が0.51 (1.683) ~0.68m (2.244尺)のそれぞれ等間である。また、西1間は東西方向が1.32 (4.356) ~1.40m (4.620尺)、南北方向2.10m (6.931尺)である。

掘り方は西1間を除いてほぼ方形を呈し、径0.26~0.39m、深さ0.29~0.63mを計る。比較的隅柱に大きく、南面を除いて間柱が小さく浅い。柱痕は径0.14~0.16mで殆ど共通し、隅柱では掘り方より若干深いもの含まれる。埋土は黒色土とシルトの混土で極暗褐色を呈し、柱痕



部分では柔らかい一様な黒褐色土である。埋土中の遺物は須恵器片1点である。

調査段階で建物に付随するとみられた遺構は東・西面に沿った溝2条がある。東溝は長さ5.03m、幅0.27~0.55m、深さ0.17mを計り、南に狭まる。西溝は長さ4.39m、幅0.56~0.61m、深さ0.17mである。溝方向はそれぞれN-2.2°-E、N-5.5°-Wとなり、建物方向とは東面で3.0°、西面で3.5°相違している。共に南ほど柱列に近接し、東西で0.68~0.53m、西面で0.87~0.68mを計る。また、南面の柱列より更に南に延びて東西それぞれ0.65m、0.43mまで認められる。底部における南北の比高差、覆土の状況等については明らかでないが、雨落溝等が推定される。そのほか、東溝南端よりに掘り込みがあるが、併設するものか前後関係を含めて明らかでない。

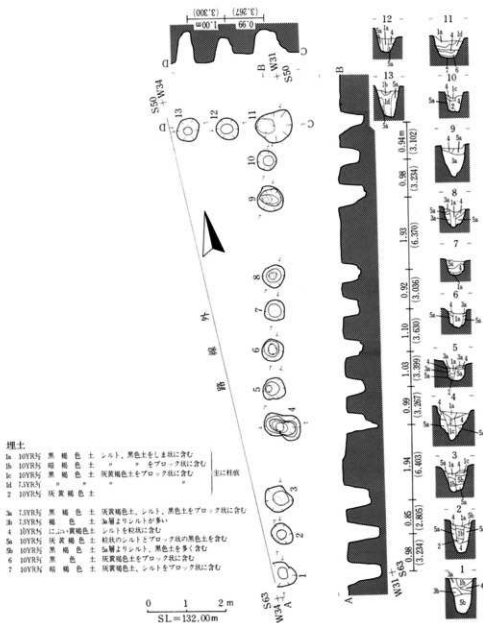
第64表 9号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	横断面の径	深さ	横断面の高さ	横断面の長さ	柱間径	備考	柱穴番号	横断面の径	深さ	横断面の高さ	横断面の長さ	柱間径	備考
1	35×30cm	36cm	131.50m	131.14m	15cm		6	56×30cm	54cm	131.56m	131.02m	15cm	
2	34×32	63	131.52	130.89	15		7	32×27	50	131.57	131.07	16	
3	22×28	33	131.55	131.22			8	33×26	42	131.57	131.15	15	
4	27×23	43	131.56	131.13	16		9	26×29	29	131.56	131.27	14	
5	30×36	40	131.56	131.16	16		10	30×30	38	131.57	131.19		

10号 (Ng33) 掘立柱建物跡 (第90図 第65表 写真版40)

東西1.98m (6.535尺) 2間、南北11.48m (37.888尺) 10間まで確認される。柱配置によって建物の東西および北面の一部とみられ、南北棟と推定される。東面による建物方向はN-11.2°-Eを計る。

柱間は東西方向2間が²1.00m (3.284尺) の等間である。南北方向では広狭があり、狭い柱間



第65表 10号掘立柱建物跡柱穴計測表

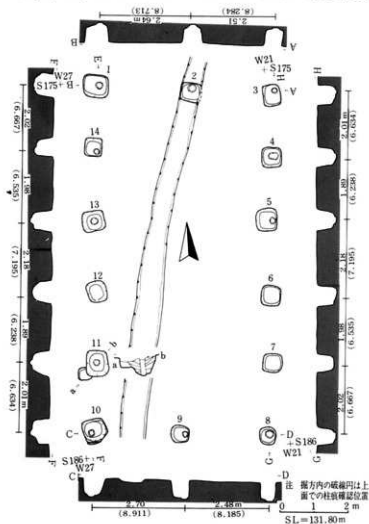
柱穴番号	掘出位置の柱	深さ	掘出位置の高さ	底面の高さ	柱径	備考	柱穴番号	掘出位置の柱	深さ	掘出位置の高さ	底面の高さ	柱径	備考
1	7×64	90	131.86	130.90			8	57×55	53	131.62	131.09	20	
2	50×55	85	131.72	130.87	21		9	65×65	83	131.60	130.77		
3	70×67	67	131.75	131.08	20		10	48×52	52	131.58	131.06	14	
4	91×55	88	131.75	130.87	20		11	90×76	63	131.56	130.93		
5	56×54	51	131.66	131.15	15		12	56×57	62	131.76	131.14	16	
6	56×57	50	131.62	131.12	25		13	61×58	80	131.76	130.96	20	
7	52×53	43	131.62	131.19									

8間が0.85 (2.805)～1.10m (3.630尺)、広い柱間2間は1.90 (6.271)～1.94m (6.386尺)を計り、それぞれ等間とみられる。

掘り方は不整なものが含まれるが、径0.48～0.90mのほぼ円形を呈し、深さは0.43～0.90mである。柱痕は9柱穴に認められ、径0.14～0.25mの円形で、>不揃いがある。掘り方底部より柱痕部分の低位となるものや不整なものがある。

埋土は黒褐色土、褐色土、暗褐色土、灰黄褐色土等からなり、それぞれシルトや黒色土が小塊状をなして含まれるが、灰黄褐色土を含むものもっとも多い。柱痕部分は黒褐色土、暗褐色土、灰黄褐色土、またはこれらの混土となるもの等があつて多様である。

11号 (Ri27) 掘立柱建物跡 (第91図 第66表 写真図版40)



東西5.16m (17.041尺) 2間、南北10.12m (33.399尺) 5間の南北棟である。建物方向はN-4.9°-Eを計る。柱配置は矩形をなして整然と配列され、内部柱穴は認められない。

柱間は東西方向2間が2.48 (8.185)～2.70m (8.911尺)、総長では5.08 (16.766)～5.22m (17.228尺)である。南北方向5間では1.89 (6.238)～2.18m (7.195尺)の等間であり、総長では10.01 (33.036)～10.18m (33.597尺)である。

柱穴の掘り方は径0.48～0.77mの方形を呈

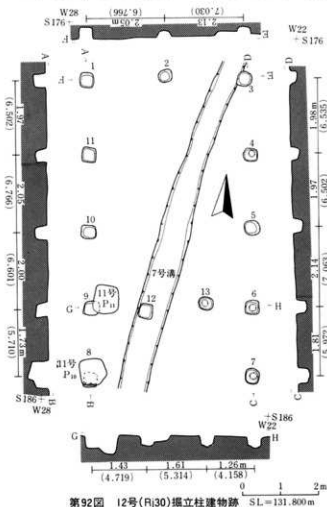
し、深さは0.56~0.62mで殆ど一定している。柱痕は径0.15~0.19mの円形である。埋土は黒色土と暗褐色シルト質土の混土で版築状をなし、柱痕は黒色土で締りがない。

埋土中の遺物は須恵器杯の破片3点、土師器甕の破片数点である。

第66表 11号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	掘立柱の径	深さ	掘立柱の高さ	底面の高さ	柱径目	備考	柱穴番号	掘立柱の径	深さ	掘立柱の高さ	底面の高さ	柱径目	備考
1	72×65cm	59cm	131.73m	131.14m	19cm		8	48×53cm	57cm	131.60m	131.03cm	16cm	
2	62×56	56	131.68	131.12	16	7号(N483)溝より古い	9	53×50	59	131.66	131.07	17	
3	53×62	57	131.71	131.16	18		10	68×65	58	131.73	131.15	16	12号建物柱穴No.8を切る
4	57×57	62	131.72	131.10	16		11	61×77	60	131.70	131.10	18	*
5	41×66	60	131.69	131.08	16		12	55×62	56	131.71	131.15	15	
6	36×60	61	131.65	131.04	16		13	65×60	62	131.72	131.10	16	
7	57×56	53	131.62	131.09	16		14	50×54	58	131.73	131.15	16	

12号 (Rj30) 掘立柱建物跡 (第92図 第67表 写真図版40)



第92図 12号(Rj30)掘立柱建物跡 SL=131.800m

東西4.26m (14.066尺) 3間、南北7.83m (25.825尺) 4間であるが、北面では2間、南面では1間その内側では不揃いな3間となる。全体に矩形をなし、建物方向はN-5.2°-Wを計る。

柱間は東西方向が北面で2.05 (6.766) ~ 2.13m (7.030尺) の等間となり、内部3間では西より1.43 (4.719) - 1.61 (5.314) - 1.26m (4.158尺) となり、不統一である。総長では4.16 (13.729) ~ 4.36m (14.389尺) である。

南北方向では南1間が1.73 (5.710) ~ 1.81m (5.974尺) で狭く、他の3間は1.97 (6.502) ~ 2.14m (7.063尺) の等間である。

掘り方はP13を除いて方形を呈し、径0.31~0.40mである。深さは0.12~0.35mを計り、東・南面の柱穴では柱痕部分が僅かに低位とな

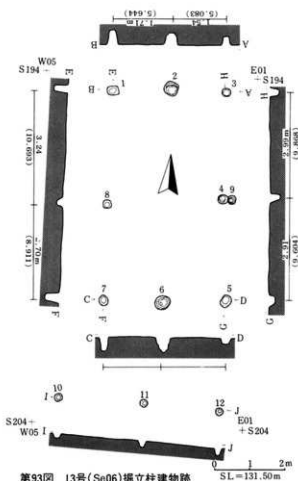
る。柱痕径は0.12~0.15mと推定される。埋土は明黄褐色シルト質土が小塊状に混入する黒色土である。

重復する遺構には11号掘立柱建物及び7号溝がある。前者は南西のP 8、9を切って12号掘立柱建物より新しく、後者はP 3、12を切り、これより新しい溝である。

第67表 12号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	掘立柱の径	深さ	掘立柱の高さ	掘立柱の高さ	柱痕径	備考	柱穴番号	掘立柱の径	深さ	掘立柱の高さ	掘立柱の高さ	柱痕径	備考
1	36×37	33	131.72	131.40	cm		8	?	35	131.72	131.37	cm	11号建物柱穴No.13に切られる
2	37×31	16	131.71	131.50			9	40?×38	32	131.69	131.37		11号建物柱穴No.11に切られる
3	37×40	23	131.67	131.44		7号(N480)溝が西側を切る	10	39×35	31	131.70	131.39		
4	36×32	25	131.67	131.42			11	37×36	29	131.72	131.43		
5	40×40	25	131.65	131.40			12	35×38	12	131.55	131.43		7号(N480)溝より古い
6	36×36	30	131.62	131.32			13	37×35	30	131.67	131.37		
7	35×40	34	131.62	131.29									

13号 (Se06) 掘立柱建物跡 (第93図 第68表 写真図版40)



第93図 13号 (Se06) 掘立柱建物跡

東西3.36m(11.089尺) 2間、南北5.95m(19.624尺) 2間の南北棟である。建物方向はN-2.4°-Wを計る。全体に矩形をなすが、北・東面に若干狭く、西面の柱配置には広狭がある。

柱間は東西方向が1.54(5.083)~1.77m(5.842尺)の等間であり、南北方向では東面が北より2.99(9.868)-2.91m(9.604尺)、西面では3.24(10.963)-2.70m(8.911尺)で不揃いである。

掘り方はP 1、2、8が方形状を呈し、他は円形、または階円状をなす。径0.19~0.62m、深さ0.09~0.55mを計り、P 2、6では柱痕部分が掘り方底部より更に深い。柱痕は4柱穴によって径0.10~0.15mの円形と推定される。埋土は記載がなく、不明である。

埋土中の遺物は鉄釘 1点である。

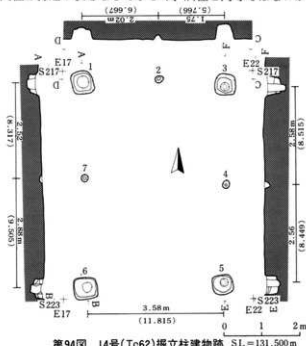
近接する柱穴には東面の P 9 のほか、P 12-11-10 の柱列があるが、伴うものか明らかでない。後者は建物南面より 2.89~3.18m において東西に延び、西面の柱列より更に 1.16m 西方へ続く。柱間は東より 2.15 (7.096) - 2.45m (8.086 尺) を計る。掘り方は比較的小さい円形を呈し、深さは 0.14~0.21m である。

第68表 13号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	裏面の高さ	柱痕径	備考	柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	裏面の高さ	柱痕径	備考
1	31×26cm	44m	131.44m	131.03m	15.7cm		7	26×30cm	42m	131.45m	131.03m	cm	
2	38×39	36	131.42	131.06			8	23×24	17	131.42	131.25		
3	26×25	27	131.41	131.14			9	18	131.38	131.20			
4	28×27	30	131.39	131.09			10	14	131.48	131.34			
5	27×35	18	131.41	131.23			11	19	131.46	131.27			
6	42×40	47	131.42	130.95	15.7		12	21	131.40	131.19			

14号 (Tc62) 掘立柱建物跡 (第94図 第69表 写真図版41)

東西3.69m (12.167尺) 2間、南北5.28m (17.409尺) 2間であるが、南面のみ1間となる。間柱は打込み状をなして小さく、隅柱と同等ではないが、ほぼ中央に配され、それぞれ2間とするものである。建物方向はN-0.3°-Wを計る。



第94図 14号(Tc62)掘立柱建物跡

柱間は東西方向が1.75 (5.776) ~ 2.02m (6.667尺)、南北方向で2.52 (8.316) ~ 2.88m (9.505尺) でそれぞれほぼ等間をなす。全体に北・西面にやや間延びするが、殆ど矩形である。

掘り方は隅柱が径0.52~0.62mの方形をなし、間柱では0.18~0.22mの円形を呈して一定している。深さはそれぞれ0.37~0.55m、0.09~0.16mであり、柱痕部分は掘り方底部より更に0.05~0.12m深く、低くな

第69表 14号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	裏面の高さ	柱痕径	備考	柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	裏面の高さ	柱痕径	備考
1	55×61cm	30m	131.24m	130.92m	14.7cm		5	53×52cm	41m	131.23m	130.82m	10cm	
2	21×19	14	131.26	131.12			6	42×56	37	131.23	130.86	13?	
3	55×55	55	131.24	130.69	10		7	18×19	9	131.26	131.17		
4	19×22	16	131.24	131.08									

る。柱痕は隅柱に認められ、径0.20～0.28mの円形である。

埋土は黒色土、またはシルトを含む黒褐色土であり、柱痕部分では粘性が弱く、締りのない黒色土である。

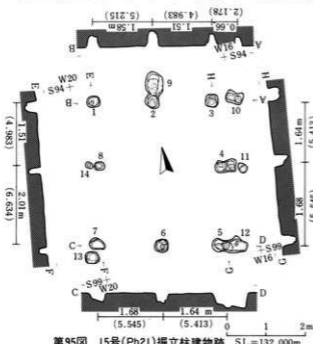
15号 (Pb21) 掘立柱建物跡 (第95図 第70表 写真図版41)

2棟以上の建て替え建物とみられる。P1、2、6、7等では重複関係が明確ではないが、柱配置によっては2棟まで推定され、共に南北棟とみられる。

1棟はP1-2-10-4東-5東-6-7-8であり、東西3.40m(11.232尺)2間、南北3.69m(12.189尺)2間となる。東・西面の柱列による建物方向はN-10.3°-Eである。柱間は東西方向で1.58(5.215)～2.01m(2.634尺)で北西に若干不整となる。南北方向では北1間が1.51(4.983)～1.78m(5.875尺)、南1間は2.01m(6.634尺)である。

他の1棟はP1-2-3-4-5西-6-13、または7-14である。更に東面にはP10東

-11-12が対応する。南西隅をP7とすると建物規模は東西3.77m(12.431尺)3間、南北3.68m(12.137尺)2間である。南面を除いては共に直交する柱配置となる。建物方向はN-8.7°-Eを計る。柱間は東西方向が東端の1間で0.53(1.749)～0.66m(2.178尺)、他の2間は前者と共有する1間を含めて1.46(4.818)～1.51m(4.983尺)、また、P13-6では1.80m(5.941尺)で若干広い柱間となる。南北方向では北1間が1.56(5.149)～1.77m(5.842尺)、南1間が1.96(6.469)～2.14m(7.063尺)で



第95図 15号(Pb21)掘立柱建物跡 S.L.=132.000m

第70表 15号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱径径	備考	柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱径径	備考
1	32×28	30	131.80	131.50	φ		8	25×22	31	131.70	131.40	φ	
2	34×?	39	131.80	131.41		No.9より古い	9	45×?	37	131.82	131.45		No.2より新しい
3	32×32	32	131.82	131.50			10	45×30	23	131.83	131.60		
4	?×31	35	131.80	131.45		東側の掘立柱?	11	22×25	15	131.81	131.66		
5	?×31	39	131.82	131.43		No.12より古い	12	50?×42	41	133.82	131.41		No.5より新しい
6	34×32	25	131.80	131.55			13	34×29	40	131.80	131.40		
7	40×29	21	131.80	131.59			14	20×16	11	131.80	131.69		

あり、それぞれ前記の建物と同様である。P14-13では2.35m(7.755尺)となる。

推定される2棟の重複関係はP5、12によって確認され、前者の建物が先行するものとみられる。これによって建て替え建物は殆ど同一規模であるが、新たに東面に庇状の1間を付加する建物と推定される。

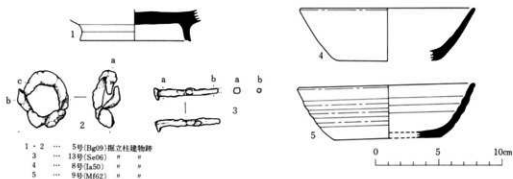
柱穴の掘り方は後者の建て替え建物の柱穴に小さく浅いものが含まれるが、径0.16~0.45mを計り、深さは0.11~0.41mである。柱痕は共に判明するものがない。埋土は主として黒色土、黒褐色土、暗褐色土であり、いずれも多少のシルトを含み、特に建物による相違は把握できない。

掘立柱建物跡出土遺物 (第96図)

掘立柱建物遺構に関わる陶磁器・古銭等については、第四章・ii-(12)・(13)項に一括記載しているので省略する。ここでは、第96図に示した遺物についてのみふれる。

図示した5点の遺物は5号・8号・9号・13号掘立柱建物柱穴の掘り方内から出土したものとされるが、層位の詳細や柱穴番号については不明である。

No1は、須恵器高台杯の底部~脚部片。灰黒色を呈し、硬質である。No2は器種不明の銅状製品である。No3は先端部を欠損する角釘。No4・5はA類坏片。何れも反転復元による実測である。



第96図 掘立柱建物跡出土遺物

5 土 壤

(1) 円形土壌

平面形が円形もしくは楕円形の土壌を包括したもので、規模的にも大・小各様である。これらの土壌の検出は、Bブロック西半、L・Mブロック東半、N・Oブロック西半、O・Pブロック西半、Sブロック東半にそれぞれ分布するが、Bブロック西半とO・Pブロック西半が多い。

1号 (Bd12) 円形土壌 (第97-1図 第88表 写真図版41)

他との重複は認めず。平面形はほぼ円形で、規模は開口部で155 cm×160 cm、壙底部は130 cm×130 cm、検出面から19 cmの深さを計り、壁はゆるやかに立ち皿状の断面を呈する。

土壌内の堆積土は単層で、粘性に乏しくバサバサした黒褐色土で小礫を含んでいる。出土遺物はなく、時期と性格は不明である。

2号 (Bg03) 円形土壌 (第97-1図 第88表)

5号掘立柱建物跡と重複するが先後関係は不明である。円形の平面形で、規模は開口部で78 cm×83 cm、壙底部は39 cm×42 cm、検出面から31 cmの深さをもち、壁は内湾ぎみに立ち上がりボール状または半円に近い断面形を呈する。

堆積土は粘性やしまり等で3つに細分しているが、1_a層がシルト質で若干の差異を認めるものの大差はない。出土遺物はなく、時期と性格は不明である。

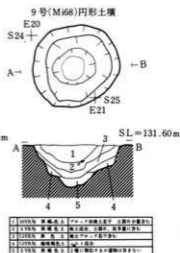
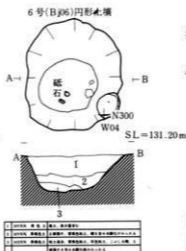
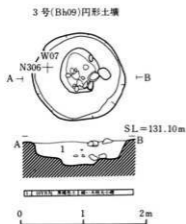
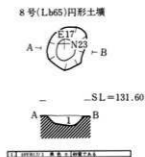
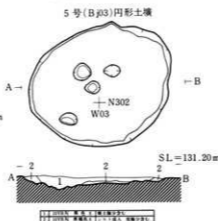
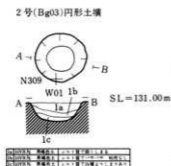
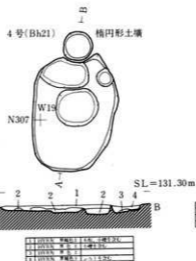
3号 (Bh09) 円形土壌 (第97-1図 第88表 写真図版42)

5号掘立柱建物跡と重複するが先後関係は不明である。円形の平面形で底部中央に円形の落ちこみをもつ、規模は開口部で139 cm×145 cm、壙底部で128 cm×130 cm、検出面からの深さは24 cmを計る。中央の落ちこみは開口部で60 cm×70 cm、壙底部45 cm×58 cm、底面からの深さ10 cmであり、検出面から落ちこみ底面までは34 cmの深さとなる。壁は比較的直に近い立ち上がりを示し逆凸状の断面を呈する。

堆積土は黒褐色土の単層で、細い木根と大小の礫を多く含んでおり、礫は投棄されたものと推察される。出土遺物はなく、時期と性格は不明である。

4号 (Bh21) 円形土壌 (第97-1図 第88表)

底面にある浅い円形の小ピットと重複する可能性もあり、堆積土の状況から本土壌が新しくなる。しかし、本来的に本土壌底面の凹凸であることも否定できず重複の有無は断定できない。



第97—1图 1~9号円形土壌

楕円形の平面で、規模は開口部で130 cm×175 cm、底部で122 cm×168 cm、検出面からの深さは11 cmあり、壁は直に近い上がりを示すが浅いため皿状の断面を呈する。

堆積土は、黒褐色土と黒色土の2層からなり全般に小礫を含んでいる。出土遺物はなく、時期性格とも不明である。

5号 (Bj03) 円形土壌 (第97-1図 第88表)

5号掘立柱建物跡と重複するが先後関係は不明である。平面形は楕円で、開口部で190 cm×235 cm、墳底部で175 cm×225 cm、検出面からの深さは10 cm～20 cmを計り、壁は外に開く立ち上がりで皿状の断面を呈するが、底面は凹凸があり平坦ではない。

堆積土は極少の焼土を含む黒色土と、シルト混入の黒褐色土からなり、遺物はなく、時期と性格は不明である。

6号 (Bj06) 円形土壌 (第97-1図 第88表 写真図版42)

5号掘立柱建物跡柱穴No14と重複し本土壌が古い。平面は楕円形で、規模は開口部が150 cm×177 cm、墳底部で85 cm×92 cm、検出面からの深さは55 cmあり、壁は外に開く立ち上がりを示し、ボール状の断面を呈する。

堆積土は焼土と炭を少量含む黒色土の1層と、黄褐色粘土と礫を含む黒褐色土の2層、粘土と黒褐色土の混合土に黄褐色粘土と灰色粘土およびこぶし大の礫を含む3層とからなり、2層、3層には土師器の小破片を含み水酸化鉄がみられる。ほぼ水平な堆積状況で人為的埋土が考えられ、特に、2層と3層は可能性が強い。

近世と推察される5号掘立柱建物跡より古く、それ以前の時期も推察できるが、堆積土中の土師器小破片は時期決定の積極的資料たり得ず上限は特定できない。性格は不明である。

7号 (Lc65) 円形土 (第97-1図 第88表)

他遺構との重複はない。平面形はほぼ円形で、開口部は60 cm×65 cm、墳底部で43 cm×45 cm、検出面からの深さは12 cmを計り、壁は外開きの立ち上がりで皿状の断面を呈する。

堆積土は黒褐色土および黒色土と下に焼土層をもつ。出土遺物はないが、竪穴住居跡と同時期に推察される24号焼土遺構および25号焼土遺構があり、前者は本土壌の約4 m北、後者は約4.5 m南に位置し、三者と後述する8号土壌は南北の直線上に乗る配列になり、これらと直接的関連をもつ遺構が周辺にないことが、むしろ、本土壌と8号土壌・24号焼土遺構・25号焼土遺構の相関を強めること、本遺構の堆積土に焼土層をもつことなどから、24号焼土遺構・25号焼土遺構とはほぼ同時期かと推察される。性格は不明である。

8号 (Lb65) 円形土壙 (第97-1図 第88表)

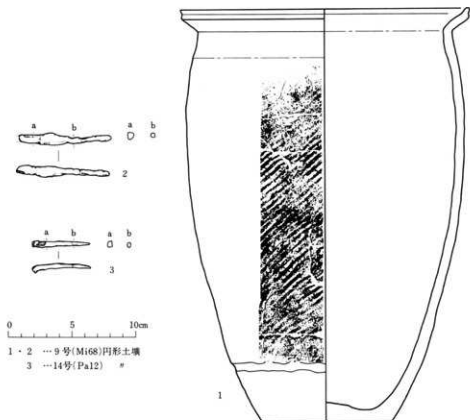
他遺構との重複はない。楕円の平面形で、規模は開口部で56cm×70cm、壙底部は30cm×35cm、検出面からの深さは20cmあり、壁の立ち上がりは外開きで皿状の断面を呈する。

堆積土は砂質の黒色土で単層である。本土壙の1m北に24号焼土遺構がある。堆積土は単純で遺物も含まないが、7号土壙の項で前述したように24号焼土遺構・25号焼土遺構と同時期の可能性もある。性格は不明である。

9号 (Mi68) 円形土壙 (第97-1図 第88表 写真図版42)

他遺構との重複はないが南西4mに直刀出土の26号焼土遺構がある。ほぼ円形の平面形で中段があり中央で最も深くなる。規模は開口部で130cm×140cm、中段で55cm×65cm×壙底部は35cm×40cmあり、検出面からの深さは中段までが50cm、中段以下が16cmあり、最深部は66cmとなる。壁は中段以下で外開き、中段以上は比較的直に近くなり、逆凸状の断面を呈する。

土壙内の堆積土は5層に細分されるが、4層を除く各堆積土は量の多少とあり方の相違はあるものの焼土を含んだ黒色土または黒褐色土であり、1層と2層では土器片を含み、特に2層



第97-2図 9号(Mi68)・14号(Pa12)円形土壙出土遺物

で多量の土器片と炭を認めた。

堆積土中からではあるが実測可能な土師器甕と鉄製品が出土しており、土器片の出土も多いことから、竪穴住居跡とほぼ同時期の土壌と想定されるが性格は不明である。

出土遺物 (第97-2図)

ロクロ成形の甕形土器と器種不明の鉄製品が出土している。Na1は叩目が施され、格子目状になっている。下端にはヘラケズリがあるが単位ははっきりしない。輪積み成形と思われ、ヘラケズリがある部分に指に依る圧痕が残る。口径23cm、底径10.2cm、器高32.7cm、最大径は口縁部にある。浅黄橙色を呈す酸化焙焼成に依るものである。Na2の鉄製品は、一方の端部が欠損している不完全品である。

他に破片が埋土中から出土している。淡緑の自然軸を有す須恵器片(長頸壺片か?)、糸切A・B類片、土師器甕片多数等がある。土師器甕の底部片には糸切痕を有すものが一点含まれる。他は体部の細片であり、ロクロ・非ロクロ成形の二様がある。

10号(Ng37)円形土壌 (第98図 第88表)

重複はないが、南1mに10号掘立柱建物跡、6.5mに11号土壌、南東11mに12号土壌がある。平面形は円形で、開口部80cm×80cm、壙底部63cm×65cm、検出面からの深さ20cmの規模を計り、壁は外開きに立ち上がり洗面器状の断面を呈する。

堆積土は単層で、粘性に乏しくボロボロした灰黄褐色土で乾燥すると白っぽくなる。粒状のシルトと黒色土のブロックが混入していて人為的埋土の可能性がある。出土遺物はなく、性格不明であるが、堆積土の状況から比較的新しい時期が想定される。

11号(Ni37)円形土壌 (第98図 第88表)

10号掘立柱建物と重複し先後関係は不明、10号土壌および12号土壌との位置関係は、10号土壌の項で述べたとおりである。

平面形は円形で、開口部で70cm×70cm、壙底部は50cm×55cm、検出面からの深さ20cmの規模で、壁は外開きに立ち上がり洗面器状の断面を呈する。

堆積土は10号土壌と類似し、出土遺物はなく、時期と性格は10号円形土壌と同様である。

12号(Oa33)円形土壌 (第98図 第88表)

重複はないが、10号土壌と11号土壌との位置関係は前述のとおりである。楕円に近い平面形を呈し、規模は開口部で85cm×100cm、壙底部で70cm×82cmを計り、検出面からの深さは8cmであるが、検出面が10号・11号土壌より相当削られている。壁は外開きに立ち上がり皿状の

断面を呈する。

堆積土は10号土壌に類似し、出土遺物はなく、時期と性格は10号円形土壌と同様である。

13号 (Oj18) 円形土壌 (第98図 第88表)

S 87-S 102、W 09-W 21の範囲に13号土壌～20号土壌の類似する8土壌が集中して位置するが、土壌相互の重複はなく、配置の規則性は不明である。

本土壌は楕円の平面形で、規模は開口部で105cm×115cm、壙底部は100cm×112cm、検出面からの深さが10cmであり、外開きの立ち上がりの壁で皿状の断面を呈する。

堆積土は黒褐色土の単層で、黒色土がブロックまたはまだら状で全般に混入した攪乱状を呈し、乾燥時には白っぽくなり、ひび割れが顕著になる。人為的な埋土の可能性が高い。出土遺物はなく、性格は不明であるが、堆積土から比較的新しい時期が想定される。

14号 (Pa12) 円形土壌 (第98・97-2図 第88表)

重複はない。ほぼ円形の平面形を呈して、規模は開口部100cm×112cm、壙底部が93cm×105cm、検出面からの深さは9cmを計り、壁は外開きに立ち皿状の断面をもつ。

堆積土は13号土壌と類似し、上面から釘の出土をみるが、時期と性格は13号円形土壌と同じ。

15号 (Pb15-1) 円形土壌 (第98図 第88表)

重複はない。ほぼ円形の平面形を呈して、規模は開口部が90cm×100cm、壙底部75cm×85cm、検出面からの深さは8cm、壁は大きく外に開き皿状の断面を呈する。

堆積土は13号土壌と類似し、遺物の出土はなく、性格と時期は13号円形土壌と同様である。

16号 (Pb15-2) 円形土壌 (第98図 第88表)

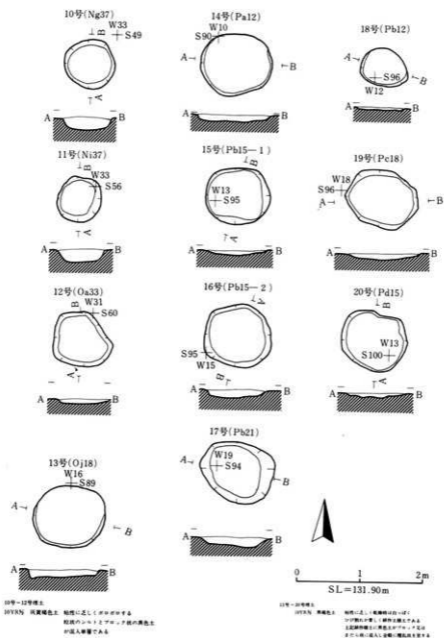
重複ない。ほぼ円形の平面形で、規模は開口部で100cm×105cm、壙底部が83cm×88cm、検出面からの深さは13cmを計り、壁の立ち上がりは外開きて皿状の断面をもつ。

堆積土は13号土壌と類似し、遺物の出土はなく、性格と時期は13号円形土壌と同様である。

17号 (Pb21) 円形土壌 (第98図 第88表)

15号掘立柱建物跡と重複する。楕円状の平面形を呈し、規模は開口部で95cm×115cm、壙底部は72cm×83cm、検出面からの深さ14cmを計り、外開きの壁の立ち上がりで皿状の断面を呈する。

堆積土は13号土壌と類似し、出土遺物はなく、性格と時期は13号円形土壌と同様である。



第98図 10号~20号円形土壺

18号 (Pb12) 円形土壺 (第98図 第88表)

重複はない。楕円状の平面形を呈して、規模は開口部で60cm×77cm、壺底部は56cm×65cm、検出面からの深さが4cmあり、外開きの壁の立ち上がりで皿状の断面をもつ。

堆積土は13号土壺と類似し、出土遺物はなく、性格と時期は13号円形土壺と同様である。

19号 (Pc18) 円形土壌 (第98図 第88表)

15号掘立柱建物跡と重複する。楕円状の平面形を呈し、規模は開口部で90cm×110cm、墳底部が73cm×100cm、検出面からの深さは8cmを計り、外開きの壁の立ち上がりで皿状の断面を呈する。

堆積土は13号土壌と類似し、出土遺物はなく、性格と時期は13号円形土壌と同様である。

20号 (Pd15) 円形土壌 (第98図 第88表)

重複はない。楕円状の平面形を呈し、規模は開口部で90cm×105cm、墳底部は80cm×95cm、検出面からの深さは7cmで、大きく外に開く壁の立ち上がりで皿状の断面を呈する。

堆積土は13号土壌と類似し、出土遺物はなく、性格と時期は13号円形土壌と同様である。

21号 (Sd80) 円形土壌 (第111-1図 第88表)

Sb77グリットに北端をもち、築地内溝まで約50mを南北に走る9号溝の北端から、約7m南で重複する。先後関係を示す積極的状况に欠けるため明らかでないが、土壌の西縁で溝底面レベルのふくらみがあり、土壌構築との関連も想定されることや、土壌最深部が西半に寄りこの位置は溝が南北に通る直下にあり、溝の性格を排水溝と仮定すると水の流入によってえぐりできた部分との想定もでき、ほぼ同時期に比定できるし、溝が57号堅穴住居跡より古いと推定されることから、堅穴住居跡とほぼ同時期もしくは以前と考えられる。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部で150cm×150cm、墳底は130cm×140cmで最深部は45cm×65cmを計り、底面は西半中央の最深部に向って斜めに下がる。壁は比較的直に近い立ち上がりで、北縁と西縁の一部で奥に入るが本来的か否かは不明である。

堆積土の観察記録をしなかったため不明である。出土遺物は全くない。

(2) 長方形土壌

平面形が長方形で、規模、堆積土、方向等が非常に類似する土壌である。検出はBh15グリット、Fb03グリットで各1基、最も密集するのは、E・FブロックでN204-N219とE12-E21の範囲で2号長方形土壌から9号長方形土壌まで検出されており、更に周辺に未精査土壌が10基内外認められる。

これらの土壌の規模は開口部で短軸100cm～147cm、長軸167cm～224cmの範囲で、平均の短軸は122cm、長軸は196cmとなる。深さは16cm～48cmで平均は23.6cmとなり、壁の立ち上がりはやや外開きのものもあるが本来は直に近いものと推察でき、底面は平坦である。

堆積土は1号長方形土壌を除き、黒色土の胎土にブロック状のシルトを含む点で共通し、人

為的埋土と推察でき、重複する場合、旧土壌の壁が直に明瞭に残ることから新土壌は間をおかず埋土した可能性がある。出土遺物は全くなく、時期や性格は明らかでないが、未精査土壌の中には未精査の竪穴住居跡を切っているものがあり、また、1号長方形土壌は4号掘立柱建物より新しい。

なお、長軸方向は東西ないし南北を向き、特に、密集する2号から9号長方形土壌は、いずれも、東西を向くのが特徴的である。ただし、周辺未精査土壌には南北を向くものもあるが、一定の範囲にまとまりをもっている。

1号 (Bh15) 長方形土壌 (第99図 第88表)

Bブロックにあり、4号掘立柱建物跡と重複し柱穴No12を切っており、建物跡より新しい。長軸はほぼ真北を向き、開口部で100cm×197cm、壙底部は95cm×185cm、検出面からの深さ17cmある。壁は南辺でやや外開きになるが他は直に近く立つ。

堆積土は黒色土とシルト混合の単層で、籾、炭、焼土を若干含む。

2号 (Eh68-1) 長方形土壌 (第99図 第88表 写真図版43)

3号長方形土壌と重複し、大半が3号によって切られており東辺部を残すのみである。長軸方向はほぼ3号と一致するものと推察され、遺存部分で知れる短軸は開口部で125cm、壙底部で115cm、検出面からの深さ25cm、壁はほぼ直に近い立ち上がりである。

堆積土は黒色土に5mm～2cmの径の黄褐色シルトを密に含んだ単層である。

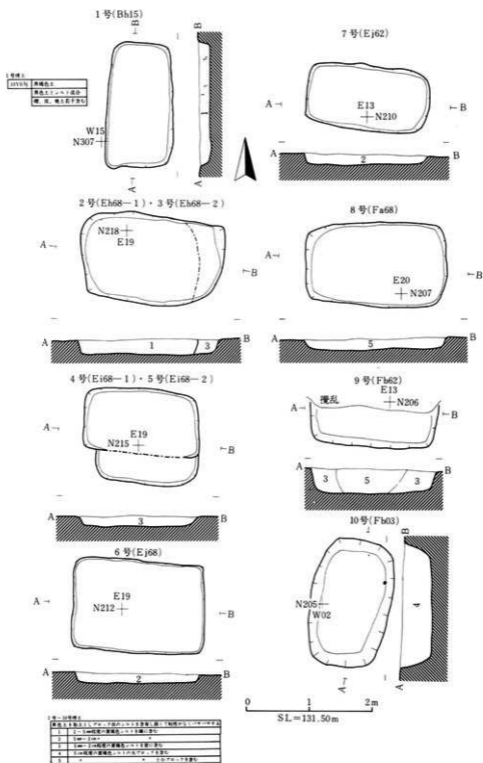
3号 (Eh68-2) 長方形土壌 (第99図 第88表 写真図版43)

2号長方形土壌と重複し、2号土壌より新しい。長軸方向はN-96°-Eで、開口部は140cm×190cm、壙底部で125cm×175cm、検出面からの深さは25cm、壁はほぼ直に立つ。

堆積土は黒色土に径2mm～5mmほどの黄褐色シルトを疎に含む単層である。

4号 (Ei68-1) 長方形土壌 (第99図 第88表 写真図版43)

5号長方形土壌によって北半を切られる。長軸方向は5号とほぼ同じと推察され、遺存部により長軸開口部が167cm、壙底部は153cm、検出面からの深さ16cmを計り、壁の立ち上がり状況と堆積土は明らかでない。



第99図 1号~10号長方形土坑

5号 (Ei68-2) 長方形土塊 (第99図 第88表 写真図版43)

4号長方形土塊と重複し4号より新しい。長軸方向はN-93°-Eで、開口部で105cm×180cm、底部は100cm×168cm、検出面から17cmの深さで、壁はやや外開きに立つ。

堆積土は2号長方形土塊と類似する。

6号 (Ej68) 長方形土塊 (第99図 第88表 写真図版43)

重複はない。長軸方向はN-92°-Eで、開口部で147cm×207cm、塊底部が141cm×200cm検出面からの深さ15cmを計り、壁は直に近く立つ。

堆積土は黒色土に径5mm～2cmほどの黄褐色シルトを疎に含んだ単層である。

7号 (Ej62) 長方形土塊 (第99図 第88表 写真図版43)

重複はない。長軸方向はN-96°-Eで、開口部は100cm×195cm、塊底部で90cm×185cm、検出面からの深さは17cm、壁は東辺でやや外開きのほかは直に近く立つ。

堆積土は6号長方形土塊に類似する。

8号 (Fa68) 長方形土塊 (第99図 第88表 写真図版43)

重複はない。長軸方向はN-92°-Eで、開口部が132cm×224cm、塊底部は124cm×207cm検出面からの深さ16cmを計り、西辺はやや外開きに立つが他はほぼ直に近く立つ壁である。

堆積土は黒色土に5cmほどの黄褐色シルトの大ブロックとより小さなブロックを含んだ単層である。

9号 (Eb62) 長方形土塊 (第99図 第88表)

北半は攪乱によって破壊されているが重複はない。長軸方向はN-94°-Eで、遺存部分の開口部長軸は200cm、塊底部は182cm、検出面からの深さ40cmを計り、壁は直に近く立つ。

堆積土は黒色土に黄褐色シルトの大・小ブロックを含む層を中に、壁寄りにはシルトの小ブロックを密に含む層との2層からなる。

10号 (Fb03) 長方形土塊 (第99図 第88表)

重複はなく、9号長方形土塊の西約14mに位置する。他土塊に比しややふくらみをもつ平面であり、長軸方向はN-6°-Eで、開口部は127cm×203cm、塊底部で92cm×163cm、検出面からの深さ48cmを計り、壁はやや外開きの立ち上がりである。

堆積土は5cmほどの黄褐色シルトの大ブロックを含む黒色土の単層である。

(3) 方形土壌

長方形土壌とは類を異にするとみられる方形平面形の土壌を一括したものであり、いずれも Ede ブロックの東半および西半で検出されたものである。

1号方形土壌と2号方形土壌は、前者を北側にほぼ接する状況に位置し、同規模、同形態および真北に対する南北方向は一致し、堆積土も後の投棄とみられる2号土壌のシルト部分を除き類似の様相を呈し、人為的埋土と考えられる。

1号・2号方形土壌とも、堆積土平面で二重の様相を示すことから各々別土壌の重複の可能性も考えられるが、内・外平面が相似形で、外に対し内側が意識的に相関された入り方であること、外を埋めた後の内側の掘り込みとしたとき、内側壁の立ちが直に近く堆積土に流れこみのないことから、内側壁と外側壁の間に内側規模の方形枠を施設し外側に埋土し固定したものと考えられるし、内側堆積土が攪乱部を除き単層であることから、内側も一気に埋土し固定した可能性と、枠が地表面上まで及ぶものであった可能性がある。

以上から、1号・2号方形土壌は、外側が本体構築のための掘り方で、本体は枠（木枠）で囲った施設であったと推定し、両者が同じ用途で、ほぼ同時期につくられたものと考えられる。用途を確証づけるものはないが、枠をもつ施設で堆積土中に多量の水酸化鉄を含む特徴があげられ、時期的には12号竪穴住居跡を切っており、住居跡期よりも新しく、2号土壌堆積土には近世以降の陶磁器片を含み、更に、空中写真による堆積土状況が白く竪穴住居跡のものと全く異なり、むしろ水田畦畔跡に類似することなどを総合すると比較的新しい時期が想定される。

3号土壌は、1号・2号方形土壌の西約17mに位置するが、1号・2号土壌とは全く異なる様相もつものである。

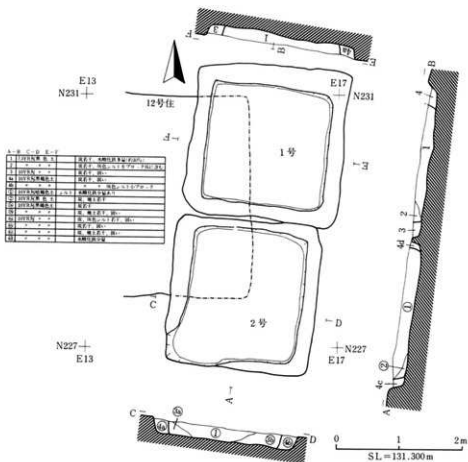
1号 (Ed65) 方形土壌 (第100-1・2図 第88表 写真図版44・73)

12号竪穴住居跡の東半と重複し、より新しい。正方形の平面形で、南北方向はN-5°-E、掘り方外周から20cm~30cm内に本体壁がある。掘り方部分の開口部では240cm×240cm、墳底部で225cm×230cm、本体部は開口部190cm×190cm、墳底部185cm×185cmあり、検出面からの深さは15cmを計り、底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近く立つが材の遺存はない。

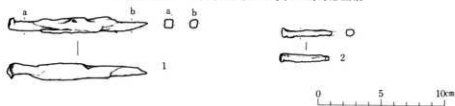
堆積土は掘り方部で固い黒褐色土が主体で、若干の炭と部分的に灰色シルトのブロックを含む、本体部は黒色土のほぼ単層で、多量の水酸化鉄がみられる。釘状の鉄製品が若干出土している。

2号 (Ee65) 方形土壌 (第100-1図 第88表 写真図版44)

12号竪穴住居跡の東半と重複し、より新しい。正方形の平面形で、南北方向はN-5°-Eで



第100-1図 1号(Ed65)・2号(Eo65)方形土坑

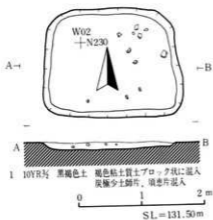


第100-2図 1号(Ed65)方形土坑出土遺物

ある。南西隅から本体の大半が後の掘さくをうけた形跡があり、掘り方外周から15cm~25cm内に本体壁がある。掘り方部分開口部は233cm×235cm 坑底部は220cm×222cm、本体部は開口部で185cm×210cm、坑底部で175cm×200cmと若干南北に長い。検出面からの深さは20cmを計り、平坦な底面で、壁は垂直に近く立つが材の遺存はない。

堆積土は掘り方は炭と焼土を若干含む黒褐色土で固く、本体部の大半は後の掘さく後に投棄されたとみられる暗褐色シルトであり、本来の堆積土である黒褐色土は南東隅に主として残る。暗褐色シルト中に陶磁器片と土師器片を含み、他に釘状の鉄製品が一点出土している。

3号 (Ed03) 方形土壇 (第101図 第88表 写真図版44)



第101図 3号 (Ed03) 方形土壇

他遺構との重複はない。平面形は長方形で東西に長く、長軸方向はN-90°-Eである。規模は開口部で170cm×210cm、壇底部は150cm×190cm、検出面からの深さは12cmあり、外開きに立ち上がる壁で、底面は平坦である。

堆積土はブロック状の褐色粘質土と小円礫、多量の粒状シルトを混入する黒褐色土の単層で、土師器、須恵器の破片が堆積土中と底面にみられる。性格は不明であるが、遺物混入の状況から竪穴住居跡と同時期に比定される可能性もある。

6 方形竪穴状遺構

いわゆる竪穴とした平安期の遺構と特定できないものを「方形竪穴状遺構」と呼称し一括したもので、Bブロック西半およびEブロック東半で検出された。

1号 (Bd15) 方形竪穴状遺構 (第102図)

(重複) 3号掘立柱建物跡柱穴No4とNo5が本遺構堆積土下の検出であり、3号掘立柱建物跡は本遺構より先行し、本遺構堆積土を若干掘りくぼめた29号焼土遺構は後のものである。

(規模 平面形 方向) 東西2.0m、南北3.0m、面積6.0㎡で、南北に長い隅丸の長方形を呈するが、南東隅は攪乱穴によって破壊されている。長軸方向はN-20°-Wである。

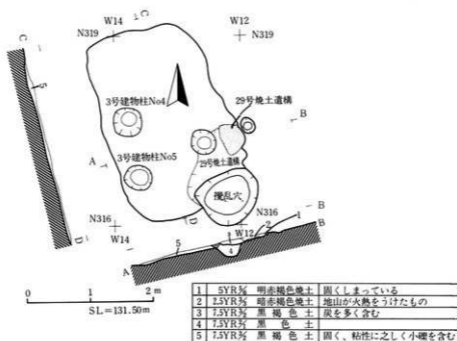
(堆積土) 比較的固く、粘性に乏しい小礫を含んだ黒褐色土の単層である。

(壁) 非常にゆるやかな傾斜で、立ち上がりは不明瞭であり、いわゆる壁状を呈するものではない。検出面からの深さは4cm～8cmである。

(底面) 比較的平坦な面を呈し、砂質の地山で生活痕は判然としない。

(付属施設) 認められない。

(遺物他) 出土遺物はない。時期的には3号掘立柱建物跡より新しいことから、近世を上限とし下限は特定できず、性格は明らかでない。



第102図 1号 (Bd15) 方形竪穴状遺構

2号 (Bg24) 方形竪穴状遺構 (第103-1・2図 写真図版44)

(重複) 認められない。

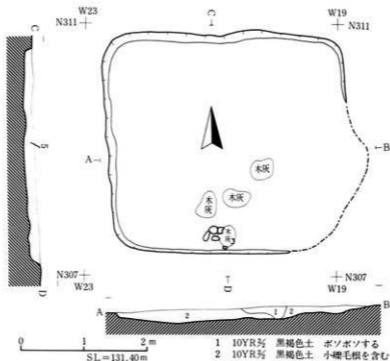
(規模 平面形 方向) 東西3.85m、南北3.45m、面積12㎡あり、若干東西に長い隅丸状の方形であり、東辺に外へのふくらみをもつが周辺の攪乱等もあり本来的なものか確認がない。南北方向軸はほぼ真北を向く。

(堆積土) 1層としたボソボソした黒褐色土を若干みるが、2層とした小礫混りの毛根を含んだ黒褐色土が主体をしめ、ほぼ単層である。

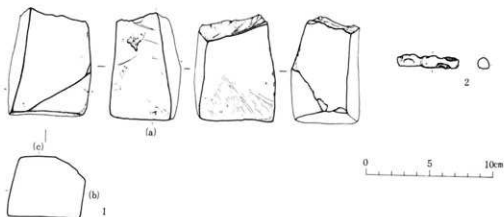
(壁) 北壁と南壁は比較的直に近く立つが、東壁と西壁は外開きに立ち、特に東壁で著しく堆積土中には崩壊土の痕跡はないが、周辺の攪乱状況から壁の破壊の可能性もある。検出面までの壁高は10cm~15cmを計る。

(底面) 地山砂礫面を底面とし比較的起伏があり、焼土、炭等はなく積極的な居住痕は認められない。底面南半に4ヶ所の白色木灰の薄い堆積をみるが、状況からして現地性のものでなく一部は礫に混在し、意図的に本遺構で使用したものか、投棄か明らかでない。

(付属施設) 認められない



第103-1図 2号 (Bg24) 方形竪穴状遺構



第103—2図 2号 (Bg24) 方形竪穴状遺構出土遺物

(遺物他) 砥石・釘状の鉄製品各1点が出土している。時期決定の積極的資料とはならないが、白色木灰は視覚的には新しい木灰と類似する。

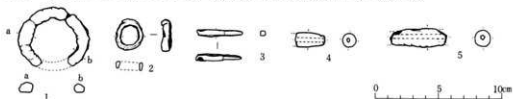
3号 (Ed56) 方形竪穴状遺構 (第104—1・2図 写真図版45)

(重複) 13号竪穴住居跡の南東隅を本遺構が切っている。

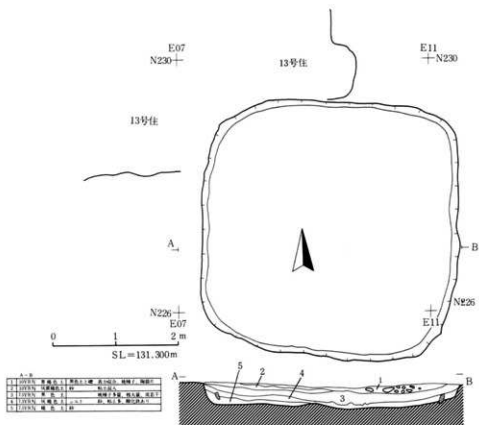
(規模 平面形 方向) 東西4.0m、南北4.0m、面積は14.82㎡あり、隅丸の正方形を呈する。南北方向軸はほぼ真北を向く。

(堆積土) 5層に細分されるが、包含物および堆積過程から想定したとき、いずれも人為的なものとの判断にたつ、すなわち、前述規模の方形竪穴を掘り、砂と粘土混りのシルトを埋土したのが5層と4層で、その上に大量の籾と多くの桃の種子を含む黒色土の3層が形成される。大量の籾は用途上意図的に入れたものか、単なる投棄かは判然としないが自然混入とは考えられない。粘土が混る砂と礫を多く含んだ黒褐色土の2層と1層が3層を覆い、前者には桃の種子と陶磁器を含む。堆積土断面はややレンズ状を呈するものの、4層と5層・3層・1層と2層を堆積過程の単位としたとき、各単位層は面的にほぼ全面に広がりをもつ。なお、検出面での堆積土は空中写真によると白く、竪穴住居跡等の黒い状況と全く異なり1号方形土壌や2号方形土壌と酷似する。

(壁) 直に近い立ち上がりをもち、検出面までの高さは25cm～35cmを計る。



第104—2図 3号 (Ed56) 方形竪穴状遺構出土遺物



第104-1図 3号 (E056) 方形整穴状遺構

(底面) 地山シルトを底面とするが、大きな凹凸があり面的に平坦とは言えない。生活痕は全く認められない。

(付属施設) 認められない。

(遺物他) 遺物としては環状鉄製品2ヶ、寛永通寶1枚(第147図8)近世以降の陶器3点(第148図11・12・13)が堆積土中から出土した、各々については別項で一括して後述する、なお多量の桃種子を出土したが、これについては鑑定結果でふれる。

7 焼土遺構

現地で火を用いたことが明瞭なもの、必ずしも明らかではないが焼土を多量にもち火の使用との関連が想定されるものを一括したもので、形態的にも一定したものではない。

検出地区および形態の類似性からみると、A・B区にまたがる1号～9号焼土遺構はN327-N333、W15-W24の範囲に集中し北東-南西方向に並び、形態的には2号は深さがあり異なる外に、4号・8号に煙出し状の小張り出しをもつが、平面はより円形に近い楕円形で規模も同程度の皿状を呈するなど非常に類似性があるとともに、1号・2号、5号・6号、7号・8号のようにわずかな切り合いで双円状をなすのも特徴的であり、先後関係はあってもほぼ同時期の遺構と想定される。また、10号～14号・16号焼土遺構は、N315-N324、W12-W19の範囲にあり北東-南西方向へ並ぶ点は前者と類似し、規模、形態的にも大差はない。

一方、17号～21号焼土遺構はB区のN316-N324、E18-E21にあり、特に19号～20号は3m×6m四方の中に集中する。削平のため明確でないものもあるが、煙出しをもつ竈的構造が想定され、特に20号焼土遺構は明確である。

その他では、24号・25号焼土遺構がN18-N27、E15-E13の中に、27号・28号焼土遺構がS63-S66、W24-W27にあり、比較的近接する中にある。

時期的には不明のものが多いが、遺物と重複からほぼ推定できるものもある。

1号 (Aj18-1) 焼土遺構 (第105図 第89表 写真図版45)

2号焼土遺構を切り、更に柱穴状ピットを覆い、いずれよりも本遺構は新しい。また、1号～9号焼土遺構は、およそN328-N332・W14-W21の範囲にあり、3号を除く各遺構は北東から南西に帯状に走り相接近して位置する。

平面は楕円形、短径70cm×長径85cm、検出面からの深さ6cmで皿状の断面を呈する土壌であり、現地火熱痕は明瞭でない。

堆積土は暗褐色焼土で多量の炭を含んでおり、下の柱穴状ピットと異なる。遺物の出土は全くない。性格と時期は不明である。

2号 (Aj18-2) 焼土遺構 (第105図 第89表 写真図版45)

1号焼土遺構と下の柱穴状ピットに北縁を切られる。平面は楕円形で、短径70cm×長径80cm、検出面からの深さ45cmを計り、箱状の断面を呈する円筒状の土壌で現地火熱痕は明瞭でない。

堆積土は上層に焼土と炭を多量に含み固くしまった黒褐色土を、下層に暗褐色または赤褐色の焼土があり炭を多量に含む、明らかに人為的な埋土である。遺物の出土は全くなく、性格と時期は不明である。

3号 (Aj18-3) 焼土遺構 (第105図 第89表)

重複はなく、1号焼土遺構の東約2.7mに位置する。平面は不整形で、短径40cm×長径80cm検出面からの深さ15cm、皿状の断面をもつ土壇状であり、堆積土中に現地火熱を認める。

堆積土1層の焼土は現地火熱によるもので非常に固く、シルトや黒褐色土の堆積土上面に形成されている。出土遺物はなく、性格と時期は不明である。

4号 (Aj21-1) 焼土遺構 (第105図 第89表 写真図版45)

重複はなく、北東に5号焼土遺構、南西に8号焼土遺構が隣接する、平面は径80cm～85cmの円形の東側に径30cm～35cmの半円状の小張り出しをもつダルマ状を呈する。検出面からの深さは円形部最深度で18cm、小張り出し部で15cmを計り、円形部は土壇状で底面中央で若干落ちこみ張り出し部は円筒状に近く、東西断面はパイプ状に近い様相を呈する。

堆積土は小張り出し部に焼土を含む黒褐色土の1層、円形部では小豆大の焼土ブロックを多量に含む黒褐色土の2層、その下にシルトが現地火気使用のため明赤褐色の焼土化した3層があり、この層は検出面の円周沿いでリング状に認められた。すなわち、この層は土壇面を皿状に覆う状況を呈する。最下層の4層は焼土と多量の炭を含むシルトで火熱をうけている。

出土遺物はなく、時期は明らかでない。円形部では現地火気使用が明瞭で、火気使用を用途とする遺構であり、円形部は本体であって、小張り出し部は煙出しを想定できるが確証はなく本体の上部構造の有無も明かではない。

5号 (Aj21-2) 焼土遺構 (第105図 第89表 写真図版45)

6号焼土遺構によって北東縁を切られる。平面は楕円形で、短径70cm×長径80cm、検出面からの深さは15cmの土壇状で、底面はほぼ平坦で壁はやや外開きに立つ洗面器状の断面を呈する。

堆積土は焼土を含む黒褐色土の上に、炭を多量に含む暗赤褐色焼土、最下層がにぶい黄褐色シルトで現地火熱によって焼けており、暗赤褐色焼土は検出面でリング状に認められ4号焼土遺構の3層のあり方と様相が似る。出土遺物はなく、時期は不明である。現地火熱があり火を用いるための遺構と推察できるが、明確な用途は不明である。

6号 (Aj21-3) 焼土遺構 (第105図 第89表 写真図版45)

5号焼土遺構の北東縁を本遺構の南西縁が切り、南東に1号焼土遺構が隣接して位置する。平面は楕円形で、短径65cm×長径75cm、検出面からの深さは17cmの土壇状で、底面は南東に若干高いがほぼ平坦で、壁の立ち上がりは直に近く壺状の断面を呈する。

堆積土は小豆大の焼土ブロックと小円礫を多量に含んだ黒褐色土の1層、シルトが現地火熱

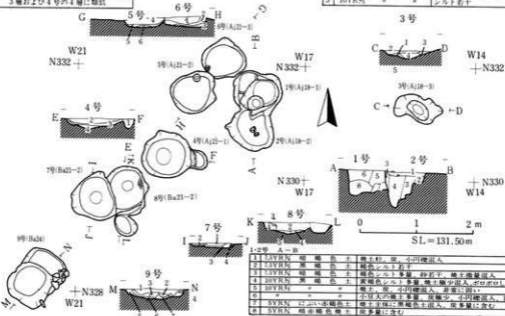
5・6号 G-H

1	10YR5	黒褐色土	2号の4層に類似
2	5YR5	明赤褐色土	4号の3層 =
3	10YR5	にじみ黄褐色土	4号の4層 =
4	10YR5	黒褐色土	焼土少量含む
5	5YR5	明赤褐色焼土	2号の4層に類似
6			3層および4号の4層に類似

1	10YR5	黒褐色土	2号の4層に類似
2	5YR5	明赤褐色土	4号の3層 =
3	10YR5	にじみ黄褐色土	4号の4層 =
4	10YR5	黒褐色土	焼土少量含む
5	5YR5	明赤褐色焼土	2号の4層に類似
6			3層および4号の4層に類似

3号 C-D

1	5YR5	明赤褐色焼土	非常に固い
2	10YR5	明黄褐色シルト	黒褐色土混入されている
3	10YR5	黒褐色土	炭多量、小粒状のシルト混入
4	10YR5	=	プロット状のシルト、炭混入
5	10YR5	=	シルト若干



9号 M-N

1	10YR5	黒褐色土	4号の1層に類似
2	5YR5	明赤褐色焼土	2号の8層 =
3	10YR5	明褐色焼土	7号の3層 =
4	10YR5	黒褐色土	焼土粒、炭塊少量混入
5	5YR5	にじみ赤褐色土	2号の4層に類似
6	10YR5	褐色シルト	焼けている、炭多量にあり
7	5YR5	明赤褐色焼土	4号の3層に類似

7号 I-J

1	10YR5	黒褐色土	2号の4層に類似
2	=	=	3号の4層 =
3	10YR5	明褐色焼土	下部に多量の炭あり、小粒状混入
4	5YR5	にじみ赤褐色土	焼土と黒褐色土の混入

8号 K-L

1	10YR5	黒褐色土	4号の1層に類似
2	=	=	2号の6層 =
3	5YR5	にじみ赤褐色土	2号の4層 =
4	5YR5	明赤褐色焼土	4号の3層 =
5	10YR5	にじみ黄褐色シルト	4号の4層 =

第105図 1号～9号焼土遺構

で焼土化した2層、炭多量と焼土を含み火熱をうけたにじみ黄褐色シルトの3層からなり、2層は検出面の円周北半で半リング状に認められた。遺物出土はなく、時期不明。用途は5号焼土遺構等と同様と推察される。

7号 (Ba21-1) 焼土遺構 (第105図 第89表 写真図版45)

8号焼土遺構の外縁を切る。平面は楕円形で、短径75cm×長径85cm、検出面からの深さ9cmの土壌状である。底面は中央で若干落ちこみ、外開きの壁の立ちで皿状の断面を呈する。

堆積土は小豆大の焼土ブロックと小礫を多量に含む1層および明褐色で多量の炭を含む現地性焼土の3層が主体であり、3層は検出面円周にリング状に認められた。出土遺物はなく、時期は不明。5号焼土遺構等と同様の用途が推察される。

8号 (Ba21-2) 焼土遺構 (第105図 第89表 写真図版45)

西縁を7号焼土遺構に切られ、北東に隣接して4号焼土遺構がある。平面は径85cmほどの推定楕円形の南側に径35cm×40cmの楕円状の小張り出しをもつダルマ状を呈し、4号焼土遺構と類する。検出面からの深さは楕円部分最深部で20cm、小張り出し部で16cmを計り、楕円部は土壌状で底面中央部で若干落ちこみ、張り出し部は円筒状に近く、南北断面はパイプ状を呈す。

堆積土は小張り出し部で焼土を含む黒褐色土の1層、楕円部では小豆大の焼土ブロックを多量と小円礫を混入する黒褐色土の2層、3層に黒褐色土と焼土の混合土、4層は明赤褐色焼土で現地火熱による、5層は火熱をうけたにぶい黄褐色シルトで多量の炭を含む。4層は検出面円周沿いにほぼリング状に認められた。

出土遺物はなく、時期は明らかでない。4号焼土遺構と同様に楕円部は本体で、張り出し部は煙出し的なものを想定できるが確証はなく、上部構造の有無も不明である。用途は4号焼土遺構等と同様と推定される。

9号 (Ba24) 焼土遺構 (第105図 第89表 写真図版45)

完掘後の平面状況では北東側に旧、南東側に新の二遺構重複の可能性も想定されるが、検出時平面および堆積土断面からは明瞭に判別できない。したがって可能性を残しながらも一遺構として述べる。

平面形は隅丸方形で、短軸70cm×長軸100cm、検出面からの最深部は17cmの土壌状で、壁の立ち上がりは北東縁では直に近いが全般に外開きで、底面南西半に若干深い断面は皿状を呈する。

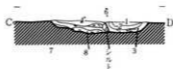
堆積土は1層に焼土を少量含んだ黒褐色土、2層・3層に暗赤褐色および明褐色焼土があり炭を多量に含む、4層・5層の暗褐色土にぶい赤褐色は焼土と黒褐色土の混土で、6層・7層は褐色シルトおよび明赤褐色焼土で、いずれも現地火熱をうけたものである。遺物は出土せず、時期は不明であるが5号焼土遺構等と同様の用途が想定される。

10号 (Bc18) 焼土遺構 (第106図 第89表)

重複はなく、約1m西に13号焼土遺構がある。楕円状の平面形で、短径80cm×長径130cm、検出面からの深さ20cmを計る土壌状で、若干外開きの壁の立ちで、底面に若干の凹凸はあるか洗面器状の断面を呈する。

堆積土は1層に若干の焼土と、礫を多量に含む黒褐色土があり投棄の可能性もある。2層は現地性の焼土で底面の一部に炭の層を認め、3層は小円礫含みの黒褐色土となる。出土遺物はなく、時期不明であるが、火の使用に関する遺構と想定できる。

W19
N324+



W12
+N324

11-12号 C-D

1	10YR5	黒褐色土	
2	10YR5	黒褐色土	
3	10YR5	黒褐色土	炭、焼土を多量に含む
4	10YR5	黒褐色土	焼土を若干含む
5	10YR5	黒褐色土	炭を多量に含む
6	10YR5	黒褐色土	焼土を多量に含む
7	10YR5	黒褐色土	炭、焼土を多量に含む
8	10YR5	黒褐色土	炭、多量と焼土を含む



11号(Be15-1)

12号(Be15-2)



13号 E-F

1	10YR5	黒色土	礫を若干含む
2	10YR5	黒褐色土	小礫を含む
3	10YR5	黒褐色土	焼土と多量の炭混入
4	5YR5	明褐色焼土	炭、礫を含む

13号(Bd18-1)



10号(Be18)



10号 A-B

1	10YR5	黒褐色土	焼土若干、礫多量混入
2	5YR5	赤褐色焼土	炭若干
3	10YR5	黒褐色土	小礫若干混入

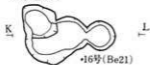
14号(Bd18-2)



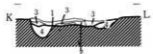
14号 G-H

1	5YR5	明褐色焼土	
2	10YR5	黒褐色土	砂礫、焼土、炭を含む
3	7.5YR5	黒色土	炭を多量に含む
4	5YR5	明褐色焼土	

3号建物P₁



16号(Be21)



16号 K-L

1	10YR5	黒褐色土	部分的に焼土と炭を含む
2	5YR5	暗赤褐色焼土	炭を含む
3	5YR5	暗赤褐色土	炭を含む
4	7.5YR5	黒色土	小礫を含む

15号 I-J

1	10YR5	黒褐色土	焼土混入
2	5YR5	暗赤褐色焼土	
3	7.5YR5	黒褐色土	炭、焼土若干混入

15号(Bf15)



0 1 2 m
SL=131.50m

N313+
W19

N313+
W12

第106図 10号-16号焼土遺構

11号 (Bc15-1) 焼土遺構 (第106図 第89表)

12号焼土遺構により南縁を切られるため平面形は明瞭でないが、不整の楕円もしくはダルマ状が想定される。規模は東西径が60cm、南北は不明であり、検出面からの深さは18cmの土壌状で、比較的外開きの壁で、底面は平坦であり洗面器状の断面を呈する。

堆積土は3層からなるが、いずれも黒褐色土で最下層に炭と焼土を多量に含む。現地火熱の有無は明瞭でない。出土遺物はなく、時期不明である。

12号 (Bc15-2) 焼土遺構 (第106図 第89表)

11号焼土遺構の南縁を切り南東底面の柱穴状のピットより新しい。平面形は明瞭でないが楕円形が想定され、東西径90cm、南北径は不明である。検出面よりの深さ15cmの土壌状で、比較的外開きの壁で、底面は壁ぎわに若干高くなるが洗面器状の断面をもつ。

堆積土は5層に細分されるが、いずれも黒褐色土で最上層を除き炭と焼土を多量に含むのが特徴で、11号焼土遺構の堆積土状況と類似する。現地火熱の有無は明瞭でない。出土遺物はなく、時期は不明である。

13号 (Bd18-1) 焼土遺構 (第106図 第89表)

西半を柱穴状小ピットに切られ、東約1mに10号焼土遺構がある。平面形は長楕円状が想定され、短径は不明であるが長径は100cmあり、検出面からの深さは9cmを計る土壌状である。外開きに立つ壁で皿状の断面を呈する。

堆積土は焼土と多量の炭を含む層を上、明赤褐色の現地性焼土を下層にもち、現地での火の使用がある。出土遺物はなく、時期不明であるが、火の使用に関連した用途が推察される。

14号 (Bd18-2) 焼土遺構 (第106図 第89表)

13号焼土遺構の南約2mにあるが、他遺構との重複は認められない。平面は楕円形で、短径90cm×長径110cm、検出面からの深さ27cmの土壌状である。断面はボールまたはなべ底状を呈している。

堆積土上面は一部攪乱をうけるが、1層に明赤褐色焼土、2層・3層に黒褐色土があり、前者では砂礫、焼土、炭を後者では多量の炭を含み、4層が明赤褐色焼土である。1層・4層の焼土は現地性か否か明らかではない。堆積土中に鉄製品を検出したが、時期を特定できるものではない。

15号 (Bf15) 焼土遺構 (第106図 第89表)

重複はない。平面楕円形で、短径65cm×長径80cm、検出面から深さ8cmの土壇状である。外開きの壁で、ほぼ平坦な底面で皿状の断面を呈する。

堆積土は1層から3層までが縦方向の断面を呈するが、面的には2層の極暗褐色焼土が、1層・3層の黒褐色土中にサークル状に入り、1層の黒褐色土に比較的焼土が混入する。現地火熱の有無は明らかでない。遺物の出土はなく、時期は不明である。

16号 (Be21) 焼土遺構 (第106図 第89表)

3号掘立柱建物跡柱穴No1および東側にあるピットを切り、これらより新しい。平面楕円形で、短径60cm×長径100cm、検出面からの深さ10cmの土壇状である。壁は外に開き、底面はほぼ平坦な皿状の断面を呈する。

堆積土1層は部分的に焼土と炭を含む黒褐色土であるが、2層・3層はいずれも炭を含む現地性の焼土で火の使用が認められる。出土遺構物はないが、近世と推定される3号掘立柱建物より新しく、上限は近世以前は考えられず下限は特定できない。

17号 (Bc68) 焼土遺構 (第107図 第89表 写真図版46)

重複はない、楕円の平面形の北側に方形の煙出し様の小張り出しをもったダルマ状の平面形を呈し、楕円部は短径50cm×長径70cm、方形小張り出しは24cm×24cm、検出面からの深さは10cmと5cmを計り、現状で上部構造は明らかではないが、竈的なものが想定される。底面は中央が最も深くなりボール状もしくはなべ底状の断面形を呈する。なお、上面削平の可能性が高い。

堆積土1層と2層は黒褐色土で、小ブロック状の焼土と1層ではシルトおよび土師器、須恵器片を各1点と鉄製品(第110-1図)を混入、3層は焼土含みのシルト、4層はシルトと炭を含む黒褐色土で、底面に火熱の痕跡を認めた。堆積土中の遺物は流入の可能性もあり、時期特定の積極的なものに欠け、時期は明らかでない。

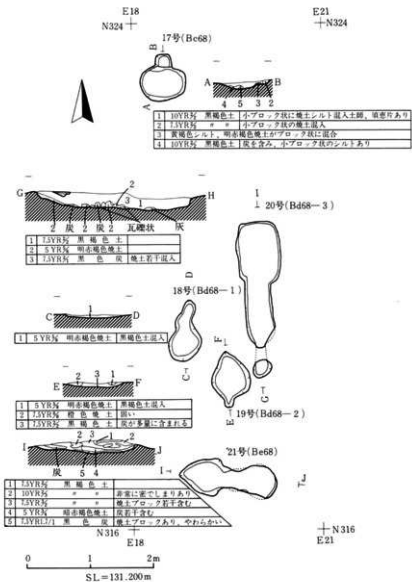
18号 (Bd68-1) 焼土遺構 (第107図 第89表)

重複はないが、19号焼土遺構の約0.9m北西および20号焼土遺構の約1.2m西に位置し、北に細いひょうたん状に近い平面形を呈し、北側先端が煙出し的部分の可能性があり、ほぼ真北を向く短径20cm～50cm、長径98cm、検出面からの深さ4cmで、相当削平されたものと推察され、現状な土壇状であるが近隣の焼土遺構と関連したとき、竈状であった可能性を否定できない。現状の断面は皿状である。

堆積土は明赤褐色の現地性焼土で、火の使用が認められる。遺物の出土はなく、時期不明。

19号 (Bd68-2) 焼土遺構 (第107図 第89表 写真図版47)

重複はないが、18号焼土遺構の約0.9m 南東および20号焼土遺構の煙出し部の西に隣接する。平面形は南端に煙出し様の突出部をもつ木ノ葉状を呈し、短径60cm×長径90cm、検出面からの



深さは7cmあり、削平が著しく18号焼土遺構と同様の可能性があり、現状の断面は皿状である。

堆積土は3層の多量の炭を含む黒褐色土が主体であるが、底面に火熱痕がある。出土遺物はなく、時期は不明である。

20号 (Bd68-3) 焼土遺構 (第107図 第89表 写真図版47)

重複はないが、西約1.2mに18号焼土遺構と、煙出し部の西に隣接し19号焼土遺構がある。明らかに竈の構造をもち、煙道、煙出し方向はN-180°-Eであり、北側に短軸70cm×長軸90cmの南北に長い長方形の灰原部が、南に短軸40cm×長軸100cmの南北に長く南端が煙道部に向けて狭まる燃焼部がある。燃焼部南端から径15cm、長さ18cmのくりぬきの煙道があり、25cm×30cmの径を計る楕円形の煙出しがある。なお煙出し部の落ちこみはなく、燃焼部から煙道底面、煙出部へとゆるやかな傾斜で上がる。長軸全長は245cmを計る。

堆積土は黒褐色土が大半をしめるが、燃焼部底面から煙道底面に明赤褐色の焼土があり、底面の一部に火熱によって瓦礫状に焼けた部分が認められ、灰原部底面の一部に灰の堆積もある。出土遺物はなく、時期は不明である。

21号 (Be68) 焼土遺構 (第107図 第89表 写真図版47)

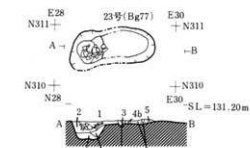
重複はなく、19号焼土遺構の南約1.5mに位置する。長軸は東西でN-90°-Wで、中央でくびれをもったひょうたん状を呈する平面形で、東側を燃焼部とする竈が想定される。西側の南北径は55cm、東側は50cm、くびれ部分は30cmであるが、東側壁と南壁、北壁の下端は奥に挟りこまれ、それがくびれ部分に及んでおり、ここまでが燃焼部に属するものと推察されることから、燃焼部の東西径は約90cmとみられ、長軸全長は155cmを計る。検出面からの深さは11cm~17cmあり、燃焼部で深く、西端の推定煙出し方向へ浅くなる。

堆積土は1層から3層が黒褐色土で、2層は非常に固く密であり、4層の暗赤褐色焼土は現地性のものであって、その下層底面上に炭の層が形成されている。出土遺物はなく、時期は不明である。

22号 (Be59) 焼土遺構 (第82図 第89表)

2号掘立柱建物跡と重複するが、先後関係は不明である。平面形で、径40cm×40cm、検出面からの深さ10cmを計る土塊状で、皿状の断面を呈する。

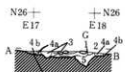
堆積土は黒褐色土に焼土が小ブロック状に混入し、炭の層を認めるが、現地火熱痕は明瞭でない、出土遺物はなく、時期は不明である。



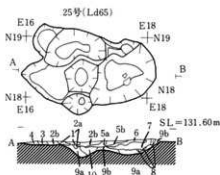
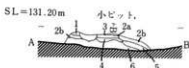
1	5YR/5 黒褐色土
2	5YR/5 〃 〃 土器が多量に入り、下部に焼土が混入
3	5YR/5 褐色土
4a	5YR/5 暗褐色土
4b	5YR/5 暗褐色土
5	5YR/5 暗褐色土
6a	5YR/5 黒褐色土
6b	黒褐色土が主とし、多量の焼土が混入し、粗粒の焼土が多い

24号(Lb65)

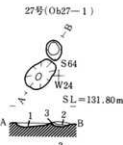
E17 N28 E18 N28



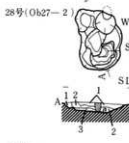
1	10YR/5 暗褐色土
2	5YR/5 暗褐色土
3	10YR/5 黒色土
4a	10YR/5 黒褐色土
4b	〃 〃 4a層よりシルトが多い
5	10YR/5 暗褐色土



1	5YR/5 暗褐色土
2	5YR/5 褐色土
3	5YR/5 暗褐色土
4	5YR/5 暗褐色土
5	5YR/5 暗褐色土
6	5YR/5 暗褐色土
7	5YR/5 暗褐色土
8	5YR/5 暗褐色土
9a	5YR/5 暗褐色土
9b	5YR/5 暗褐色土
10	5YR/5 暗褐色土

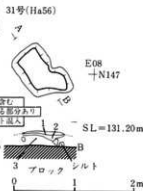


1	10YR/5 暗褐色土
2	5YR/5 暗褐色土
3	暗山シルトが点状をうけた焼土



1	10YR/5 暗褐色土
2	5YR/5 暗褐色土
3	5YR/5 暗褐色土

1	5YR/5 暗褐色土
2	5YR/5 暗褐色土
3	10YR/5 暗褐色土



1	5YR/5 暗褐色土
2	5YR/5 暗褐色土
3	10YR/5 暗褐色土

第108図 23号～28号・30号・31号焼土遺構

23号 (Bg77) 焼土遺構 (第108図 第89表 写真図版48)

重複はないが、北東約5mに2号竪穴住居跡、北西約4mに61号竪穴住居跡、東に隣接して6号掘立柱建物がある。平面形は長楕円状でややふくらむ、すなわち、西側は短径50cm×長径65cmの平面楕円で検出面からの深さ30cmの土壌状となり、その東側に短径60cm×長径85cm、検出面からの深さ5cmの浅い舌状部が連結し長軸全体は135cmを計る。

堆積土の1層と2層は土壌部に堆積する黒褐色土であるが、2層には球胴甕2ヶ体(第110-2図17・18)、長胴甕1ヶ体(第110-2図16)とA・B類の坏片が包含され、うち球胴甕1ヶ体(第110-2図17)は肩部から上の大半を欠くがほぼ完形に近く煤と火熱痕があり、火の使用に関する用途で現場に設置されたと推察される。なお、つぶれた状況で検出され下には多量の焼土粒があった。3層は焼土と黒褐色土が混合し舌状部から土壌部2層に続く、4層・5層は舌状部にある焼土、6層は土壌部2層下で黒褐色土を胎土に、a・bとも多量の炭を含む。甕のあり方、堆積土中の焼土と炭から、甕を設置し火の使用を用途とした施設で、竪穴住居跡と同時期と推察される。

24号 (Lb65) 焼土遺構 (第108図 第89表)

重複はないが、25号焼土遺構が約8.7m南に、両者を結ぶ線上に7号土壌がある。平面は楕円形に近く、短径105cm×長径145cm、検出面からの深さはほぼ10cmの土壌状であり、底面は比較的凹凸をもち、北東縁寄りに底面から約15cmの小ピット状の落ちこみはあるが、断面はほぼ皿状を呈する。

堆積土の1層は焼土と炭が混合する暗褐色土で土師器、須恵器甕片を含む、2層は3層と4層との黒色または黒褐色土堆積後に現地で形成された焼土で、火の使用は明らかであり、1層中の出土遺物からほぼ竪穴住居跡と同期と推察される。

25号 (Ld65) 焼土遺構 (第108図 第89表)

重複はない。24号焼土遺構や7号・8号土壌との位置的な点は前項で述べた通りである。不整楕円の平面形で、短径120cm×長径220cm、検出面からの深さは15cm～25cmを計る土壌状で、底面は西半で凹凸が多く、東西断面は逆凹状を呈する。

堆積土の1層から4層までの黒色または黒褐色土は、焼土、シルトを含み、2層には土師器・須恵器の甕片、A類坏片がある。5層は炭の多い黒褐色土、6層は黒色土の混合土で、その下7層が8層・9層上に形成された現地性の焼土であり、先行した堆積土上に遺構の東半で形成されるのは24号焼土遺構と同様のあり方を示し、出土遺物と合わせほぼ竪穴住居跡と同時期と推察される。

26号 (Mi65) 焼土遺構 (第108図 第89表 写真図版48)

重複はなく、9号土壌の4m南西に位置する。平面は楕円形で、短径58cm×長径65cm、検出面からの深さ12cmの土壌状で、底面はほぼ平坦で皿状の断面を呈する。

堆積土は最上面を直刀(第110-1図15)を出土した二次堆積の焼土が覆い、土壌内1層は若干の焼土を含む黒色土、2層は底面直上で焼土と黒色土の混土であるが火熱で瓦礫状に固い焼土塊を多量に含み、底面の火熱痕から現地性のものと想定される。1層と2層境に土師器破片が出土した。出土遺物から竪穴住居跡と同時期と推察される。

27号 (Ob27-1) 焼土遺構 (第108図 第89表)

重複はないが、28号焼土遺構の東約2m、周辺約6mに43号・44号・45号竪穴住居跡が位置し、3住居跡を結ぶ三角形のほぼ中点に位置する。

削平のため2ケの小ピットになるが、堆積土の関連から本来一体であった可能性が強い。北側は短径25cm×長径33cm、南側は短径37cm×長径55cm、いずれも楕円形で検出面からの深さは7cm、皿状の断面を呈する。

南側ピットは焼土は極少だが多量の炭を含む黒褐色土を堆積土とし、北側は現地形成の焼土で南北相互の関連が想定できる。出土遺物はないが位置的な点から竪穴住居跡と同時期とも想定できるが確証はない。

28号 (Ob27-2) 焼土遺構 (第108図 第89表)

重複はない。27号焼土遺構の西約2mにあり、平面は不整の楕円形、短径65cm×長径97cm、検出面からの深さ15cmの土壌状で、底面の凹凸は著しいがほぼ皿状の断面を呈する。

堆積土の1層、2層は焼土と炭を含む黒褐色または黒色土、底面上の3層は現地性の焼土である。出土遺物はない。27号焼土遺構同様の時期が想定されるが確証はない。

29号 (Bd15) 焼土遺構 (第102図 第89表)

1号方形竪穴状遺構より新しく、南側が攪乱されている。全体は75cm×135cmほどの範囲で、最深部で検出面から7cmの不整形範囲の浅い落ちこみを呈し、落ちこみ北端に35cm×50cm範囲で火熱し焼土化した地山面がある。

堆積土は地山焼土化面上に固い現地形成の焼土、その南方向に炭を多量に含む黒褐色土が広がり、その範囲は落ちこみ部分とほぼ一致する。落ちこみ西縁に土師器破片を出土したが、直接的関連はなく、1号方形竪穴状遺構が3号掘立柱建物跡より新しく、更に本遺構がより新しいことから、近世以降の時期と推察される。

30号 (Bh09) 焼土遺構 (第108図 第89表)

7号掘立柱建物跡より先行する。短径110cm×長径140cmの不整形円状の範囲に1層～6層の焼土、黒褐色土が堆積したもので、堆積面は黒褐色土上で若干のくぼみをもつが人為性は明瞭でなく、焼土も現地形成か否か明らかでない。堆積土中に土師器破片、上面に陶磁器片を検出した。7号掘立柱建物跡より先行するので近世もしくは以前が推定できるが上限は特定できない。

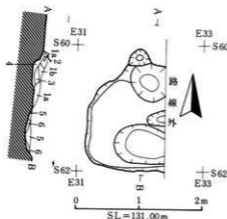
31号 (Ha56) 焼土遺構 (第108図 第89表)

重複はない。特に人為的な施設は認められず、耕作土下の黒褐色土(3層)上に堆積したのが1層の焼土と2層の黒褐色土で、60cm×90cmの不整形の範囲で焼土の厚さは約5cmあるが、現地形成か否か明らかでない。焼土中には土器片を含み竪穴住居跡と同時期の可能性もあるが確証はない。

32号 (Oa80) 焼土遺構 (第109図 第89表 写真図版48)

東半が調査区外になり重複の有無と全容は不明であるが、竪穴住居跡の可能性も否定できない。検出部分は東西120cm×南北170cm、検出面からの深さ20cmの方形平面の竪穴状と推測される。底面に落ちこみを見るが、堆積土の様相から竪穴住居跡等の床面構築の掘り方様にもみられる。

堆積土は北半では大半が焼土で、細分はされるがいずれも現地性のもので、南半の5層・6



第109図 32号(Oa80)焼土遺構

層は黒褐色土もしくはシルトを胎土としながら、それぞれにシルトと黒褐色土が混在する。焼土中から土師器小形壺(第110-2図20)の出土があり、竪穴住居跡と同時期の遺構である。

A-B			
1a	SYR5%	暗赤褐色土	径500大の焼土粒が多数に混入、炭粒少し、黒褐色土に焼土が混在
1b	SYR5%	濃い赤褐色土	黒褐色土焼土が多数に混入
2	SYR5%	赤褐色土	炭粒少し
3	SYR5%	暗赤褐色土	炭粒少し
4	IOYR5%	褐色シルト	木粒大の焼土が多数に混入
5	SYR5%	黒褐色土	径3-500大のシルト・ブロックが多数に混入
6	SYR5%	暗褐色シルト	黒褐色土の混入

焼土遺構出土遺物 (第110-1・2図 第71-1・2・3表)

焼土遺構には、ピット状の明確な掘り込みを持つものと、浅い凹地上に焼土の広がりを見せるもの等があるが、各々の出土遺物については一括記載する。環形土器・変形土器・鉄製品等がみられる。個々の詳細については、以下の一覧表を参照されたい。

第71-1表 環形土器 一覧

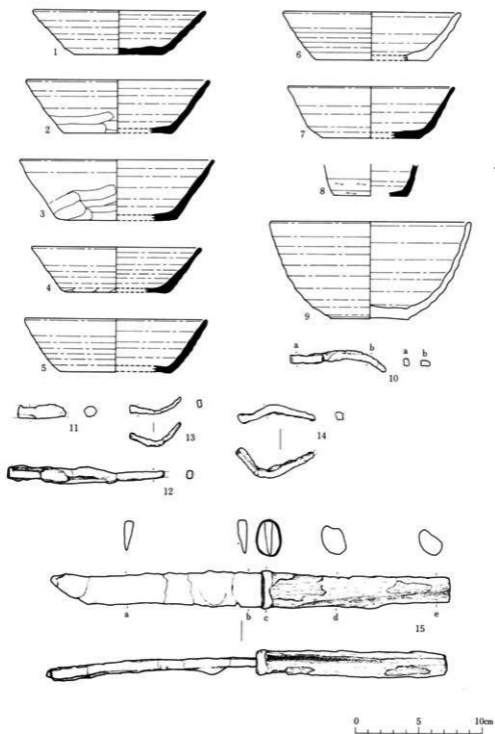
遺構名	支那図番号	写真番号	種別	切断し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)				a	b	d	外径角度(°)	備 考
							口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)	最大径					
Ij53-56 焼土	1	-	A 類	ヘラ切	無調整	体部下端 ~底部	(13.6)	6.8	3.5	2.0	3.9	45.5	B類の色調 (7.5YR%) に近い硬質		
	2	-	A 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端 ~底部	(14.4)	(8.6)	4.2	1.7	3.4	56	底部は軽い削り。		
	3	-	A 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	—	(15.2)	(9.6)	4.8	1.6	3.2	58.5			
	4	-	A 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端	(13.2)	(7.8)	3.6	1.7	3.7	52.5			
	5	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	(14.4)	(8.8)	4.2	1.6	3.4	57			
	6	-	B 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	(8.8)	3.8	1.6	3.6	56	磨滅顯著		
	7	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.2)	(7.6)	4.1	1.7	3.2	56			
	8	-	A 類	調整のため不明	手持ヘラ削り	体部下端 ~底部	—	(5.8)	—	—	—	—	—	コップ形土器破片。	
Ai24焼土遺構付近	9	-	B 類	回転糸切	無調整	/	(15.8)	6.2	7.7	2.5	2.1	58.5	A類の色調 (5YR%) 硬質。		

第71-2表 変形土器 一覧

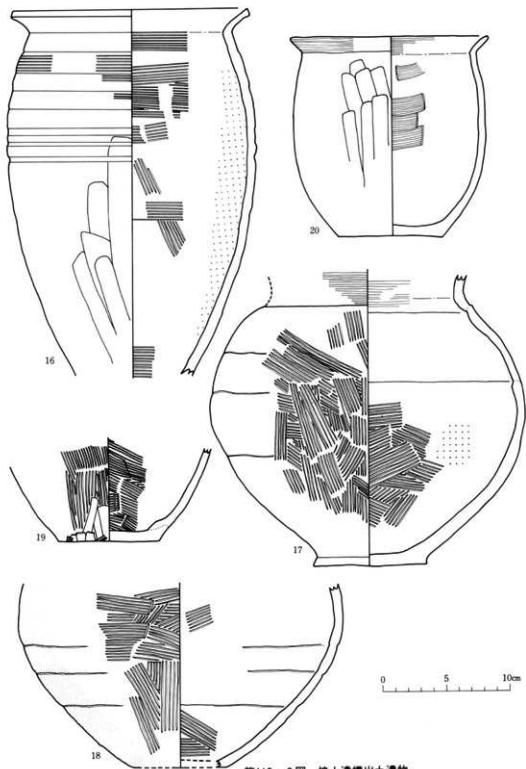
遺構名	支那図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
				口 径	底 径	器 高	最大径	口縁部	体部	口縁部	体部	
23号 (Bg7) 焼土遺構	16	-	土師器	18.9	—	—	19.8	ロクロナデ	カキ目 + ヘラナズリ	ロクロナデ	カキ目	長割、内面黒染あり。(焼土)
	17	-	土師器	—	9.1	—	25.1	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	刷毛目	球割形。内面黒染あり。軸組み。(焼土)
	18	234	土師器	—	(7.5)	—	(26.0)	—	刷毛目	—	刷毛目	球割形。外周に赤色塗彩あり。軸組み。(焼土)
26号 (M65) 焼土遺構	19	-	土師器	—	8.0	—	—	—	刷毛目 + ヘラナデ	—	刷毛目	球割形。体部下端一底部片 (焼土)
32号 (Oa9) 焼土遺構	20	-	土師器	15.6	8.3	15.8	15.3	ヨコナデ	ヘラナズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	本葉状。

第71-3表 鉄 製 品 一 覧

遺構名	支那図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形	備 考
						長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
Ai24 焼土遺構付近	10	231	角 釘	完形品	不 良	74.70	a --- 6.75	a --- 4.90	6.50	長方形	湾曲。
	11	—	不明	破 片	やや不良	37.0	8.30	9.0	5.30	ほぼ円形	棒状。
	12	232	角 釘	ほぼ完形品	不 良	123.0	b --- 6.10	b --- 4.30	19.10	長方形	やや湾曲。
	—	—	釘 状	破 片	不 良	49.20	—	—	7.80	ほぼ円形	
14号 (Bd18-2) 焼土遺構	13	—	角 釘	完形品	やや不良	48.0	5.70	3.90	1.70	長方形	曲がっている。
	—	—	釘 状	破 片	不 良	22.0	—	—	0.50	方 形	
17号 (Be68) 焼土遺構	14	—	角 釘	未端部欠失	やや不明	78.0	8.0	7.0	7.20	方 形	曲がっている。
26号 (M145) 焼土遺構	15	233	直 刀	ほぼ完形品	比較的良好	317.0	a --- 23.50 c --- 29.50	a --- 6.90 c --- 20.80	149.50	a --- 棒 形 b --- 棒 形	基部の本質及び柄部はよく残っている。(焼土)



第110-1图 烧土遺構出土遺物



第110—2圖 埴土遺構出土遺物

8 溝

南辺外郭の築地内外溝および南(外)大溝、9号掘立柱建物に併設と想定される溝は、この項には含まない。いずれも南辺築地から北段丘崖までに検出されたものであり、総長の長い2号・7号・9号溝の平面図は中途を割愛している。

1号(Cb77)溝 (第12-1図 第90表 写真図版9・49)

3号竪穴住居跡のほぼ中央を東西方向に切り、N-106°-Eを向く。西側は現代の土取りで破壊煙滅し、東側は調査区外にぬけ、調査地内での総長は約10mであるが、調査期の関係で3号住と重複する4.7m部分のみ精査した。

溝の上幅は3号住堆積土断面から1.5m内外が推定され、下幅は0.5m内外、検出面からの深さは0.4mを計り、3号住の床面下まで達する。断面はほぼ逆台形状を呈する。

堆積土は南側壁寄りにシルトをまだら状に含む攪乱状の黒褐色土があり、大半は極少シルト粒を含む黒褐色土である。遺物の出土はなく、時期は特定できない。

2号(Eb12)溝 (第111-1図 第90表 写真図版13)

9号竪穴住居跡の南縁、10号・11号竪穴住居跡の北縁を切り、N-95°-Eとほぼ南西方向に走る。破壊部分31mのみの精査だが、東・西に延長し調査地外に及ぶものと推察される。

上幅0.6m、下幅0.2m~0.45m、検出面からの深さは0.13m~0.45m、半円状の断面を呈し、底面中央で最も深い様相をもち東側より西方向へ深くなる。

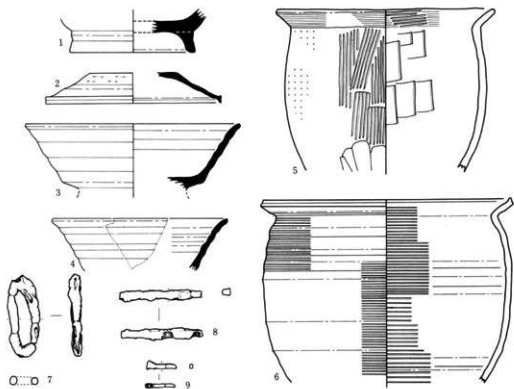
堆積土は、東側で黒色土の単層、西側は黒褐色土にシルト極少を含む上層と多量のシルトを混入する下層とからなり、自然堆積土である。堆積土中から須恵器の長頸壺底、蓋、高台付坏、A類坏(第111-2図1・2・3・4)・土師器甕(第111-2図5・6)・鉄製品(第111-2図7・8・9)が出土しているが、竪穴住居跡を破壊したときの流入も想定され、時期を特定できる資料ではない。

出土遺物 (第111-2図 第72-1・2表)

土器類は6点図示したが全て反転復元に依る。鉄製品は3点の実例。図示した遺物は堆積土中からのものだけで、他の破片についても底部面からの出土例はない。

No 1は推定口径10cm前後の須恵器片。器内の厚さや脚の様子からみて長頸壺の一部と推される。埋積土中出土とされるが、当溝が9号竪穴住居跡と重複する地点からの出土であるため、本遺構との関わりは薄いであろう。No 2は須恵器蓋の破片。器内が薄く胎土が締まっている。回転ヘラ削り調整が加えられる。No 3は須恵器台付坏の破片。No 4はA類片。破片からの復元である。

No 5は非ロクロ、No 6はロクロ成形土師器甕。両者共体部に軽い膨らみを持つのが特徴。



第111—2図 2号溝(Eb12)出土遺物

第72—1表 変形土器一覽

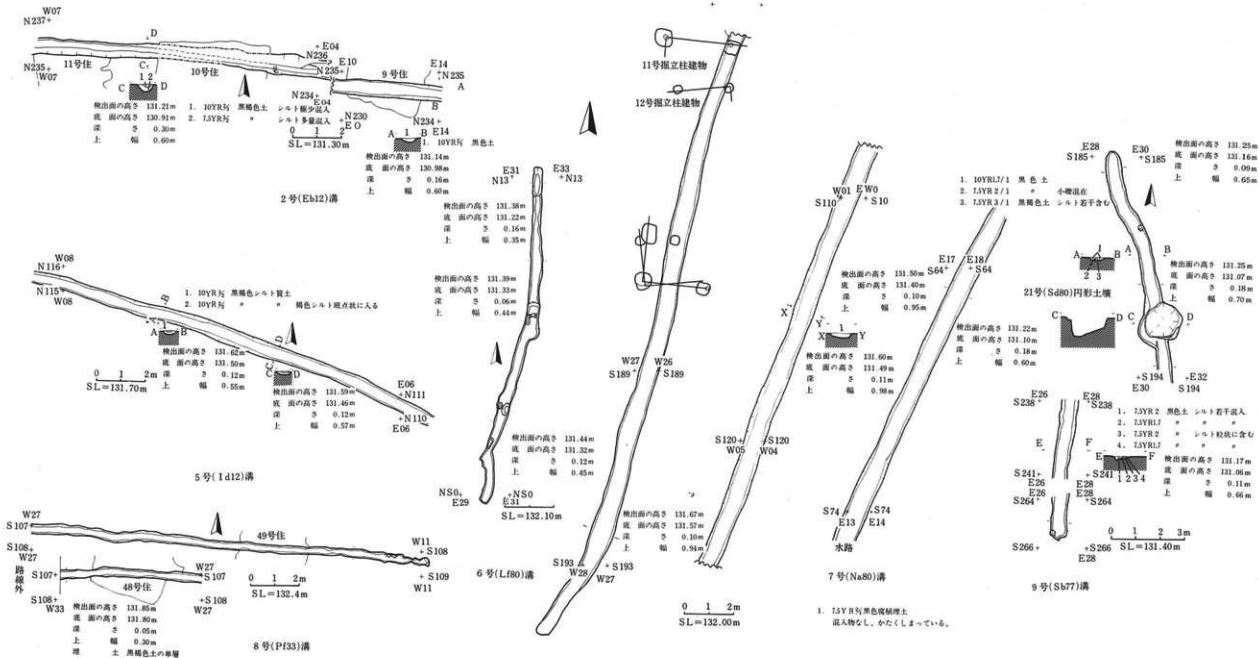
写真番号 実測図番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
		口径	底径	器高	最大断面	口縁部	体部	口縁部	体部	
5	土師器	(17.5)	—	—	(16.0)	ヨコナデ	刷毛目+ヘラケズリ	ヨコナデ+刷毛目	ヘラナデ	外面は幅広い刷毛目、煤付着。
6	土師器	(20.2)	—	—	(19.8)	ロクロナデ	カキ目	ロクロナデ	カキ目	内面のカキ目幅広い。一部煤付着。

第72—2表 鉄製品一覽

写真番号 実測図番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
				長さ (cm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
7	鋼状製品	完形品	やや不直	64.0	a...7.0 b...5.0	a...7.0 b...5.0	8.18	a...長方形 b...方形	楕円形。(増穂土)
8	釘状破片	比較的良好		64.50	5.50	6.75	7.75	長方形	(増穂土)
9	角釘	完形品	比較的良好	33.50	3.50	2.50	0.80	長方形	小型品。(増穂土PNo.3)

3号 (He21) 溝 (第112—1図 第90表 写真図版49・50)

未精査の112号・113号竪穴住居跡と東側、121号・122号竪穴住居跡と西側で重複し、いずれも本遺構が新しい。検出した総長は約60mで、N-113'-E方向に走り、東・西とも更に調査



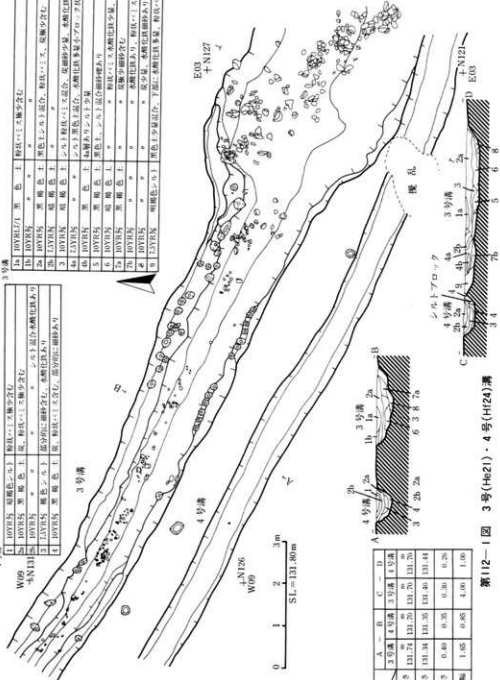
第111-1図 2号溝・5号溝～9号溝

4号溝

1	10YR5/5	暗褐色シルト	粉状 α - γ - SiO_2 極少量
2a	10YR5/5	暗褐色土	黒、粉状 α - γ - SiO_2 極少量
3	10YR5/5	暗褐色シルト	部分的に細砂を含む、鉄酸化痕あり
4	10YR5/5	暗褐色土	黒、粉状 α - γ - SiO_2 を含む、部分的に細砂あり

3号溝

1a	10YR5/1	黒色土	粉状 α - γ - SiO_2 極少量
1b	10YR5/5	暗褐色土	黒色シルト混在、粉状 α - γ - SiO_2 、鉄極少量
2a	10YR5/5	暗褐色土	黒色シルト混在、粉状 α - γ - SiO_2 、鉄極少量
2b	10YR5/5	暗褐色土	シルト混在、鉄酸化痕あり
3	10YR5/5	暗褐色土	シルト混在、鉄酸化痕あり、鉄酸化痕あり
4a	10YR5/5	暗褐色土	シルト混在、鉄酸化痕あり、鉄酸化痕あり
5	10YR5/5	暗褐色土	鉄酸化痕あり
6	10YR5/5	暗褐色土	鉄酸化痕あり
7a	10YR5/5	暗褐色土	鉄酸化痕あり、鉄酸化痕あり、鉄酸化痕あり
7b	10YR5/5	暗褐色土	鉄酸化痕あり、鉄酸化痕あり
8	10YR5/5	暗褐色土	鉄酸化痕あり、鉄酸化痕あり
9	10YR5/5	暗褐色土	鉄酸化痕あり、鉄酸化痕あり



	A		B		C		D	
	3号溝	4号溝	3号溝	4号溝	3号溝	4号溝	3号溝	4号溝
掘出面の高さ	131.74	131.20	131.70	131.70	131.70	131.70	131.70	131.70
底面の高さ	131.34	131.35	131.40	131.44	131.40	131.44	131.40	131.44
深さ	0.40	0.35	0.30	0.26	0.30	0.26	0.30	0.26
F. 幅	1.65	0.85	4.00	1.00	4.00	1.00	4.00	1.00

第112-1図 3号(Hc21)・4号(Hf24)溝

地外に延びると推察できる。

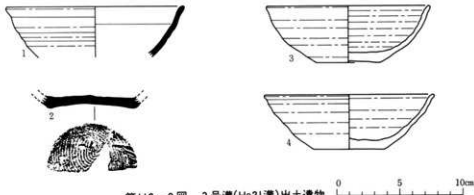
精査は検出部の西半約17mを実施した。上幅1.65m、下幅0.4m内外、検出面からの深さは0.3m～0.4mを計り西方に深くなる。検出面から0.25m内外の中間に幅0.5m内外の緩傾斜または平坦な面のテラス状の段が両壁沿いに形成されるが、北側に特に顕著である。凹凸状に近い断面形を呈する。東側に上幅4m内外、東西5m以上の大きなふくらみ部分をみる。また南・北側壁沿いに径15cm内外、深さ10cm程度の壁土留杭跡と推察される小ピット列があり、特に東ふくらみ寄りに顕著であるとともに、底面に所在する跡も、ふくらみ部とその近くに多量にある。これらの跡は、人為的施設とする確証はなく、むしろ水流に関連したものと想定される。

堆積土中に粉状バミスを含む部分が多いが層状ではない。堆積土はいずれも自然営力と推察され、3層以下では水酸化鉄もしくは細砂を含むのが特徴的で水の作用が想定される。特に3層はシルトと粉状バミスの混合した暗褐色土で細砂を含み、5層以下が堆積した時点で小溝状を呈し降雨時等に流水した様相をもつ。遺物は6層・8層中と底面に須恵器・土師器の細片をみるが西側で多い。中にA類環2ヶ体(第112-2図1・2)、B類環2ヶ体(第112-2図3・4)がある。

堆積土中の酸化鉄の状況及び壁土留杭等から水が東から西へ流れたことが想定される。ふくらみ部は自然の崩壊によるふくらみか、用途をもつ人為的なものか明らかではない。竪穴住居跡を切るのにより新しいが、堆積土中の粉状バミス、底面の土器片から、ほぼ近い時期の可能性もあるが特定できない。

出土遺物(第112-2図・第73表)

環形土器のみ4点の図示である。詳細は一覧を以って替える。破片としては、Hg09グリッド付近で糸切無調整の底部片7点(A類4・C類1・小型甕底部2)・須恵器台付環2個体分の破片・同長頸壺片・非クロロのD類環細片等、Hi03グリッド付近で須恵器台付環片と自然軸がかかる甕片・長頸壺片・非クロロ土師器甕片多数等、Hi50グリッド付近ではA類糸切底部片・叩目のある土師器と非クロロ片多数・B類の体部片等、等が出土している。



第112-2図 3号溝(He21溝)出土遺物

第73表 坏形土器一覽

写真 番号	種 別	切 離 し	調 整 注 法	調 整 部 位	法 量 (cm)				a/b	a/d	外 傾 角 度 (θ°)	備 考
					口 (a)	径 (b)	底 径 (c)	器 高 (d)				
1	A 類	底部欠失	—	—	(9.2)	—	—	—	—	—	底部片。	
2	A 類	回転糸切	無調整	/	—	6.8	—	—	—	—	口縁部欠失。	
3	B 類	回転糸切	無調整	/	(12.8)	5.0	4.5	2.6	2.8	49		
4	B 類	回転糸切	無調整	/	(13.4)	5.6	4.3	2.4	3.1	48		

4号 (Hf24) (第112-1図 第90表 写真図版50)

3号溝と同じ竪穴住居跡を切り、3号溝の南側に平行して走り、3号溝南壁上端から1m~1.5mに本溝の北壁上端がある。したがって、N-113°-Eである。検出総長は約60mで更に東西に延びると推察される。

精査は検出部西半の一部17mを実施した。上幅1m、下幅0.5m、検出面からの深さは0.26m~0.35mで西方へ深くなる。壁は外開きに立ち、底面は平坦で逆台形状の断面を呈する。堆積土は自然営力により、3層を除き粉状パミスを部分的に含み、3層・4層では細砂をもつ。胎土は1層の暗褐色シルト、2層の黒褐色土、3層の褐色シルト、4層の黒褐色土となり、水酸化鉄の形成もみられ水の作用が想定される。出土遺物はないが、堆積土の状況が3号溝と似る点があり同時もしくはほぼ同時期と考えられる。

5号 (Id12) 溝 (第111-1図 第90表)

未精査の116号竪穴住居跡を切り、4号溝の南約8.5mをほぼ平行して走る。N-108°-Eである。検出総長は約45mでその東・西に更に延びると推察する。

精査は検出部西半の約17mで、上幅0.57m、下幅0.4m、検出面からの深さ0.12mで、底面はほぼ平坦な鍋底状の断面を呈する。

堆積土は黒褐色シルト質土を胎土に、上層では混入物なく、下層で斑点状の褐色シルトを含む自然堆積土である。出土遺物はなく、時期不明である。

6号 (Lf80) 溝 (第111-1図 第90表)

溝南端が35号竪穴住居跡東壁から約3m東にあり他との重複はない。検出総長は14mでほぼ南北に走るが、北半はほぼ真北を向き、南半はN-10°-Eと若干ぶれる。

上幅0.45m、下幅0.3m、検出面からの深さ0.16mあり、底面は部分的にくぼみをもつ、特に北端および中半にある。断面は鍋底状を呈する。堆積土は記録せず、出土遺物はなく、時期は

特定できない。

7号 (Na80) 溝 (第111-1図 第90表)

N区北東からS区南西へ調査地を斜め横断し、11号・12号掘立柱と重複しより新しい。検出総長は約175mで両端から更に調査地外に延びる。N-20°-Eの方向にある。

検出面での上幅は1m、下幅0.55m、検出面から0.15mで北に深い。底面は平坦で鍋底状を呈する。ほとんど混入物のない黒褐色土の単層堆積土で、出土遺物はなく、時期は特定できない。

8号 (Pf33) 溝 (第111-1図 第90表)

48号・49号竪穴住居跡を東西に切る。検出総長22mで西側は調査区外に延びる。ほぼ東西に走りN-93°-Eである。

上幅0.3m、下幅0.23m、検出面からの深さ0.11m、東側が深い。底面は平坦で鍋底状の断面を呈する。堆積土は黒褐色土の単層で、出土遺物はなく、時期不明である。

9号 (Sb77) 溝 (第111-1図 第90表)

北端近くで21号円形土壇、57号竪穴住居跡と重複し先後関係は必ずしも明瞭でないが、21号土壇についてはその項で述べた様相から同時期、57号住居跡は平面および堆積土に痕跡を認めぬことから、本遺構より新しいと想定される。Sb77グリッドから築地内溝までほぼ南北に80m走る。

上幅0.7m、下幅0.5m、検出面からの深さ0.09mであるが、北端の底面は標高131.16m、南端では130.97mで約0.2mの落差で南が低くなるが大きなものではない。底面は部分的に落ちこみを見るが、ほぼ平坦なもので逆台形状の断面を呈する。

堆積土は黒色土または黒褐色土が主体で、場所によってシルト粒を含んでいる。北端で須恵器瓦片を出土したのみである。重複遺構との関係、築地内溝北側の緩傾斜まで掘りこまれている状況などから、築地期の排水溝的なものも想定されるが確証はできない。

9 検出面採集・出土地点不明遺物 (第113-1・2・3・4図 第41-1・2表 写真図版73)

第74-1表 坏形土器一覽

出土地点	実測図番号	写真番号	種類	切 削	調整 技法	調整 部位	法 量 (cm)			a ₁ /b	a ₂ /d	外 径 角 度 (θ°)	備 考	
							口 径 (a)	底 径 (b)	高 さ (d)					
*N-001	1	-	A類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	7.6	7.6	1.8	3.4	53		
*N-002	2	-	B類	ヘラ切	手持ヘラ削り のみ一部ニガサ	底 部	(13.0)	7.4	7.4	1.8	3.8	49		
	3	-	A類	ヘラ切	無調整	/	(14.4)	(7.4)	(7.4)	1.9	3.5	49		
*N-013	4	-	A類	回転糸切	回転ヘラ削り	体部下端 ～ 底 部	(14.2)	7.4	7.4	1.9	3.7	48	底部調整外周のみ。	
*N-020	5	-	A類	底部磨削	回転ヘラ削り	体部下端	(12.4)	(6.8)	(6.8)	1.8	3.3	53.5		
*N-048	6	-	A類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端 ～ 底 部	(14.0)	6.4	6.4	2.2	2.9	51.5	(増積土)	
*N 区	7	-	A類	回転糸切	無調整	/	(13.4)	(6.6)	(6.6)	1.4	3.2	50		
Qe62グリット	8	-	A類	ヘラ切	無調整	/	(13.0)	(7.8)	(7.8)	1.7	3.5	54.5		
Qb12グリット	9	-	A類	ヘラ切	無調整	/	13.6	7.6	7.6	1.8	3.0	54	底部外面軽いナナ。	
	10	-	A類	ヘラ切	無調整	/	13.7	7.4	7.4	1.9	3.4	50		
	11	236	台 付 見取	ヘラ切	手持ヘラ削り	耳 部 分	(11.4)	6.0 (厚径) 6.0	5.6 (厚径) 1.3	/	/	/	/	外面全部及び口内面に自然釉。
*I-F-12	12	-	A類	ヘラ切	無調整	/	(13.4)	7.6	7.6	1.8	3.1	56		
	13	-	A類	ヘラ切	無調整	/	(14.4)	(7.0)	(7.0)	2.1	4.5	40.5	底部的色調 (7.5VR程度) が 特徴的。	
*I 区	14	-	A類	ヘラ切	無調整	/	(13.2)	(7.4)	(7.4)	1.8	3.5	52.5		
	15	-	A類	調整のため不明	回転ヘラ削り	底 部	(12.8)	(8.2)	(8.2)	1.6	3.2	60		
	16	-	A類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	7.4	7.4	1.9	4.2	46		
	17	-	C類	ヘラ切	磨減顯著	/	(13.0)	6.8	6.8	1.9	3.0	54.5		
	18	-	C類	底部欠失	-	-	(12.8)	-	-	-	-	-	(増積土)	
	19	-	C類	底部欠失	-	-	(12.8)	-	-	-	-	-	(増積土)	
	20	-	C類	磨減顯著	/	/	(16.6)	(8.8)	(8.8)	1.9	2.2	63		
*I-F	21	-	A類	底部磨削	手持ヘラ削り	体部下端	(13.6)	(7.6)	(7.6)	1.8	3.2	55		
QAB03グリット	22	-	A類	ヘラ切	無調整	/	(14.8)	(8.0)	(8.0)	1.9	3.4	51		
Hf15溝とHr15溝の間	23	-	C類	回転糸切	無調整	/	12.7	5.0	5.0	2.5	3.1	43	完形品。磨減顯著。	
不 明	54	-	A類	ヘラ切	手持ヘラ削り	底 部	(14.0)	(7.8)	(7.8)	1.8	3.0	55.5		
	55	-	A類	ヘラ切	無調整	/	(14.0)	7.6	7.6	1.8	3.4	51.5		
	56	-	A類	調整のため不明	手持ヘラ削り	体部下端 ～ 底 部	(14.6)	(8.2)	(8.2)	1.8	3.2	55		
	57	-	B類	回転糸切	無調整	/	(14.2)	6.6	6.6	1.4	3.3	48	内外面割離気味。	
	58	-	B類	底部磨削	手持ヘラ削り	体部下端	(14.4)	8.2	8.2	1.8	2.7	59		
	59	-	A類	磨減顯著	-	-	(13.8)	(8.0)	(8.0)	1.7	4.9	44.5		
	60	-	A類	ヘラ切	無調整	/	(13.4)	(8.6)	4.1	1.6	3.3	59.5		
	61	-	差 不 明	-	-	-	(16.6)	(厚径) 2.2	2.9 (厚径)	/	/	/	/	
	62	-	台付	調整のため不明	回転ヘラ削り	底 部	(17.0)	8.0 (厚径)	8.0 (厚径)	/	/	/	/	底部欠失。やや軟質。

第74-2表 変形土器一覽

出土地点	実測図番号	写真番号	精別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
				口径	底径	器高	最大脚	口縁部	体部	口縁部	体部	
3号(Lb30) 竪穴付	24	—	土師器	(18.0)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	刷毛目	肩部に大い沈線様段。口唇下にも段あり。
* I-F-12	25	—	土師器	(18.1)	—	—	—	ロクロナデ	印 目	ロクロナデ	ロクロナデ	横位の印目。
Qb56 グリッド	26	—	土師器	18.4	—	—	16.1	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ +ヘラナデ	刷毛目	巻上げ。
* N-048	27	—	須恵器	口縁~頸部細片に依る反転復元。機成は良いが胎土粗。外面に自然輪若干。計測箇所略。(埋積土)								
Fi 74 付近	28	—	土師器	(26.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	機成(須恵器的)色調は機成切機成。跡印?
Je 65 付近	29	—	土師器	(21.0)	—	—	—	ロクロナデ +印 目	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	
不明遺構のカタ 機土中	30	—	土師器	(18.7)	—	—	(16.5)	ロクロナデ	印 目 + ヘラケズリ	ロクロナデ	横位の ヘラナデ	
M71 付近	31	—	土師器	(14.5)	6.8	12.5	(12.5)	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	刷毛目	肩部有段。
Or27付近の機土ピ	32	—	土師器	—	5.7	—	—	—	フ ヘラケズリ	—	ヘラミガキ	内黒片。
56号(Rh06)住付近	34	—	須恵器	頸部径20.1cm。外面全面印目。内面ナデ。指圧痕。								
* I 区	35	—	須恵器	(20.0)	—	—	—	口 ロクロナデ	刷 印 目	ロクロナデ	ロクロナデ	
A プロック	36	—	須恵器	大體口縁部片。想定口径約40cm。頸部に二段の波状文あり。								
* I-H-16	37	—	土師器	(16.9)	—	—	(18.1)	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	内面の輪組み痕明瞭。
* N-048付近	38	—	須恵器	拓影図。外面に横目様の印目。内面一部青海波文。								
* N-011	39	—	土師器	—	6.3	—	—	—	ヘラケズリ	—	不 明	回転痕切に依る切離し。
* I 区	40	—	土師器	—	7.3	—	—	—	—	—	—	本蓋底部片。琢磨を呈 すると思われる。
不 明	63	—	土師器	18.0	—	—	内径部 18.9	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	刷毛目	肩部有段。胎土粗。二次 大熱あり。赤色塗彩?

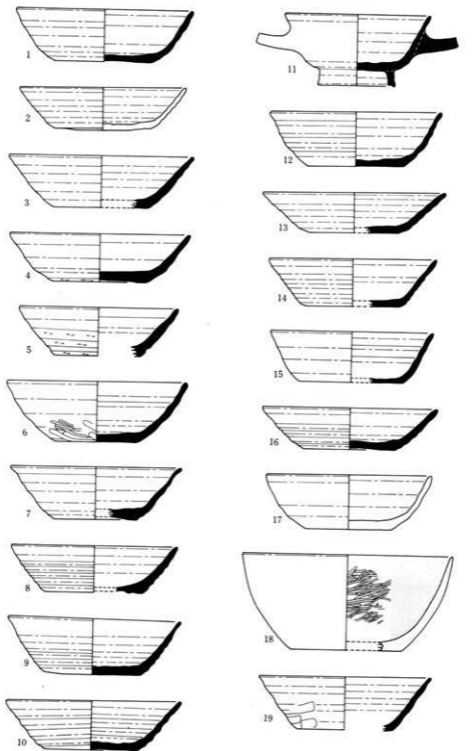
検出面採集遺物は、本遺跡内の遺構検出段階で出土したものであるが、その詳細については特に触れず一括記載する。

環形土器23点(台付双耳環1点含む)、変形土器16点(拓影図も含む)、鉄製品7点、石製品3点、長頸壺片1点、硯2点、合計52点について図示した。(第113-1~3図)硯は円面硯の破片でNo42は硯面を欠く台脚上部の破片であり、No43は硯面の破片である。何れも灰黒色を呈す須恵質のものである。特にNo42は、別個体の円面硯を出土した56号(Rh06) 竪穴住居跡近くで採集されたものである。

また、出土地点不明遺物は、本来的には検出面採集遺物と同様の出土状況をみせるものが大半ではあるが、採集地点等の不明であるものについて一括した。環形土器8点、須恵器蓋1点、変形土器1点、砥石2点、鉄製品1点、計13点の実測である。(第113-4図)

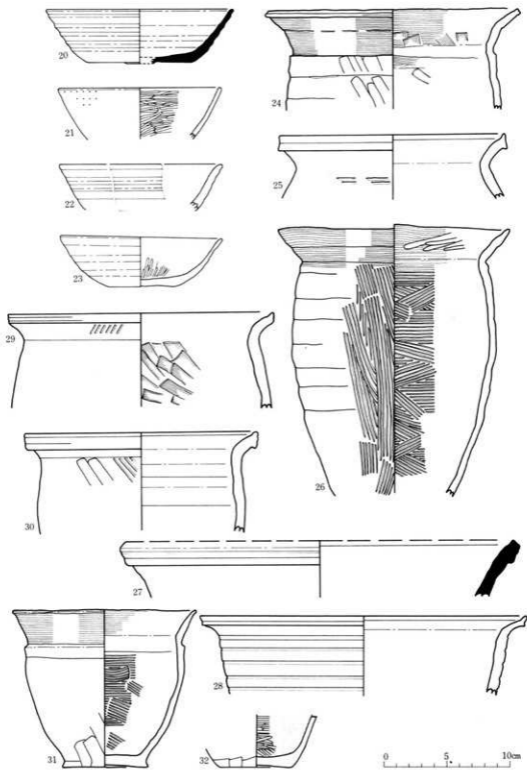
各々の詳細については紙面の都合上割愛するが、環形・変形土器については前掲の表を、また鉄製品・石製品については後掲の総一覧表(417~420P第103・44P105表)を参照して頂きたい。

なお、表中に於ける※印の付いた出土地点は、遺構検出段階で調査時に用いられた名称であるが、現段階での地点再確認が困難であるためその名称をそのまま使用したものであり、遺物も検出面採集遺物として処理したものである。

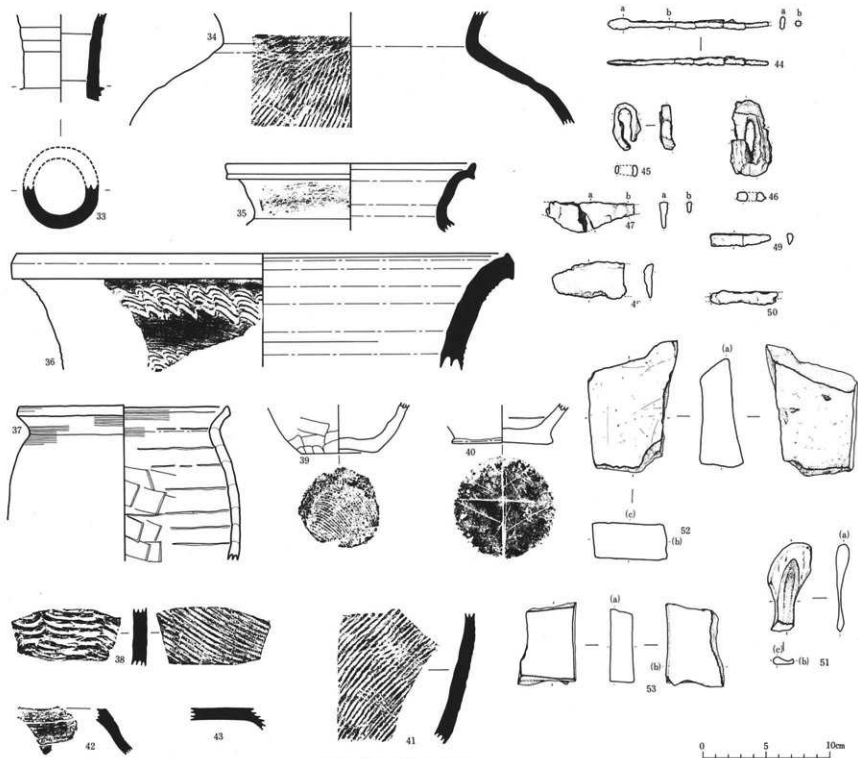


第113-1 図 検出面採集遺物

0 5 10cm

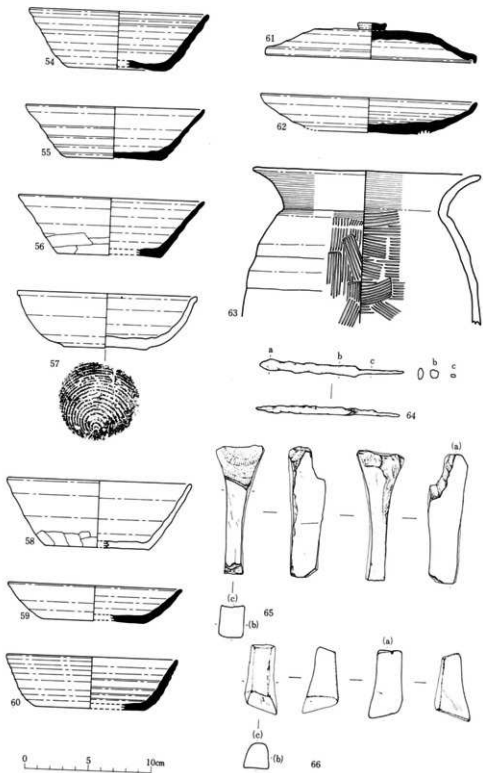


第113—2図 検出面採集遺物



第113—3图 横出面採集遺物

0 5 10mm



第113—4图 出土地点不明遺物

IV 考察とまとめ

i 遺構について

1 南辺外郭

志波城跡と積極的に考えられるようになった本遺跡の外郭は、約840m 方形の築地とその外側に約930m 方形の大溝からなる二重構造を呈する⁸¹。今次調査では南辺外郭を形成する築地と大溝を検出した。その位置は遺跡の南西隅寄りである。

(1) 築地跡

版築土や基底の地業等は確認できなかった。築地と確認できたのは東西約66m に及ぶ築地寄柱列からである。柱列は内・外4列が認められ、外列柱掘り方の一部が内列柱掘り方を切ることなどから、二時期の築地も想定されたが現時点では一時期と考える方が妥当かと思われる。以下その根拠に若干ふれる。

寄柱の配置される様相は、既述(III-1-(1))のように内列柱は幅2.4mで、桁行寸法は一定しないが4.4m~6.5mの中に入って1間平均は5.5mを計る。

外列柱は幅3m、桁行寸法0.8m~2.4mほどの間隔で内列に比較し非常に密で一見乱雑に見える。しかし、整理すると①内列桁行間の中間に対柱が位置し桁行寸法が4.9m~6mの中に入り1間平均5.5mで、その外1.2m~2mにも柱をもつ、②内列柱の両側に近接し1単位の様相を呈するもの、③狭間隔の柱も概ねが対をなす。

以上から内列柱と外列柱の相関を考えると、外列柱の①に示される状況は、内列柱の桁行間の中間に規則的に位置し、内・外列柱の桁行寸法は平均5.5mと一致する。このことは外列柱が内列柱桁行間の中間に位置することから当然であるが、その同時性はともかく、内・外列は相互に意識された配列であり、更に外列②の状況は構築上で内列柱との相関が想定される。

次に桁行寸法からみるため、やや繁雑になるが内列と外列①の数値を示すと、内列北側西から5.8m+5.2m+6.1m+4.8m+6.5m+5.0m+5.8m+5.2m+5.7m+5.0m+5.6m=60.7m(11間)で平均5.52m、内列南側西から5.5m+5.9m+4.7m+6.4m+4.9m+6.0m+5.2m+5.5m+4.4m+6.2m=54.7m(10間)で平均5.47m、外列北側西から5.5m+5.6m+5.5m+5.3m+6.0m+5.9m+5.0m+5.2m+5.3m+5.7m+5.0m=60m(11間)で平均5.45m、外列南側西から5.9m+5.9m+4.9m+5.7m+5.9m+5.4m+5.5m+5.3m+5.1m+5.4m+5.4m=60.4m(11間)で平均5.49mとなる。

狭・広差は内列が2.1m、外列は1.1mで内列にくらべ差が小さく、4.9mと6.0mの各1間を除き5m台に包括される。それに対して内列は5m台に入るのは21間中12間、4m台が4間、6m台5間とばらつきがある。いずれにしても、内外列とも5m台を基調とした桁行寸法と言える。

第75表 古代城柵の基底幅と寄柱桁行寸法

城柵名	遺構名	基底幅(m)	寄柱桁行寸法(m)	備考	出 処	
多賀城跡	S F 300 A	2.7	2.4~2.7		昭和46年度 発掘調査概報 13次	
	S F 179 A	2~2.2	3.0前後		昭和47年度 発掘調査概報 16次	
	S F 179 C	2.1	3.0前後	礎石	* * *	
	S F 220 B	2.7	約2.4		* * 17次	
	S F 202 B' a	2.4	3.0		昭和49年度 発掘調査概報 24次	
	* b	3.0	*		a b (旧) ↓	* * *
	* c	2.7	*		c ↓	* * *
	* d	3.0	*		d ↓	* * *
	* e	2.7	*		e ↓	* * *
	* f	3.0	*	f (新) ↓	* * *	
	S F 202 A	2.6以上		A (旧) ↓	昭和54年度 発掘調査概報 34次	
	S F 202 B	3.1	約3.0	礎石 B ↓	* * *	
	S F 202 C	2.7	*	礎石 C ↓	* * *	
	S F 202 D	2.2	*	D ↓	* * *	
S F 202 E	2.3	3.0強	E (新)	* * *		
桃生城跡	S F 04 B	2.4	3.0か		昭和49年度発掘調査報告桃生城 I	
粗沢城跡	S F 065	不明	2.02~1.69		昭和50年度 発掘調査概報 19次	
	S F 041	2.7~3.0前後	2.3~2.6		* * 20次	

この桁行寸法を東北の古代城柵築地寄柱の桁行寸法と比較したとき、第75表に列挙した各例のいずれより広い。例は限られたものであるが築地寄柱桁行寸法の傾向を示唆するものならば、2m~3m 前後が示され、とりわけ3m内外に集約される。このことが、構築技術上の問題と関連するか否か明からでないが、一般的に寄柱桁行寸法が3m 前後とするならば本遺跡の内・外列①の桁行寸法は広く、特に内列は単一の並びで外列①のように間に柱跡が認められない。

そこで、内列と外列①の桁行を組み合わせると以下のような数値が得られる。北列西側から3.0m+2.8m+2.7m+2.5m+3.1m+3.0m+2.5m+2.2m+3.1m+3.3m+2.7m+2.5m+3.4m+2.4m+2.6m+2.6m+2.6m+3.0m+2.3m+2.7m+3.0m+2.6m+2.4m=63.0m (23間)の平均2.74m、南列西側から3.1m+2.8m+2.7m+3.2m+2.7m+2.2m+2.5m+3.2m+3.2m+2.7m+2.2m+3.2m+2.8m+2.7m+2.5m+2.8m+2.7m+2.4m+2.0m+3.4m+2.8m+2.6m=60.4m (22間)の平均2.75m となる。

すなわち、第75表に示した例に近似した数値が得られる。既述したように築地寄柱桁行寸法

が3m前後であるのが一般的と仮定するなら、内列柱と外列①の組み合わせが数値的に一般的傾向に合致する。

なお、築地積み手のちがいの報告例では2.5m^{注2}、3m^{注3}、5m～6m^{注4}等があって、前二者は一般的と仮定した桁行寸法に近く、後者は本遺跡の内列、外列①に近い。積み手の単位は桁行寸法との関連性も想定される。

総括すると、1、内列桁行中間に規則的な外列柱の配置がある。2、内列柱と単位状をなす外列柱がある。3、桁行寸法は内・外の組み合わせ数値が他例に近似する。このことから、内・外列の相関が強く同時期のものと推察、柱穴の切り合いは構築時の作業手順の先後によると理解した。

この場合、内列と外列の関係は「間に板をはさんで築地本体を版築し内列が寄柱で築地本体幅は内列柱外側になる」とするのが妥当と考える。ただ、寄柱桁行の中間に位置する外柱はそのあり方から築地の構造上寄柱と同等の機能をもったと考えられるが、更に外側に対状にある柱列の性格と相関を含めて吟味する必要がある。

なお内列柱を寄柱として、基底幅は2.4m強と言える。外郭南辺 SF110築地跡や、内郭南辺築地跡も2.4m幅^{注6}とされている。

注1 「志波城跡」 I 盛岡市教育委員会 1981

注2 「宮沢遺跡」 東北自動車道遺跡調査報告書 III 宮城県教育委員会 昭和55年3月

注2 「多賀城跡」 昭和48年度発掘調査概報 宮城県多賀城跡調査研究所

「秋田城跡」 昭和49年度秋田城跡発掘調査概報 秋田市教育委員会

「秋田城跡」 昭和50年度秋田城跡発掘調査概報 秋田市教育委員会

注4 「弘田棚跡」 第9・10次発掘調査概報 秋田県教育委員会 1976

注5 注1と同じ

注6 注1と同じ

「志波城跡」 第21次調査現地説明会 (財)岩手県埋蔵文化財センター 1981年8月5日
鈴木恵治氏(岩手県埋蔵文化財センター)より教示をうける。

(2) 掘立柱櫓跡

検出寄柱列の中央よりやや東に寄った位置にあり、築地を跨ぎ東西2間(3m+3m)、南北1間(4.2m)規模で、建物東西方向はE-5°30'-Sの建てかえのないものである。

これを盛岡市教委の調査によるSB121外郭南辺櫓跡^{※1}2期目と比較すると、SB121の建物東西方向がE-6°30'-Sと若干差異のあるものの、建物規模、柱間は全く一致する。

方向の差異は、今次調査でも、櫓とその中を通る築地、櫓以東、櫓以西の各東西方向に若干の差異のあることを既述(III-1-(1))したが、工事担当区等によって生じたものかと推察されるものである。なお、本櫓以西の寄柱方向はSB121と一致する。

さて、本遺構とSB121との一致は、例が少ないとは言え外郭における櫓施設の規格性を示唆するものであり、古川雅清の研究でも、検出例の多い遺跡については、「建物」の平面形および規模に見るかなりの規格性を確認できると指摘しており、本遺跡の外郭櫓は本遺構やSB121規模と、柱間のものが配置されたと想定される。

櫓の配置について古川雅清はその2棟間の距離を外郭各辺の長さに応じて等分して定め、計画的に付設されたものとみなしうるのではなからうか、としており、盛岡市教委の調査結果でも本遺跡外郭南辺は推定総長840mを70m間隔で12等分し櫓が配置されただろうと推定している。

櫓配置が等間隔であると前提し、本遺構の位置を算定すると次のようになる。本遺構の南北中軸は、遺跡の南西隅(市道官台線西縁)から①約115m、盛岡市教委調査のSB110外郭南門^{※5}南北中軸線から②約300mを計り、SB110とSB121の各南北中軸線間は③約65mである。③の距離が両者の位置から一隅間に最も近いものと推察できる。したがって65mで南辺外郭840mを分割すると12,923間の端数となる。そこで、近似の60mでは14.0間、70mでは12.0間に等分される。

よって、65mを60mと70mに置き換えて①・②を操作すると①は $115\text{m} \div 60\text{m} = 1.917$ 間、 $115\text{m} \div 70\text{m} = 1.643$ 間となり、②は $300\text{m} \div 60\text{m} = 5$ 間、 $300\text{m} \div 70\text{m} = 4.29$ 間となる。いずれの場合も整数値に近いのは60mを単位としたもので、各60m間で①で2等分、②が5等分となる。

つまり、現在推定される外郭南辺総長と検出遺構の位置の相関から、SB110外郭南門以西は60mで7等分される位置に櫓が配置され、SB110以東でも対称しただろうと仮定されるから外郭南辺は60m間で14等分される仮定となる。

この仮定から、本遺構はSB110外郭南門から西から5地点目、南西隅の隅櫓を想定し、それから2地点目に配置している可能性もある。

しかし、櫓配置の計画性は認められるにしても、検出例の多い徳丹城跡西辺では北より南へ $4 \cdot 4 \cdot 4 \cdot 3 \cdot 3$ の比で5分しており、その実距離は $70.75\text{m} \cdot 80.30\text{m} \cdot 72.30\text{m} \cdot 64.84\text{m} \cdot 65.30\text{m}$ とされ、北から1・2間では2間めが9.55m長い。したがって、本遺跡でも実際に用

いられた分割比と実数値の誤差等の介在を考えると、60m 14分割も単純に割り出せぬ要素もあろうと思われるし、70m 12分割論も含め、外郭南辺の櫓の配置を指摘できる可能性としながら、同時に本項の記述とは異なる見解を遺跡の地割りを視点に2—(3)項に併記する。

SB121では建てかえがあり、その時点で東側に1間増築し2期目の建物になる⁸⁸。その中で東妻平面に重複があるようにみえたが、たちわりの結果、重複がなかったもので、それと同じ様相が、本遺構の東妻北柱と西妻北柱の掘り方(第8図・櫓掘り方1・3)にもみられ、西妻北柱掘り方のたちわりでは、重複も抜きとりも認めなかった。

SB121、本遺構にしても、このことは何に起因したのか、調査の進展と類例を求めるとともに今後の課題である。

注1 「太田方八丁遺跡」 昭和54年度発掘調査概報 盛岡市教育委員会 1980

注2 古川雅清 東北地方古代城柵官衙の外郭施設—所謂「櫓」跡について—
「研究紀要」 VI 宮城県多賀城跡調査研究所 1979

注3 注2と同じ

注4 「志波城跡」I 太田方八丁遺跡範囲確認調査報告書 盛岡市教育委員会 1981
注1前掲書

注5 「志波城跡」 昭和55年度発掘調査概報 盛岡市教育委員会 1981

注6 前掲の注1概報の第22図 RY+50と前掲注5概報第2図 RY-10をもとに算出した。
なお、前掲注1概報等では、推定外郭南門から SB121まで70m、本櫓(同書で SB113としている)までは295mと計測している。

注7 文化財調査報告第20集 「陸奥国徳丹城」 一岩手県雲波郡矢幅町所在—
岩手県教育委員会 矢巾町教育委員会 昭和47年3月

(3) 築地内外溝

築地線に平行してその内（北）と外（南）を走る。規模の上で外溝が若干大きいのが構造的にはほぼ類似する。築地版築土を採取した後に外郭施設の機能の一端としたものと推察される。

堆積土は自然堆積土と推察されるが、内・外溝の大きな差異は、外溝1層の水成シルトを内溝ではみないことである。この水成シルトは、堆積状況から数回に及ぶ水の作用によるものと知見でき、溝の大半が埋没した時期のものである。内溝に知見できないのは、築地の高まりの残痕が堤防的役割を果たしたためかとも思われるが断定できない^{注1}。

また、堆積土下層では内溝A—B地点の3・5層（第9—1図）のように著しく攪拌した一見人為的様相を呈する層を多くみるが外溝では少ない。一方、外溝では下層の3・4層境に介在する粉状バミスが、内溝では南上端以南の2層上面に介在するのが一般的で、西端の一部を除くと溝内には検出されない。これらの状況は何に起因するものか積極的判斷資料をもたない。

恣意的には内溝3・5層は築地の崩壊土と関連するものか、だとすると崩壊方向を示唆し、外溝に比し内溝の埋没が早く、粉状バミスのあり方^{注2}にも影響したものと考える。

注1 「シルトの流入が、外郭築地内溝におよんでいないも内城築地外溝に流入していることから、外郭築地が堤防としての機能を全うしたとは考えがたい。」と具体的な例がある。

「志波城」太田方八丁遺跡範囲確保調査報告 盛岡市教育委員会 1981

注2 「粉状バミスの堆積は高さや層厚は一定せず、同一遺構であっても堆積は様でない」注1前掲報告書

本調査地の約190m 東方では築地内・外溝、外大溝とも堆積土中に粉状バミスは介在していない。

「志波城跡」第21次調査現地説明会資料（財）岩手県埋蔵文化財センター 1981

(4) 南（外）大溝

二重構造外郭の最も外周の大溝である。築地寄柱幅の midpoint から溝幅 midpoint まで約44mを計り、築地線にほぼ平行して走る。築地内・外溝より規模は大きく、堆積土の様相は概ねで築地外溝と類似する。したがって、堆積土中の水成シルトから数回の洪水の作用があったことが認められる。

溝南壁沿いの西半30m、黄褐色シルトを主体に黒褐色土が攪拌状に混入する人為堆積層が幅4m内外、厚さ35cm～50cm内外で検出したことは既述した。堆積の状況は斜方向のしま状で南側で顕著である。本来は山状を呈したものの上部が削平されたものと推定され、版築等を意図した堆積とは異なる。すなわち、溝から掘りこんだ土を投棄し、その高まりを用いた施設の可能性があり、土塁等も想定される。

盛岡市教委調査のSD030大溝西側にも、わずかに人為性が認められる土壘状の高まり^{注1}があり西辺大溝推定位置、東辺の大溝痕跡の狭長な水田沿いの一部に土手が認められることなど、大溝沿いに土壘状の施設を想定できる要素はあるが、いずれも断定できるまでにはいたらない。^{注2}

注1 「太田方八丁遺跡」 昭和32年度発掘調査概報 盛岡市教育委員会 1978

注2 現地における踏査確認等による。

2 竪穴住居跡と竪穴

(1) 竪穴住居跡

検出された竪穴住居跡および竪穴は169棟、うち精査は72棟である。以下、項目にしたがって住居跡の構造について概括して述べる。

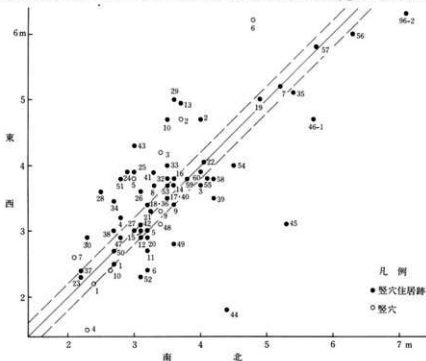
1) 平面形 (第114図)

いずれの住居跡も方形を基調とする平面形を呈するのが一般的で、東西・南北の中軸での計測では第114図に示すように、東西・南北長軸の長さが同一のもの7棟、その差20cm以内のもの18棟で、その規模にもよるがほぼ正方形に近似するものであり、したがって、25棟が正方形もしくは近い平面形を呈することになる。

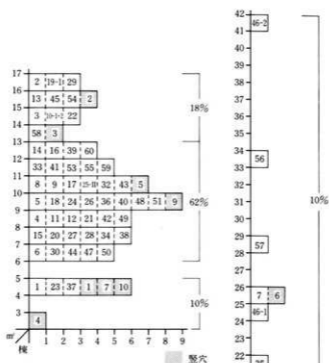
一方、南北軸の長さに対し東西軸が21cm以上のもは23棟、東西軸の長さに対し南北軸の長さが21cm以上のもが19棟と棟数においては大きな差はないものの、後者では東西・南北軸の長さが近似する方向により集中する。すなわち、東西軸と南北軸の長さが近似し正方形に近い平面形をもつ住居跡と東西方向に長い長方形の平面形を呈する住居跡が多い傾向を示す。その中で4号竪穴と44号住居跡は特異である。

2) 規模 (第115図)

床面積のわかるものについて第115図でみると次の分布が見られる。①2㎡以上5㎡未満に包



第114図 竪穴住居跡・竪穴軸長グラフ



第115図 竪穴住居跡・竪穴床面積

括されるもの7棟、うち竪穴が4棟。②9㎡以上10㎡未満をピークにその前後にあるもの、すなわち、6㎡以上13㎡未満にあるもの42棟、うち竪穴2棟、③13㎡以上17㎡未満にあるもの12棟、うち竪穴2棟、④21㎡から42㎡未満にある竪穴住居跡6棟と竪穴1棟である。

以上から、規模分類すると①は小規模、②・③はやや幅の広がり大きいが中規模、うち②をA、③をBとし、④を大規模とする。

この場合、大規模住居跡(竪穴も含む以下同じ)は、中規模住居跡との間に明瞭な差異を見るが、中規模住居跡は6㎡以上17㎡未満までを包括すると、10㎡強の床面積差をもつ、しかしこの間に連続しており、今次調査での精査遺構のみで見れば一般的規模に考えられるグループとみるが、とりわけ、中規模Aとしたグループが平均的な竪穴住居跡の規模になろう。小規模グループは数的にも少なく、いわゆる竪穴としたものが半数以上であることに特徴がある。

3) 壁と周溝

壁はすべて地山そのまま検出されたが、壁沿い周溝底面に壁土留杭跡かと想定される小ビット列を検出したのに2号・57号・59号竪穴住居跡がある。

周溝は竪穴住居跡12棟、竪穴3棟で全周または一部で認められた。

4) 床

床面は①地山面をそのまま利用する場合と、②地山を一旦掘り込んだ後、シルトと黒色土の

攪拌土等を用いる一定面まで埋めて（貼る）構築するものとに二大別される。

①の床をもつものは19例、②の床をもつもの35例、①と②の組み合わせの18例であり、全面もしくは一部でも床構築土を用い整地し床面としているものが多い。

5) 柱穴 (第116図)

配置の規則性や規模から柱穴を明確に確認できた住居跡は18棟である。また柱穴状ピットは検出されたものの配置の規則性に欠けるため柱穴と断定できないものも多く、全般に柱穴をもたない住居跡が多い。

配置の規則性から明確に柱穴と言えるものに限って、主柱穴の配置形態をみると以下のようなになる。この場合、配列状況の基調を主要にとらえ細部の差異は包括してあるが、住居跡平面内での柱位置の割り出しを若干試みた。

A類 2～3本の柱穴が、カマド方向のほぼ中軸線上に配置されるのを基本とする。28号住は壁外にも柱穴を認めるが、壁内の柱穴配置の様相からこの類に含めた。6棟の住居跡を数える。

A₁；柱穴を2本もつもので5号・26号・52号・28号住の4棟。

A_{1-a}；5号・28号住カマド側の柱が壁との間隔をもち、対する柱が壁に密着してあり、柱の乗る中軸線の壁間距離を約「3分割」した位置にカマド側の柱が位置する。(28号住は既述の通り壁外柱穴の存在から5号住と同一視できない要素はあり得る)なお、5号住はほぼ正方形、28号住は東西に長い長方形で柱列は長軸に沿う。

A_{1-b}；26号住 2本の柱穴とも壁との間隔をもち、柱の乗る中軸線の壁間距離を「4分割」した点の壁寄り位置に各々ある。東西に長い平面の長軸に柱列が沿う。

A_{1-c}；52号住 2本の柱穴とも壁に密着して位置する。南北に長い長方形の東西短軸に柱列が沿う。

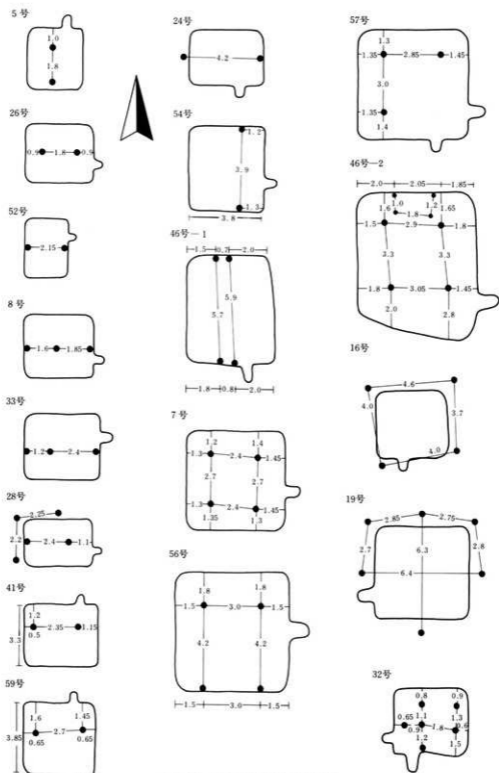
A₂；柱穴を3本もつもので8号・33号住の2棟。

A_{2-a}；8号住 両端柱穴が壁に密着し、中間に位置する柱穴は柱の乗る中軸線の壁間距離を約「2分割」した点にある。東西に長い長方形の長軸線に沿う柱列である。

A_{2-b}；33号住 両端柱穴が壁に密着し、その間に位置する柱穴は柱の乗る中軸線の壁間距離を約「3分割」した点にある。東西に長い長方形の長軸線に沿う柱列である。

B類 2本の柱穴がカマド方向軸に直交する軸線上に配置されるのを基本とするもので、4棟の住居跡を数える。

B₁；41号住・59号住で、2柱穴とも壁と間隔をもつ。41号住では柱列方向壁間距離を約「7分割」した位置に、また、カマド方向軸では約「3分割」の位置で住居跡長軸の東西中軸線より北半でカマド寄りに位置する。



第116图 双穴住居跡柱配置模式图

59号住では柱列方向壁間距離を約「6分割」した位置に、カマド方向軸では等分近似値は得られないが、東西中軸線よりも北でNo 1カマド寄りに位置する。

B₂-a : 24号住 2柱穴のうち一方が壁に密着し他方は壁外にあり、柱列は住居跡長軸の東西中軸線上に乗る。

B₂-b : 54号住 2柱穴とも壁に密着し、カマド方向軸を約「3分割」した位置で南北中軸線よりも東半でカマド寄りに位置する。

C類 カマド方向の中軸線沿いに4本が対状に配置されるものである。基本的にはA類と共通点をもった配置と考えられる。46号-1住1棟のみであり、4柱穴ともカマド方向中軸線に近接した位置で各々壁に密着し対となる。やや幅はあるがカマド方向軸に直交する壁間距離の約「5分割」の位置が考えられる。なお、住居跡長軸はカマド方向軸と同方向である。

D類 4本の柱穴が住居跡壁内に配置され、4本、または1対が平面对角線近くに位置することを基本とする。3柱穴の57号住も配置の基本は共通するとみてこの類に含めた。

D₁-a : 7号住 4本の柱穴が住居跡平面对角線近くに位置するが、カマド方向に沿う柱間距離とそれに直交する方向の柱間距離は8:9で前者が短かく、4本の柱穴を結ぶ形は長方形を呈するが、各壁間距離を約「4分割」した点に位置する。

D₁-b : 46号-2住、46号-1住拡張から来る平面形のゆがみから、柱列方向と壁方向に若干の差異があり対角線上にきちんとした乗り方はしない。カマド方向に沿う柱間距離とそれに直交する柱間距離は10:11と前者が短かいが、各壁間距離を約「4分割」した点に柱配置の基本があったと思われる。

なお、カマド方向に沿う主柱列の一方に外へ張り出す4本の柱穴があり、2本は壁に密着し、カマド方向壁間距離の約「3分割」地点にあり、その各々の内側に対があり、D₁-aとは異なる。

D₁-c : 56号住 4柱穴のうち、カマド方向に沿う柱列の一方は壁に密着し、他方、これに平行する柱列は住居跡平面对角線近くにあり、カマド方向に沿う柱間距離とそれに直交する柱間距離は5:7で前者が短かく、4本の柱穴を結ぶ線は長方形を呈し、カマド方向に沿う柱穴は、壁間距離の「4分割」点に位置し、一方は約「3分割」ないし約「4分割」地点が考えられるがいずれとも言い難い。ただし、1.8m・4.2mの柱間隔は極めて規格的な配置を示す。

D₁-d : 57号住 3本の柱穴である。いずれも住居跡平面对角線上に乗り各柱間はほぼ等距離と言える。各壁間距離の約「4分割」の点に配置するものとみられる。

E類 柱穴は壁内には認めず、壁外周にのみある。16号・19号住が該当する。

E₁ : 16号住 各隅近くに認めるが、4本を結んだ形はゆがみが著しい。

E₂ : 19号住 各壁の中軸線上に4本が位置し、カマド方向に沿う柱列に平行した片一方の各隅にある。すなわち、住居跡外周半分には5柱穴があり各々の柱間隔はほぼ等しい。

F類 32号住の例で、住居跡内にクロス状に5柱穴が位置するもので、カマドの移築と関連すれば、A₂類の重複も想定されるが明らかではない。

以上、大雑把に分けても多岐になり、詳細には更に分れるものであるが、柱配列の基本からすれば次のようになると考える。

① カマド方向のほぼ中軸線にのるもので長軸方向に一致するものが多い。② カマド方向に交する線上に乗るもので①とは対称的である。長軸方向に沿う傾向にある。①・②は一般的規模の住居跡にみられ、①は東カマド、②は南・北カマドの例が多い。両者の場合、壁間距離を「2分割」～「7分割」した点のいずれかに柱位置が想定されるが、総じて「3分割」する例が多い。

③ 壁内にいわゆる対応する4本柱を基本とし、この場合、柱間距離は相互の比率および実数値においても極めて明確な計画性が示され、壁間距離の「4分割」地点に配置される例が多く、すべて大規模住居跡である。

④ その他に壁外周にあるものや、46号—1住、32号住の例をみる。

指摘できるのは、一般的住居跡と大規模住居跡との柱配置の相異と、いずれの場合でも柱配置に計画、規格性が認められることで、それが住居跡平面を約等分割したいずれかの地点に柱を配置していることで、水沢市膳性遺跡の奈良・平安期の竪穴住居跡でも4～6等分配置が認められており、住居跡空間にもとづく計画配置、住居跡規模との相関および設計上の使用尺の問題と合せ、柱配置の実数値の分析検討が課題である。

注1 岩手県埋蔵文化財センター 高橋与右衛門氏の教示による。

6) カマド (第117・118図 第76・77・78表)

調査したカマド総数は74基である。以下、構築形態、施設位置等について述べる。

イ) 構築形態 遺存状況が悪く形態不明のものを除く66基を対象にし分類する。基準としたのは燃焼部の位置、煙道の有無とし、煙道形態は燃焼部奥壁から煙出し方向にゆるやかな傾斜で高くなるもの、水平に近いものが概ねなので、煙出しも含めとりあげない。

A類 煙道をもつカマドで燃焼部の位置と煙道の構築法によって次のようになる。

A₁ : 壁内に燃焼部をもちシルト等で構築される。奥壁から壁外に溝状の煙道をもつ。

A₁-a : A₁の形態であるが煙道がくりぬきのもの。

A₂ : 壁外に張り出す燃焼部から溝状の煙道がのびるもの。

A₂-a : A₂の形態であるが煙道くりぬきのもの。

B類 煙道をもたないもので燃焼部の位置で3形態に分れる。

B₁ : 燃焼部は壁内にありシルト等で構築した袖がある。

B₂ : 燃焼部が壁外に張り出しているもの。

B₃ : 燃焼部は壁内と一部が壁外に張り出すもので、壁内にはシルト等で構築した袖がある。

対象66基中、A類52基 (A₁ 40、A₂ 7、A₁-a 2、A₂-a 3) B類14基 (B₁ 4、B₂ 4、B₃ 6) となり、煙道をもつA類が大半をしめ、とりわけA₁類としたものが多く約61%である。

ロ) 構築方法 カマド本体の構築はシルトと黒褐色土等の混土を用いるのが主体であり、芯材として石や土器片を用いているものは7例と少ない。壁外に燃焼部が張り出す場合の側壁は地山そのもののことが多い、ただし、2号・15号・51号住のように他からのシルトや黒褐色土を貼る例もある。

燃焼部火床は地山面を利用するものと、一旦掘りこんだ後、埋土してその上面を火床とするいわゆる掘り方法によるものがある。掘り方を確認したのは74基中38基で約半数、形態分類の対象とした66基の中では33基で認めた。うち、A₁で40中19、A₂ 7中3、A₁-a 2中1、A₂-a 2中2、B₁ 4中1、B₂ 4中2、B₃ 6中5である。A₂-aとB₃で割合が多く特徴的であるが、A₂-aは例が少なく全体的傾向は明らかでない。ただ一般的には各類とも約半数程度を示している。

カマド内の支脚は13例を確認するが、石を用いるもの8、礎1、環1、石に礎を伏せるもの1、石に環を伏せるもの1で、後二者は40号住と54号住にみられ、同様の例は岩手県埋蔵文化財センターの調査でも各3例と1例の報告がある^{註1}。

ハ) カマド施設位置と方向 カマドの施設位置を各類ごとに示したのが第76表である。絶対数の多いA₁は東壁に位置するものが約半数強で、次いで北壁、南壁、西壁の順となる。

類例の少ないA₁-aはともかく、東壁にはほぼ各類が施設された状況にあり、B₃は6基中5基が認められる。また、B₂は分散傾向を示す。

しかし、A₁以外は数的に少ないことから、類別の施設位置の傾向を積極的に示すものではない。

第76表 類別カマド位置

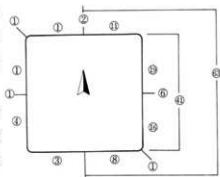
類 \ 位置	東	西	南	北	南東隅	北西隅	計
A ₁	22	3	6	9			40
A ₂	4		2		1		7
A ₁ -a			1			1	2
A ₂ -a	2			1			3
B ₁	3			1			4
B ₂	1	1	1	1			4
B ₃	5			1			6

第77表 カマド施設位置区分と住居跡

	左	種	中	種	右	種
北壁	15住	1	29(No.2)・49住	2	2・4・5(No.2)・22(No.1)・27・29(No.1)・41・55・59(No.1)・60・25-1住	11
南壁	10(No.2)・21・24・30・43・46-1 57(No.2)・59(No.2)住	8			16・32(No.2)・40	3
東壁	3・5(No.1)・11・14・17(No.1)・ 20・22(No.2)・23・25-II・31・33 34・39・42・45・51・52・58(No.2) 61住	19	1・28・48・50・53・62住	6	7・8・9・10(No.1)・13・17(No.2) 18・26・35・36・46-2・47・54・ 56(No.1)・56(No.2)・57(No.1)住	16
西壁	19・32(No.1)・38・58(No.1)住	4	44住	1	12住	1
南東隅	6住					1
北西隅	37住					1

次に、調査カマド74基について、住居跡内からカマドに対し中央、左、右、すなわち、北壁施設を例にとれば、中央施設が中央、西半施設が左、東半施設が右のように位置区分し該当住居跡を示したのが第77表である。

位置区分ごとに集計し第117図にまとめた結果、施設位置区分ごとの実数は図示したとおりであり、絶対数で東壁が多く、北壁、南壁、西壁の順で北西隅と南東隅に各1基がある。



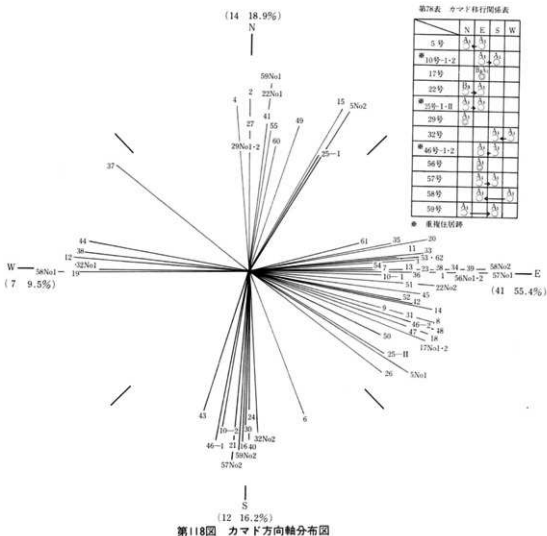
第117図 位置区分別カマド分布図

各壁とも中央施設は少ない、ただし、右、左と区分したものでもより中央寄りのものが含まれることを前提とされたい。東壁では左右にほぼバランスのとれた施設を示すが、北壁では右に、南壁では左に、西壁でも左に偏する。

つまり、方形の中軸で東西、南北に分割したとき、東半に最も多く施設され、対する西半ではその南半、方形全体では南西よりに集中、逆に北西への施設は極めて少ない。

カマド方向軸をみると第118図のように、総体的に東西南北の各軸より右に偏する傾向をもつ、したがって、カマド方向を住居跡方向としたとき北東、東南、南西、西北に向く傾向を示すものである。

北カマドと東カマドは方向差が大きく、北カマドの場合北軸より西に偏する4号住カマドと5号住No.2カマドでは約31°30'の幅をもち、東カマドの場合61号住カマドと26号住カマドでは約51'の幅となる。すなわち、北方向、東方向と一括したもので、住居跡方向に微妙な差があり、特に東向き住居跡の場合、42号・45号・46号-2・47号・48号・50号住、33号・34号・36号・39号住等それぞれ近距離に集中し近似するカマド方向軸をもつ例であり、前者では東南方向、後者は東軸に近いいわゆる東方向を示すこと等から、集団域や住居跡構築時の相異を示唆する一要因とも考えられるが、なお検討を要する。



二) カマドの移行と先後関係 同一住居跡でのカマド移行は9例、2期にまたがる住居跡は3例である。第78表に示すように、その移行先は同壁も含めて、東は同壁2、北から2、南から1、西から1の6例で最も多く各壁から移行対象となる。南は東から2、北から1、西から1の4例、北は同壁1、東から1の2例、西への移行はない。

以上の中から先後関係を考えると、まず、2期にまたがる住居跡で10号-1・2住で東から南へ、25号-1・II住で北から東へ、46号-1・2住では南から北へとなって、北と西への移行はないが、東と南の先後を明らかにすることはできない。

また、同一住居跡内でも、最も移行対象の多い東から北および南への移行が認められるし、南への移行が4例中2例が東からと半数におよぶとしても、それをもって南への移行が最も新しいとするには事例が少ない。

次に、カマドの形態類別での移行関係をみると、対象となるのは、A₁が22基、B₃が2基である。うち、A₁20基は相互に10組をなして同類間の移行で、A₁2基とB₃2基が相互に組み合せて移行関係をもつ。すなわち、17号住は同壁でB₃からA₁へ、25号住では北壁のB₃から東壁のA₁へとなり、いずれもA₁が新しい関係となる。

また、同一住居跡における移行位置は、58号・59号住のように全く対称する壁にする例以外は、同一壁、異なる壁の場合でも先に近い位置に施設する傾向にある。

7) その他の施設

イ) 出入口様施設 33号・36号・43号住に壁から床面に張り出す半円もしくは三角形のテラスがあり、シルトと黒褐色土で固められている。33号と43号住ではカマドの右側、36号住ではカマドの左側に位置するが、カマド施設壁に沿うことは共通する。なお、33号・36号住は隣接する住居跡である。出入口様としたが明確な用途は類例をまたねばならない。

ロ) 炉様施設 43号・45号住の床面上に立石をもつ火気使用施設がある。45号住での知見は周囲にシルト質土を貼った馬蹄形の掘りこみの中央に立石があり、炉的なものより住居跡内に施設したカマド状の施設の可能性もある。

(2) 竪穴

既述したように、カマドの認めないものである。しかし、床構築方法等住居跡と共通し、3号・6号・7号竪穴等で火気使用痕があり住居跡の可能性も想定される遺構である。一般に出土遺物は少ない。10棟中住居跡より古い1号・2号、調査区外に一部出る8号竪穴はカマドの存在の可能性も否定できない。

(3) 竪穴住居跡、竪穴の配置と遺跡の地割り (第119図)

竪穴住居跡、竪穴の分布を平面的な位置関係で検討すると、調査範囲全体の中でKブロック以北はほぼ全面にわたって検出されているのに対し、以南では調査範囲を南北に斜めに画するように東側では検出が少ない。

すなわち、第119図の遺跡の南西隅と推定される地点から東へ約100mで築地中軸線に直交する直線a-bより東側で検出されたのは、57号住居跡と14号掘立柱建物、32号焼土遺構のみである。しかも前二者に後述する築地線より113.5m以南にある。

このことは、岩手県埋蔵文化財センターによる県営圃場整備事業関連調査で、南辺築地の中軸から約25m離れて平行し、本調査区に直交し東へ約160m、この地点で直交する各々2m幅のトレンチの中で11棟の竪穴住居跡が検出され、特に南北トレンチでの最北の住居跡は築地中軸線より約100mに位置するSI 378住居跡であり、それ以北での検出がなかった。また、盛岡

市教育委員会による東辺沿いの調査でも同様の傾向がみられること⁸²から、本遺跡における竪穴住居跡の配置のあり方の一端を示唆するものである。

すなわち、本遺跡における竪穴住居跡は外郭から約100m ほどの幅の中に配置されたとする想定がなりたつと同時に、更に内部におけるあり方は今後の調査の推移に期さねばならない。

さて、本調査区にかえて分布をみると、住居跡の密集部分に東西に走る空白箇所が少なくとも第119図のイ～ニの4箇所に見知できる。

築地中軸線からイまで約113.5m、イーロも113.5m、ローハは140m、ハーニは111.5m、ニから2号住のホまで120mの間隔をもち、空白箇所の南北幅は約15m～20m 内外とみられる。

イ～ニを区切りとし、築地線からイまでをA、以下B・C・D・Eのブロックにすると、Aブロックでは井戸と4棟の建物があり、56号・57号住と大規模住居跡をもつ特徴があり、56号住は築地中軸線から100m、西辺からも約100m、井戸から約30m に位置し、円面硯を出土する等、特殊な機能が考えられる。なお、既述の埋文センター調査のSI378住は56号住より若干小さいが、カマド方向、柱配置が類似し56号住の約200m 東に位置する点興味深い。

57号の大規模住居跡は、西辺から100m 線より東側に出る。井戸の東約30m にあり、井戸と56号・57号を結ぶ線が直交し正方形の二辺のなす角地点に井戸があり、恣意的ではあるが三者に配置の意図性を感じる。

既述したが、このブロックには11号・12号・13号・14号と4棟の掘立柱建物があり、柱間、間尺、柱掘方等、および方向に若干の差異はあるが、いずれも南北棟で約20m ほどの間隔で位置しており、住居跡と同時期の建物と推定され、大規模住居跡との関連の中で配置された可能性もある。

以上のように、大規模住居跡と掘立柱建物跡の配置を主体にし、一般的規模の住居跡を築地近くに見るが、密な配置ではなく他ブロックと様相を異にする。

Bブロックは西調査区外にのびると推察されるが、46号-1・46号-2の大規模住居跡がある。46号-1住を拡張したのが46号-2住であるが、他の大規模住居跡に比較し床面の汚れも著しく、ピットを多くもち、還元炉とした炉体片を堆積土中に認めた住居跡である。

この住居跡の周辺に一般的規模の住居跡を認めるが、カマドの項〔(1)-7〕-ハ〕で既述したようにカマド方向軸が近似する住居跡も多く、鉄滓や羽口の出土などから、46号-1・2住を核に工房的機能を果たした集団域とも想定される。

46号-1・2住の東約10m に建てかえのある15号-1・2掘立柱建物があり、46号-1住の拡張による46号-2住、51号・52号住、9号・10号竪穴に人為的堆積土と推定される層が認められることと合せ、変遷のあったことを推定する。

C～Eブロックは一括する。ここでは、それぞれのブロックの中で更に小区分される様相を

もつ、Cブロックでは $c_1 \sim c_4$ 、Dブロックでも $d_1 \sim d_4$ が想定され、Eブロックは不明瞭である。これらの小区分は東西方向の区画と南北方向の区画とからなるが、特に南北方向の区画は c_2 と c_3 間にあるものと、 $c_3-d_1-d_3$ と $c_4-d_2-d_4$ との間を画するものがありブロックを越えて共通する状況を示す。

なお、大規模住居跡の35号・7号住は、それぞれCブロックとEブロックの東端に位置し、35号住の南西約20mに9号掘立柱建物がある。

以上から竪穴住居跡と竪穴は一定の区画に基づき配置されたと推定され、特に築地中軸線から計測して約111.5m～140mの区画が考えられることと、西辺からほぼ100m付近までの検出であることは、既述の他調査例と総合したとき、外郭線に平行する100m内外に配置された可能性がある。

111.5m～140mの数値の中で、外郭南辺から2区画めまで227mあり、3区画めが約140m、4区画め115.5m、5区画は明瞭さに欠けるが120m以下である。

一方、外郭南辺から内城南辺間の距離は238mを計り、内城西辺は150mあり、前者に2区画めまで、後者に3区画めが10mの差異はあるもののほぼ見合う対応になる。

これに、南辺外郭で検出されている槽位置を関連させると、盛岡市教委調査のSB121は外郭南門から70m東に位置し、西対称地点に槽があると仮定するとこの間約140mとなる。すなわち、3区画めの距離と一致し、外郭南辺840mで南門を中軸に東・西各420mから槽位置の70mをとると、各350mとなる。本調査区検出の槽は南西隅から東115mにあり、350mを3分割した約117m近似の位置にある。

つまり、115m、117mとも最短の111.5mとも最短の111.5mと3.5m～5.5mほどの差異はあるが、3区画めを除く各区画距離に近い。

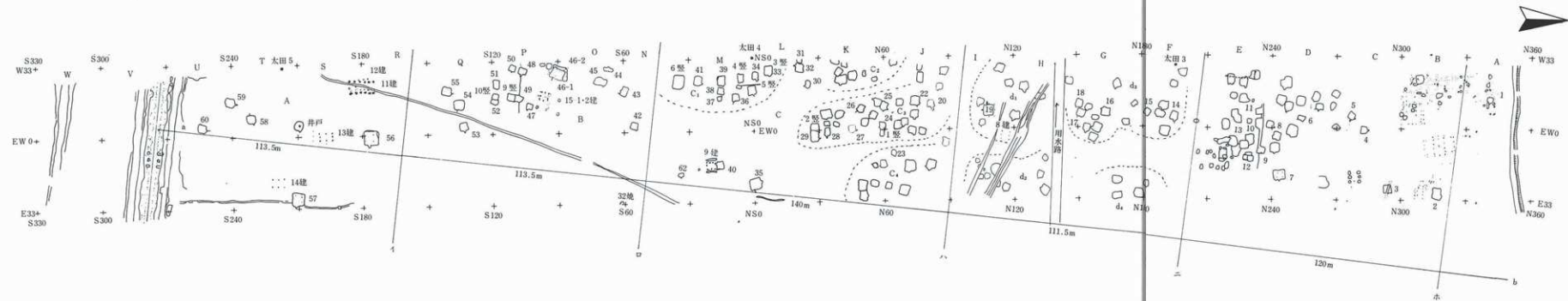
このことから、内城対応部分は約140m、他は約115m前後の分割で東西、南北の地割りがあった可能性が想定されるとともに、分割地点の外郭に槽の配置も考えられる。この解釈は既述の1—(2)項の内容と異なるが可能性の一つとして併記する。

最後に各小区分の中で、遺構相互が極く接近し同時存在となし得ないものもある。したがって、総合的視点で実態を明らかにする要があり今後の課題としたい。

注1 「志波城跡」第21次調査現地説明会資料 (財)岩手県埋蔵文化財センター 1981

注2 八木光則氏(盛岡市教委)の教示による

注3 「志波城跡」I 太田方八丁遺跡範囲確認調査報告書 盛岡市教育委員会 1981



第119回 竪穴住居跡・竪穴配置推定図

第79表 堅穴住居跡・堅穴一覽表

遺構名	平面形	規模	上層住居穴	張り方	周溝	付設高さ	方向	空堀形態	支脚	廻り方	溝壁構造	構造	確認しビット	貯蔵六種ビット	備考
1号住居	正方形	2.5×2.7	4.83				N-80°-E	A ₁					有?		
2号住居	長方形	4.7×4.0	16.28	一部有	有	北壁東半中央	北壁北	B ₁		有	黒色土、シレット			5	
3号住居	正方形	3.7×4.0	14.24				N-86°-E	B ₁		?	*			3	1号溝より旧
4号住居	長方形	3.2×2.8	8.68				N-4°-W	A ₁			シレット上層			2	
5号住居	正方形	3.0×3.2	9.60	2	有	北壁東半中央	N-122°-E	A ₁		有	シレット、黒色土、石、土器片		有	3	
6号住居	長方形	2.4×3.2	6.30				N-159°-E	A ₁		有	シレット			3	
7号住居	正方形	5.2×5.2	25.00	4	有	東壁南半中央	N-89°-E	B ₁		有	壁外張り出し			5	
8号住居	長方形	3.7×3.3	10.85	3	有	東壁南半	N-105°-E	B ₁		有	シレット			2	
9号住居	正方形	3.4×3.6	10.71				N-107°-E	?		?	?			2	2号溝より旧
10号-1住居	長方形	4.7×3.5	14.32	一部有			N-91°-E	A ₁ ?		有	黒色土、シレット		有?	2	2号溝より旧
10号-2住居	長方形	4.7×3.5	14.32				N-84°-E	A ₁ ?		有	黒色土、シレット		有?	1	2号溝より旧
11号住居	正方形	2.7×3.2	8.66	一部有			N-189°-E	?		?	?			2	2号溝より旧
12号住居	正方形	2.9×3.1	8.40	有			N-66°-W	?		?	?			1	3号溝より旧
13号住居	長方形	4.95×3.7	15.98	一部有			N-189°-E	?		?	?			2	2号溝より旧
14号住居	正方形	3.7×3.6	12.95	有			N-101°-E	A ₁		有	壁外張り出し			1	
15号住居	正方形	3.0×3.1	7.84				N-30°-E	B ₁		有	黒色土、シレット			5	溝構造不明
16号住居	正方形	3.8×3.6	12.24	無4?	有		N-181°-E	A ₁		有	黒色土、シレット			1	
17号住居	正方形	3.5×3.5	10.24	有			N-111°-E	B ₁		有	壁外張り出し			5	溝構造不明
18号住居	正方形	3.4×3.2	9.75				N-109°-E	A ₁		有	壁外張り出し			1	
19号-1住居	正方形	5.0×4.9	16.00	無7?	有		N-91°-W	A ₁		有(石)	壁外張り出し			5	
20号住居	正方形	2.9×3.2	7.85	有			N-89°-E	A ₁		有	シレット、石			6	目前より旧
21号住居	正方形	3.3×3.25	8.00				N-184°-E	B ₁		有	壁外張り出し			1	
22号住居	正方形	4.05×4.05	14.82	有	一部有		N-7°-E	B ₁		有	一部壁外張り出し			2	
23号住居	正方形	2.3×2.2	4.30	有			N-94°-E	A ₁		有	黒色土、シレット				1号穴より新
24号住居	長方形	3.9×2.9	9.62	2	有		N-89°-E	B ₁		有(石)	壁外張り出し				25号-1住より新
25号-1住居	?	?	?	?			N-179°-E	A ₁		?	?				
25号-2住居	長方形	3.9×3.0	10.30	有			N-31°-E	A ₁		有(石)	壁外張り出し			3	
							N-121°-E	A ₁			黒色土、黒色土、シレット				25号-1住より新

遺構名	平面形状	規模 柱穴間隔(㎜)	柱 穴 間隔	国 庫	付設場所	方向	分類形態	支 脚	埋 入 方	照壁構築材	構造	積出しピット (ピット)	遺 構 考
25号住	長方形	3.6×3.1	9.57	有	東野南端	N-127°-E	A ₁	有(石)	有	石	溝状	有	1 埋込跡付使用面
27号住	正方形	3.0×3.0	7.88	有	東野東端	ほぼ真北	A ₁		有	黒色土、シルト	溝状		3
28号住	長方形	3.6×2.5	7.88	2-8/3	東野中央	ほぼ真北	A ₁		有	?	溝状	有	
29号住	長方形	5.0×3.6	16.15	一部有	北1段野中央	*	A ₁		有	?	溝状		3 2号野穴より軒
30号住	長方形	2.9×2.3	6.38	有	東野東手	N-180°-E	A ₁		有	黒色土、シルト	溝状	有	2 大部分埋没
31号住	縦2方形	2×2.3	?	有	東野北端	N-105°-E	A ₁	有(石)	有	一部壁外、石	溝状	有	2 3号住より旧
32号住	正方形	3.8×3.5	10.50	7?	北1段野南端	N-90°-SW	A ₁ ?		有?	?	溝状	有	2 31号住より新
33号住	長方形	4.0×3.5	11.78	3	北2段野南端	N-178°-E	A ₂	有(埋込跡)		壁外、地山崩り出し	溝状	有	5 埋込跡付 第A1口埋没
34号住	長方形	3.4×2.7	7.96	有	東野北中央	N-80°-E	A ₁		有	黒色土、シルト	溝状	有	
35号住	長方形	5.1×5.4	21.60	2	東野南中央	N-79°-E	A ₁	有(土曜カメ)	有	シルト	溝状	有	2
36号住	長方形	3.4×3.2	9.44	有	東野南端	N-90°-E	A ₁		有	シルト	溝状	有	3 埋込跡付 第A1口埋没
37号住	正方形	2.4×2.2	4.50	一部有	北西端	N-32°-SW	A ₁ -a		有	黒色土、シルト	溝状	有	7
38号住	長方形	3.0×2.7	7.69	一部有	西野南端	N-83°-SW	?		有	シルト	溝状	有	?
39号住	長方形	3.5×4.2	12.54	有	東野北手	N-89°-E	A ₁	有(石)	有	黒色土、シルト、石	溝状	有	3
40号住	正方形	3.5×3.5	9.60	有	西野西端	N-179°-E	A ₂	有(石、カメ)	有	壁外、シルト巻付	溝状	有	3
41号住	長方形	3.9×3.3	11.16	2	北野東端	N-7°-E	A ₂		有	黒色土、シルト	溝状	有	1
42号住	長方形	3.1×3.1	8.41	有	東野北端寄り	N-100°30'-E	A ₂ -a		有	壁外地山崩り出し	溝状	有	4? 新しい溝に切り取る
43号住	長方形	4.3×3.0	10.80	一部有	西野東端	N-197°-E	A ₂ -a		有	一部壁外崩り出し	溝状	有	4? 埋込跡付
44号住	長方形	1.8×4.4	6.72	一部有	西野中央	N-80°-SW	B ₂		有	?	溝状?		伊
45号住	長方形	3.1×5.3	15.60	一部有	東野北手	N-90°-E	?		有	?	溝状?		7
46号住	縦1-横1長方形	4.7×5.7	24.30	10	西野東端	N-190°-E	A ₂	有(カメ)	有	シルト、石、埋没	溝状	有	46号-住より旧
46号住	縦1-横1長方形	6.3×7.1	41.89	10	東野南端	N-107°-E	A ₂		有	?	溝状		46号-住より新
47号住	長方形	2.9×2.8	6.75	有	東野南端	N-109°-E	A ₂ -a		有	壁外崩り出し	溝状	有	埋込跡か?
48号住	正方形	3.1×3.4	9.28	有	東野中央	N-107°-E	A ₂	有(石)	有	黒色土、シルト	溝状	有	5 10号溝に切り取る
49号住	長方形	2.8×3.6	8.50	一部有	東野中央	N-19°-E	A ₂		有	黒色土、シルト、石	溝状	有	2 10号溝に切り取る
50号住	正方形	2.7×2.7	6.25	有	東野中央	N-115°30'-E	B ₂		有	黒色土、シルト	溝状	有	2
51号住	長方形	3.8×2.8	9.62	有	東野北寄り	N-94°-E	B ₂ ?		有	壁外埋込土巻付	溝状	有	1
52号住	長方形	2.3?×3.1	6.20?	2	東野中央北寄り	N-100°-E	A ₂		有	?	溝状	有	
53号住	長方形	3.7×3.5	11.54	6	東野中央	N-85°-E	A ₂		有	壁外崩り出し	溝状	有	

通称名	平面形	規模	面積(㎡)	柱	土	基	礎	方	間	カ	マ	ド	行	備
通称名	平面形	規模	面積(㎡)	柱	土	基	礎	方	間	カ	マ	ド	行	備
54号住	長方形	4.0×4.5	15.17	3.9										
55号住	正方形	3.8×4.1	11.55											
56号住	正方形	6.0×6.3	33.06	4										
57号住	正方形	5.8×5.75	28.09	3										
58号住	長方形	3.8×4.2	13.30											
59号住	正方形	3.8×3.8	11.22	2										
60号住	正方形	3.9×4.0	12.95											
61号住	長方形	3.0×2.59	7.50?											
62号住	?	?	?											
1号層次	正方形	2.4×2.2	4.50											
2号層次	長方形	4.7×3.7	15.13											
3号層次	長方形	4.2×3.4	13.53											
4号層次	長方形	1.5×2.3	2.60											
5号層次	長方形	3.8×3.0	10.16											
6号層次	長方形	6.2×4.8	25.20											
7号層次	長方形	2.6×2.1	4.56											
8号層次	?	?	?											
9号層次	正方形	3.3×3.4	9.60											
10号層次	正方形	2.4×2.65	4.94											

3 井戸

築地中軸線から北へ約65m、56号・57号住居跡から各3m南および西に位置する。堆積土の平・断面での知見から掘鉢状の掘り方をもって枠を施設したいわゆる円形井筒の井戸とみられるが、材の遺存はなく詳細は不明である。出土遺物から推定し竪穴住居跡群と同時期の遺構である。

注1 山本 博 「井戸の研究」—考古学から見た— 綜芸舎 昭和45年7月1日

4 掘立柱建物跡

1) 分布

掘立柱建物跡（以下建物）は16棟であり、全体に北端に偏在し、中央部に殆ど認められていない。

北端および北辺寄りには1～6号建物の6棟が集中し、うち4棟が重複、または近接している。末精査の2棟はこれよりやや南寄りに位置している。

中央部では北寄りに8号建物1棟があり、これより南130mに9号建物1棟がある。北端の1号建物より8号建物までのおおよそ220mであり、南辺の築地より9号建物までは250mを計る。

これより築地までの南寄りでは10号～14号建物が分散し、一部未検出の10号建物、重複する11・12号建物と15-1・15-2号建物が含まれる。15号建物は中央部の9号建物と11・12号建物のほぼ中央にあたり、その間はおおよそ80mである。もともと南に寄った13・14号建物2棟は、11・12号建物の南東にあたり、それぞれ30mをおいてほぼ直線上に並列する。14号建物より築地までは50mほどである。また、櫓の中軸線は14号建物の西、9号建物の東に求められ、線にあたる建物は認められない。

2) 建物規模（第80・81・82表）

16棟のうち、全体の明らかでない6・10号建物を除く14棟では梁行8.74m 5間、桁行13.89m 6間の2号建物が最大であり、梁行2.32m 2間、桁行2.48m 3間の1号建物が最小である。間数によっては梁行1間、桁行2間の8号建物をもっとも小規模である。

梁行・桁行方向の総長によってみると、梁行は2.32 (7.657)～8.74m (28.845尺)、桁行は2.48 (8.185)～13.89m (45.842尺)となる。梁行では3.36 (11.089)～3.77 (12.442尺)に7棟が集中する。また、桁行では建て替え建物の15-1・2号建物が共通するほか、分散して特に著しい傾向は認められない。

狭い柱間を含めた間数では梁行2間で桁行2間、または3間の小規模建物がもっとも多く7

第80表 掘立柱建物計測一覽表(1)

No.	建物名	規模	梁行	桁行	面積	棟方向	掘り方		柱位置 掘柱高	遺構	掘り方	備考
							柱深さ	柱間隔				
1	1号(AI18)	2×2期	2.33m	2.48m	5.77㎡	N 4.0°E	24~31cm	10~15cm	18cm			
2	2号(BH33)	5×6	8.74	13.88	109.16	N 7.4°E	17~45	16~39	10~21	54		
3	3号(BH21)	3×7	4.85	7.75	37.59	N 2.1°W	20~56	11~58			4号建物より詳しい	
4	4号(BH18)	4×5	5.95	9.76	58.01	N 1.2°W	30~58	20~95	14~20	57	3号建物に重なり	
5	5号(BH09)	3×5	5.78	10.72	61.96	N 2.0°W	19~52	19~70	14~18	58	遺構南端2点のみは本上層部2点 遺構西2点、南端部1点、柱根 1点	
6	6号(BH77)	2×(1.3)	3.78	16.44~	E 2.4°S	20~60	24~36	16~21	11		基本遺構	
7	7号(BH15)	2×3	5.29	6.88	36.40	E 1.4°S	25~40	15~55	51		4号建物に重なり	
8	8号(IH20)	1×2	3.49	3.57	12.46	E11.3°S	17~23	17~29	10~21	14		
9	9号(MH23)	2×3	3.59	4.41	15.83	N 1.2°W	22~56	29~63	14~16	38		
10	10号(NH33)	(2)×10	1.88~	11.48	22.73~	N11.2°E	48~91	43~90	14~21	42	遺構北→東西の一部	
11	11号(BH27)	2×5	5.16	10.12	62.34	N 4.9°E	48~77	53~62	15~19	13	北端部若干、南端部3点	
12	12号(BH30)	3×4	4.26	7.83	33.36	N 5.2°W	31~40	12~35	27		北端部若干、南端部3点	
13	13号(SH06)	2×2	3.26	5.93	19.99	N 2.4°W	23~42	14~47	15	39	北端部若干、南端部3点	
14	14号(TH02)	2×2	3.69	5.28	19.48	N 0.3°W	18~62	9~55	10~14	48	北端部1点	
15	15号(PH21)-1	2×2	3.40	3.69	12.55	N10.3°E	16~50	11~41		29	北→2号建物に重なり	
16	16号* -2	3×2	3.77	3.68	13.87	N 8.7°E					北→1号建物より詳しい	

第81表 掘立柱建物計測一覽表(2)

No.	建物名	梁行	桁行	面積	掘り方		柱間寸法		桁行柱間寸法		備考
					柱深さ	柱間隔	柱間寸法	桁行柱間寸法			
1	1号(AI18)	7.640 尺	8.185 尺	1.74 坪	3.782尺		尺	尺	尺	尺	尺
2	2号(BH33)	28.845	45.825	33.08	3.913			6.568		尺	尺
3	3号(BH21)	16.018	25.578	11.39		4.620		3.837		尺	尺
4	4号(BH18)	19.624	32.211	17.58	2.766			3.199		尺	尺
5	5号(BH09)	19.087	35.853	18.78			5.545	6.205		尺	尺
6	6号(BH77)	12.459	14.556~	4.98~				6.316		尺	尺
7	7号(BH15)	17.450	22.706	11.03				6.040		尺	尺
8	8号(IH20)	11.502	11.782	3.78				8.185	9.224	尺	尺
9	9号(MH23)	11.832	14.554	4.80				11.782		尺	尺
10	10号(NH33)	6.535~	37.888	6.89~	3.284			5.743		尺	尺
11	11号(BH27)	17.041	30.399	18.89				8.523		尺	尺
12	12号(RI30)	14.096	25.825	10.11				8.523		尺	尺
13	13号(SH06)	11.089	19.624	6.06	4.730?			6.898		尺	尺
14	14号(TH02)	12.167	17.609	5.90				5.533		尺	尺
15	15号(PH21)-1	11.232	12.189	3.80				6.221		尺	尺
16	16号* -2	12.431	12.137	4.20	1.964			5.761		尺	尺

柱間寸法は曲尺による平均値

棟を占め、これより小さい梁行1間の建物は1棟である。梁行3間の建物には桁行4間、または5間と7間があり合せて3棟、梁行4間と5間の建物が各1棟である。全体に間数と梁行、または梁行の総長に対応する関係と把えられるが、梁行2間、桁行5間の11号建物では梁行3間の3・5号建物に比して大きく、桁行7間の3号建物のそれより著しく大きい建物が含まれる。また、梁行1間、桁行2間の8号建物では、両方向とも1号建物に比して長い。

建物面積は5.75～121.40㎡となり、1.74～36.79坪に換算される。19.99㎡(6.0坪)以下が7棟、33.36(10.11)～37.59㎡(11.39坪)まで3棟、58.01(17.58)～62.34㎡(18.89坪)が3棟、これより大きい1棟である。従って大略①6坪以下、②10坪、③18坪、④36坪前後に分けられる。

建物規模による分布は、北辺寄りの2～5・7号建物と南寄りに重複する11・12号建物が10坪以上となり、他はいずれも小規模建物が分散しているといえる。

第82表 建物面積別一覧表

No.	面積	棟数	建物名
1	5.75㎡(1.74坪)	1	(1)
2	12.46～13.87 (3.78～4.20)	3	(8) (15-1) (15-2)
3	15.83～16.44 (4.80～4.98)	1	(9)
4	19.48～19.99 (5.90～6.06)	2	(13) (14)
5	33.36～37.59 (10.11～11.39)	3	(3) (7) (12)
6	58.01～62.34 (17.58～18.89)	3	(4) (5) (11)
7	121.40 (36.788)	1	(2)

6・10号建物を除く

3) 掘り方と柱痕

建物柱穴の掘り方は同一建物においても画一的な規模や形状を呈するものが少なく、特に重複する場合は明瞭でない点もあるが、全体的な傾向として平面形が方形をなすものと円形を呈するものに分けられる。断面形はいずれも円筒状となるものである。

方形をなす掘り方は、8・11・12号建物、14号建物の隅柱、13号建物の北・東面の一部にあり、重複する15号建物にもそれと近似する形状が認められる。掘り方の規模は、径0.31～0.77m、深さ0.12～0.95mである。同一建物柱穴の底面における比高は0.13～0.48mである。このうちもっとも比高が小さい11号建物柱穴では、径0.48～0.77m、深さ0.53～0.62mで殆ど一定している。柱穴の埋土は11号建物の場合、水平、または外壁より中央部にかけて斜方向に堆積し、堅固な版築状を呈する。これに類似する埋土は、14号建物の隅柱穴に認められ、櫓柱穴における埋土に共通するものと解され、他の建物柱穴のそれと明らかに異なるものといえる。また、14号建物では隅柱間を2分する小柱穴が円形の浅い打ち込み状をなし、機能を異にすることが推定される。

円形、または円形状の掘り方は、径0.16～0.91m、深さ0.15～0.90mである。検出面の相違や削平の状況等によって一様に比較することはできないが、ほぼ径0.30～0.60m、深さ0.40～0.60mに集中している。全体に小規模建物の柱穴は小さく浅い傾向にあり、規模の大きい建物では間柱が小さく、側柱列の掘り方に比して入側柱列は大きく深い。共に上部構造との関連から荷重の大小によって相違するものと扱えられる。また、底面における柱穴間の比高は同一建物において0.18～0.58mであり、規模の大きい建物ほど大きい傾向がある。

柱痕は13棟の柱穴に認められる。すべて円形とみられ、検出面における大きさは径0.10～0.21mを計り、3.3～7.0寸の円柱と推定される。比較的掘り方の大きい建物では、柱痕径が大きく、側柱に比して入側柱穴が大きい。しかし、同一建物においても不定であり、隅柱や間仕切り柱に大きい傾向は数棟を除いて明確でない。底面における柱痕は、検出面におけるそれに一致するものが少なく、やや斜方向に認められ、中央部よりいずれかの外壁に寄って位置している。また、掘り方底部より更に深いものが大部分の建物に共通して認められるが、掘り方が浅いため、または荷重によるもの、あるいは調査に起因するものか確認し得ない。

4) 建物方向 (第83表)

掘立柱建物16棟を推定される棟方向によってみると、南北棟13棟、東西棟3棟であり、南北棟が大部分を占める。

南北棟の13棟は大きく相違するものではないが、次表によって1～5群に細分される。1～2群はN-5.2°～0.3°-Wの7棟、3～5群はN-4.0°～11.2°-Wの6棟となる。もっとも集中する2群には6棟があり、北辺寄りの比較的規模の大きい3～5号建物と中央部以南の小規模な9・13・14号建物が含まれる。

東西棟は6群とするE-1.4°～2.4°-Sの2棟と7群とするE-11.3°-Sの1棟である。前者は2群とする南北棟の6棟に直交する棟方向であり、北辺に認められる建物に限られている。同様に後者は5群とする南北棟の2・5号建物にほぼ直交する建物である。

第83表 棟方向別建物一覧表

No.	棟 方 向	棟 数	建 物 名
1	N 5.2° W	1	(12) 号
2	N 2.4° ~ 0.3° W	6	(3), (4), (5), (9), (13), (14)
3	N 4.0° ~ 4.9° E	2	(1), (11)
4	N 7.4° ~ 8.7° E	2	(2), (15-2)
5	N 10.3° ~ 11.2° E	2	(10), (15-1)
6	E 1.4° ~ 2.4° S	2	(6), (7)
7	E 11.3° S	1	(8)

従って相互に直交する関係にある建物を含めては、①1群の1棟、②2・6群の8棟、③3群2棟、④4群2棟、⑤5・7群の3棟にまとめられる。

棟方向と建物規模との関係では、比較的規模の大きい建物が集中する北辺寄りの6棟のうち、最大規模の2号建物が東に偏するほか、すべてN-2.1~1.2'-W、またはこれに直交する関係にあり、ほぼ共通するものと扱えられる。また、北・東面の一部が確認される10号建物は、2号建物に近い棟方向を示す。そのほか、重複する11・12号建物は、1・3群にあって北辺寄りの建物とは最大10.1'の相違があり、様相を異にする建物と推定される。

これより小規模な建物においては、中央部以南の9・13・14号建物が3群で共通している。この間に位置して重複する15号建物は若干不安定であるが、これより10'ほど東へ偏っており、中央部北寄りの8号建物がほぼこれに直交する。このほか、北端の1号建物は、11号建物に近接する棟方向である。

他遺構のうち、築地及び櫓方向のE-5.3~7.3'-Sに平行、または直交する棟方向の建物は1棟も認められず、近接する建物を求めるならば、1・11・15号建物等があげられる。また、内城における建物は、南北棟8棟がN-5.00~8.55'-E、東西棟4棟がE-6.3~6.5'-S⁽¹⁾であり、これに平行する建物も同様に認められず、前述の数棟が近似するのみである。

5) 柱間寸法 (第120・121図 第84・85・86表)

各建物の柱穴配置によって求められる柱間寸法は、それぞれ同一方向の実測値平均によって次表の通りとなる。柱穴は必ずしも画一的な配置を示さないため、多少の誤差が見込まれるが曲尺換算によって1.963~11.782尺となる。10尺以上の柱間については、8号建物を除いてこれより狭い柱間寸法の組合せであり、主として10尺未満の柱間についてみることにする。

梁行方向では同一建物に寸法の異なる柱間が含まれ、複数の組合せとなる建物を含めて9群である。最小は1.964尺の15-2号建物であり、次いで2.766~2.838尺の3・4号建物がある。

第84表 柱間寸法一覧表

No.	梁行柱間寸法	建 物 名	桁行柱間寸法	建 物 名	計
1	1.964 尺	(15-2)	1.963	(9)	2
2	2.766~2.838	(3) (4)	2.111	(1)	3
3	3.284~3.913	(1) (2) (10)	3.199~3.886	(1) (2) (3) (5) (10)	5
4	4.620~4.730	(3) (12)	4.824	(6)	3
5	5.289~5.743	(4) (9) (13) (15-1) (15-2)	5.429~5.842	(8) (9) (12) (15-1) (15-2)	6
6	6.040~6.958	(2) (3) (4) (5) (6) (12) (14)	6.386~6.997	(3) (5) (10) (11) (12) (15-1) (15-2)	11
7			7.046~7.563	(7) (9)	2
8	8.185~8.523	(7) (11)	8.053~8.696	(2) (4) (14)	5
9	9.224	(7)	9.769	(13)	2
10	11.782	(8)			1

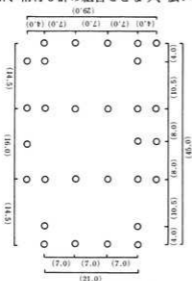
最大は間柱の認められない11.782尺の8号建物である。単一の柱間寸法による建物は、3.762～11.782尺の9棟があり、特に広狭の共通性は認められない。また、2群以上の組合せとなる建物では、1.964～9.224尺に7棟が含まれる。いずれも広い柱間の整数倍となる関係は求め得ない。

桁行方向においては1.963～9.769尺まで9群となる。単一の柱間寸法による建物6棟では4.824～9.769尺であり、複数の組合せとなる10棟では、1.963～8.284尺で4尺未満の柱間が含まれる。このうち、3・10号建物の広い柱間は狭い柱間の2倍に相当する間尺である。また、梁行方向の柱間と共通する柱間には1・2・3・5・9・12号建物の6棟にあり、1・5・6・11号建物の4棟を除いて桁行方向の柱間が梁行方向のそれより長く、または共通している。異なった建物間では狭い柱間の1群で15-2号と9号建物が共通するほか、3群で1・3・10号建物、5群で4・8・9・15-1号建物が近似する。更に3・10号建物では、これより広い6群においても同様の柱間であり、殆ど共通する建物とみなされる。全体に4尺未満の柱間は、側柱と入側柱列間にあり、庇とみられる部分である。

各柱間の実測値平均と梁行・桁行方向の総長によって求められる造営柱間寸法は、規則的な配置の認められない建物が含まれ、必ずしも明確ではない。柱配置に特徴のある3例によってみると以下のように推定される。

2号建物 (第120図 第85表)

もっとも規模の大きい2号建物は、複数の柱間寸法によって構成される。次表によって梁行4群、桁行5群の組合せとなり、広い柱間はそれぞれ①～③群の組合せによるものである。共通する柱間はもっとも狭い①群であり、桁行方向②群



第120図 2号建物模式図

の2分の1に相当するものとみなされる。

これによって梁行方向の柱間は4.0+7.0+7.0+7.0+4.0尺5間、総長29.0尺であり、桁行方向では4.0+10.5+8.0+8.0+10.5+4尺6間、総長45.0尺となる。共に中央に広く、四面に狭まる。桁行方向では中央部より対称的な構成である。狭い柱間を庇とするならば、身舎は梁行21.0尺3間、桁行37.0尺である。両方向に共通する基準寸法を仮定するならば、6.4尺に求められ、これを1間とみると梁行4.5間、桁行7.0間となる。総長に対する誤差は0.045～0.825尺であり、桁行方向に不揃いがあるやゝ大きい。

梁行方向

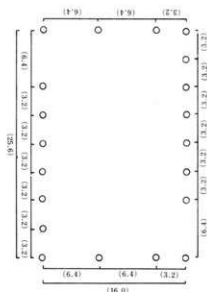
第85表 2号建物柱間寸法表

No.	実測値	間数	平均	造営寸法	実測値-造営寸法
1	1.06~1.26m	7	1.19m (3,913)尺	1.21m (4,00)尺	0.05~0.15m (0,165~0,496)尺
2	2.06~2.16	12	2.11 (6,958)	2.12 (7,00)	0.04~0.06 (0,132~0,198)
3	6.20~6.30	2	6.25 (20,627)	2.12×3 (21,00)	0.05 (0,165)
4	7.56	1	7.56 (24,950)	1.21+2.12×3 (25,00)	0.02 (0,050)

桁行方向

No.	実測値	間数	平均	造営寸法	実測値-造営寸法
1	0.96~1.32 m	4	1.16 m (3,837)尺	1.21 m (4,00)尺	0.11~0.25 m (0,363~0,825)尺
2	2.35~2.71	6	2.51 (8,284)	2.42 (8,00)	0.07~0.29 (0,231~0,957)
3	3.20~3.31	5	3.24 (10,680)	3.18 (10,50)	0.02~0.13 (0,066~0,429)
4	4.37~4.58	5	4.46 (14,719)	1.21+3.18(14,50)	0.02~0.19 (0,066~0,627)
5	4.94~5.12	3	5.01 (16,546)	2.42×2 (16,00)	0.09~0.27 (0,304~0,898)

3号建物 (第121図 第86表)



第121図 3号建物模式図

柱間寸法の著しく狭い建物である。内部柱穴が不明であり、側柱配置によって間尺を求めると梁行・桁行方向共次表の2群となる。梁行方向は不揃いがある、更に寸法の異なる柱間も考えられるが、総長を加えて両方向に共通する柱間寸法をもつものと推定される。①群は合せて14間となり、実測値平均は3.241尺である。②群は同様に6間の平均が1.913尺となり、①群の2倍に相当する。いずれも6.4尺を基本とする寸法と扱えられる。これによって梁行は西より6.4+6.4+3.2尺3間、総長16.0尺となり、桁行は6.4+(3.2×6)尺7間、総長25.6尺の造営とみられる。各総長に対する誤差は梁行で0.018尺、桁行で0.022尺であり、各柱間のそれに比し

第86表 3号建物柱間寸法表

No.	実測値	間数	平均	造営寸法	実測値-造営寸法
1	0.86~1.25m	2	1.05m (3,482)尺	1.94÷2 m (3,20)尺	0.11~0.28m (0,363~0,924)尺
2	1.55~2.10	4	1.90 (6,262)	1.94 (6,40)	0.11~0.39 (0,363~1,287)

桁行方向

No.	実測値	間数	平均	造営寸法	実測値-造営寸法
1	0.78~1.18 m	12	0.97 m (3,199) 尺	1.94÷2 m (3,20) 尺	0.19~0.21 m (0,627~0,693) 尺
2	1.84~2.04	2	1.94 (6,403)	1.94 (6,40)	0.10~0.19 (0,330~0,627)

て著しく低い。6.4尺を1間とするならば、梁行2.5間、桁行4間となり、桁行方向は北、または南3間に半間柱を加えた建物といえる。

これと同様の配置とみられる10号建物では、建物規模に相違があるが、明らかに同一の柱間寸法を有する建物である。

11号建物

梁行・桁行方向とも単一の柱間寸法によって構成される建物であり、柱間は8号建物について広く、方形の掘り方をもつ建物中ではもっとも規模が大きい。南・北面にやゝ不揃いであるほかはそれぞれ対応する配置であり、梁行4間の平均は8.523尺、桁行10間の平均は6.683尺である。総長を加えて造営寸法を推定するならば、梁行8.5尺等間、または9.0+8.0尺2間、総長17.0尺、桁行6.6尺等間5間、総長33尺となる。両方向に共通する基準寸法は完数尺以外容易に求め得ず、桁行方向の6.6尺を1間とすると梁行は2.57間となる。

これに共通する12号建物では桁行方向北3間の平均が6.6尺であり、14号建物の梁行方向や15-1、15-2号建物の桁行方向に近似する間尺が認められる。この点では6.6尺を造営寸法とみることもできる。また、内城地区のSB533建物においても6.6尺の間尺が⁸⁾判明している。更に両方向の総長は完数尺による建物が多いものの、各柱間寸法は特に小規模な建物においてばらつき⁹⁾の大きい傾向が認められる。

以上3例を中心に造営寸法を推定するものであるが、2～5号建物と10号建物では、ほゞ6.4尺を基本とするものとみられる。また、小規模の1号建物はこれらと共通する2・3群の柱間によって構成される点で、これに含まれることが想定される。10号建物を除いていざれも北辺に位置する建物である。後者では5～10群の柱間によって構成される建物である。中でも小規模建物では5・6群がなく、全体に画一性の低い傾向にある。ほゞ共通する柱間によっては7・8・11～15-2号建物があげられる。最小柱間となる1群の認められる9・15-2号建物についても、他の近似する柱間に共通する点で併用される柱間寸法と解される。しかし、基本尺は曲尺に相異なる可能性があり、特に後者の建物群では更に類例をまわって検討される課題である。

6) 柱配置と構造 (第87表)

平面形によって推定される建物は、全体に矩形をなす建物と方形に近い建物に分けられる。梁行・桁行方向の各総長によって求められる比率は、6・10号建物を除いておよそ4群となる。

梁行方向に対して桁行方向が1.23以上となる矩形の建物は2～4群であり、1群は方形に近い建物である。前者には規模の大きい建物がすべて含まれ、後者は最小規模の4棟である。しかし、2～4群のうち最大規模の2号建物は3群に、小規模な12・13号建物が4群となるなど

必ずしも規模に対応する比率は求め得ない。

他建物との比較では14号建物が檜と殆ど同一比率を示す。また、12号建物は内城北東部の^{Ⅷ(11)}SB531建物や内城南門における比率1.84に一致する建物である。しかし、その比率が大部分2.0以上となる内城の建物や外郭南門に^{Ⅷ(13)}準ずる建物は認められない。

柱配置は内部柱穴の不明な建物も含まれるが、梁行・桁行方向の側柱によって構成される建物と更に内側柱をもつ建物である。後者は桁行方向を3分する形で間仕切り柱が配される2号建物のほか、側柱に平行して入側柱列が梁行、または桁行方向に配置される4・5・9・15—2号建物の4棟がある。いずれも狭小な柱間を有し、2号建物は東西2面に、他はいずれか1面の全長に及んでいる。この2〜4尺間を庇とみるならば、身舎の梁行は2間、または3間となり、最大14.0尺である。また、庇の取り付かない建物における梁行は8号建物を除いて2間で共通し、最大は7号建物の17.0尺である。

柱数は、2号建物で29、または31本でもっとも多く、坪当たり0.79〜0.84本となる。梁行・桁行方向の尺当り柱数はそれぞれ0.16、0.21本である。内部柱の認められない建物では多柱となる1・3・10号建物とこれより少数の建物に分けられる。坪当りでは1号建物が4.60本で著しく多く、全体に小規模建物に高い比率を示す。また、尺当り柱数は前者が桁行方向で0.29〜0.39本、後者は梁行0.16〜0.27本、桁行0.18〜0.25本である。共に梁行方向に高いが、14号建物は両方向とも0.18の同一比率で特異な建物といえる。

間取りや構造については、小規模な建物においては切妻の建物とみなされるが、細部の不明な点が多い。規模の大きい建物のうち2号建物は平入り型式の直ぐ家とみられ、内部は大きく3分される。南を上手とするならば順に座敷、常居、土間庭となり、広間型の間取りが推定される。また、10号建物では半間柱を取り込み、つなぎⅢ遺跡や下猿田Ⅲ遺跡等にみられる建物と同様の構造が推定される。

第87表 梁行・桁行比率表

No.	桁比率	棟数	建物名
1	0.97~1.09	4	(1) (8) (15-1) (15-2)
2	1.23~1.43	3	(7) (9) (14)
3	1.59~1.64	3	(2) (3) (4)
4	1.77~1.96	4	(5) (11) (12) (13)

7) 時期

建物の構築時期を掘り方内に出土する遺物に求めるならば、5・11・13号建物の3棟である。このうち、5号建物では出土状況より地鎮用に埋納された遺物と解され、寛永通寶(1708年鑄造)^{Ⅷ(4)}の使用時期の建物とみなされる。他は11号建物に土師器と須恵器の破片が混入し、13号建

物に鉄釘1点があるが、共に埋土中に認められる遺物で構築時期の上限は求められない。また、柱穴検出段階における建物敷地内の遺物は、5・8号建物2棟にあり、5号建物内では寛永通寶とほぼ同一時期とみられる陶磁器片である。しかし、8号建物内出土の土師器、須恵器については、竪穴住居跡が比較的近い位置にあっていずれに共存する遺物が明確でない。

柱間寸法や柱配置によっては、寛永通寶の出土する5号建物と共通する柱間寸法をとる4棟の建物があげられる。2～4号建物と10号建物であり、1号建物についてもこれに含まれる可能性が考えられる。前者は最大規模の2号建物と半間柱を伴う3・10号建物に分けられ、北辺の建物群における重複関係より、少なくとも2時期の建物と扱えられる。半間柱を取り込む構造は近世に位置付けられ、6.4尺以上の柱間寸法は18世紀中期以前の建物とみられるものである。また、これより更に広い柱間寸法によって構成される建物では、小規模な建物が多く明確でないが、既述の建物群に共通性が認められない点で時期を異にすることが想定される。

掘り方の形状や埋土の状況による相違は、主として北辺の建物群と南辺よりの11・12号建物や14号建物に求められる。前者が円形を呈するのに対し、後者は方形をなし、特に11・14号建物は櫓柱穴のそれに酷似するものである。この点では同一時期、または近接する段階の建物と扱えられ、北辺の建物群以前の構築が推定される。また、重複関係によって建て替えられている可能性が強く、一定期間の存続が考えられる。更に11・12号建物と15-1・15-2号建物、9号建物はその位置によって一定の計画に基づいて併設されていることも想定できるが、明確な根拠は求め得ない。

以上によって北辺の建物には18世紀を上限とする近世後半の民家とみられる建物が含まれ、中央部より南辺にかかる建物には櫓と同時期、または近接する時期の構築が推定される。後者には内城の建物に準ずる柱配置をもつ小規模な建物とこれより更に小さい性格の異なる建物が考えられる。

注1 「志波城跡」I 盛岡市教育委員会 1981

注2 「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県埋蔵文化財センター 1980

注3 「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県埋蔵文化財センター 1981

高橋與右衛門「岩手県に於ける中・近世の掘立柱建物跡」『紀要』I (財)岩手県埋蔵文化財センター 1981

注4 遺物の項参照

注5 「岩手県の古民家」岩手県教育委員会 1978

佐藤巧氏(東北大学教授)の教示による 1980

5 土壌 (第88表)

土壌は平面形によって、円または楕円形を円形土壌、方形の中で、ほぼ同類とみられ長方形を呈するものを長方形土壌、前者と異なる類のものを方形土壌とした。

(1) 円形土壌

総数21基、分布はBブロック西半、O・Pブロック西半に多い。

Bブロック西半、すなわち北段丘崖近くに分布するのは1号～6号土壌で、開墾部は78cm～225cm、深さは6号土壌の55cmを除き10cm～30cm前後、断面は3号土壌の二段壺状を除き、皿状またはボール状を呈する。堆積土は6号土壌で人為的可能性があるが、他は自然の様相である。

掘立柱建物跡と重複または近接するものが多い。しかし、先後関係の明瞭なのは6号土壌で5号掘立柱より古く下限を近世に推定できる。他は時代特定の資料がない。性格はいずれも不明である。

なお、この地域は最近まで宅地と果樹園であったため、覆乱穴が非常に多い。

NブロックからO・Pブロックの西半に近接して分布する10号～12号土壌・13～20号土壌は、開口部60cm～115cm、深さ4cm～14cmの浅い皿状で、規模、形態とも類する。

堆積土は黒褐色土と黄褐色土が混在する人為的様相を呈することで共通する。出土遺物は14号土壌上面から釘1本の出土で、他にはない。

11号土壌は10号掘立柱建物、17号・19号土壌は15号掘立柱建物と重複するが先後関係は不明であり、時期は不明であるが堆積土の様相は比較的新しいと推定され、規模、形態、堆積土のあり方、分布の状況から、同類とみられるが性格は特定できない。

L・Mブロック東半で検出された7～9号土壌は、7号・8号で開口部56cm～70cm、深さ12cm・20cm規模の皿状を呈し、両者は3mの距離で南北方向に並び、土師器、須恵器を共伴する24号・25号焼土遺構9m間の間で、これらと直線上に乗る。7号土壌は堆積土中に焼土をもつ。9号土壌は7号・8号土壌よりやや規模は大きく中段をもつ、堆積土に焼土をもち鉄製品や土師器壺を共伴する。以上、7号・8号土壌は24号・25号焼土遺構との位置関係から、9号土壌は共伴遺物から竪穴住居跡と同時期と推定する。

Sブロックの21号土壌は、9号溝と同時期で、9号溝が57号住居跡より古い可能性があることとの関連から平安時代前半に比定できる。

(2) 長方形土壌

10基の検出である。1号・10号土壌を除く2号～9号土壌はEブロック東半を中心に集中し

第88表 土 墳 一 覧 表

土 墳 名	開 口 部 (cm)	墳 底 部 (cm)	検出面からの 深さ (cm)	形 態		重 複	長軸方向	遺 物	時 期
				平 面	断 面				
1号(B412) 円形	155×160	130×130	19	ほぼ円形	皿状				不 明
2号(Bg3) 円形	78×83	39×42	31	円形	ボ-6状	5号堀立柱建物 新旧不明			*
3号(BB09) 円形	138×145 (60×70)	128×130 (45×58)	24 (10)	円形	窪凸状	*			*
4号(Bk21) 円形	130×175	122×168	11	楕円形	皿状				*
5号(Bj03) 円形	190×235	175×225	10-20	楕円形	皿状	5号堀立柱建物 新旧不明			*
6号(Bj06) 円形	150×177	85×92	55	楕円形	ボ-6状	5号堀立柱建物 より旧	土師器小破片	近世又は以前	
7号(La65) 円形	60×65	43×45	12	円形	皿状				平 安 ？
8号(Lb65) 円形	56×70	30×35	20	楕円形	皿状				*
9号(M68) 円形	130×140 (55×65)	35×40	50 (16)	ほぼ円形	窪凸状		鉄製品、鏝	平 安	安
10号(Ng37) 円形	80×80	63×65	20	円形	洗面器状				比較的新しい？
11号(Ni37) 円形	70×70	50×55	20	円形	洗面器状	10号堀立柱建物 新旧不明			*
12号(Oa33) 円形	85×100	70×82	8	不整形円形	皿状				*
13号(Oj18) 円形	105×115	100×112	10	楕円形	皿状				*
14号(Pa12) 円形	100×112	93×105	9	ほぼ円形	皿状		新		*
15号(Pb15-1) 円形	90×100	75×85	8	ほぼ円形	皿状				*
16号(Pb15-2) 円形	100×105	83×88	13	ほぼ円形	皿状				*
17号(Pb21) 円形	95×115	72×83	14	楕円形	皿状	15号堀立柱建物 新旧不明			*
18号(Pb42) 円形	60×77	56×65	4	楕円形	皿状				*
19号(Pe18) 円形	90×110	73×100	8	楕円形	皿状	15号堀立柱建物 新旧不明			*
20号(Pb15) 円形	90×105	80×95	7	楕円形	皿状				*
21号(S80) 円形	150×150	130×140 (45×65)	95	ほぼ円形		9号溝新旧不明			平 安 ？
1号(Bk15) 長方形	100×197	95×185	17	長方形		4号堀立柱建物 より新	ほぼ真北		不 明
2号(Ea68-1)長方形	125×?	115×?	25	長方形?		3号より旧	3号と同方向?		*
3号(Ea68-2)長方形	140×190	125×175	25	長方形		2号より新	N-96°-E		*
4号(Ea68-1)長方形	?×167	?×153	16	長方形?		5号より旧	5号と同方向?		*
5号(Ea68-2)長方形	105×180	100×168	17	長方形		4号より新	N-93°-E		*
6号(Ej68) 長方形	147×207	141×200	15	長方形			N-92°-E		*
7号(Ej62) 長方形	100×195	90×185	17	長方形			N-96°-E		*
8号(Fa68) 長方形	132×224	124×207	16	長方形			N-92°-E		*
9号(Fb62) 長方形	?×200	?×182	40	長方形?			N-94°-E		*
10号(Fb63) 長方形	127×203	92×163	48	長方形			N-6°-E		*
1号(Ea65) 方形	内 190×190	185×185	15	正方形	—	12号住より新	S-N N-5°-E	—	比較的新しい？
	外 240×240	225×230							
2号(Ee65) 方形	内 185×210	175×200	20	長方形 正方形	—	12号住より新	S-N N-5°-E	陶器片、土師 器片	*
	外 233×235	220×222							
3号(Ea33) 方形	170×210	150×190	12	長方形			N-90°E	土師、須恵土 破片	平 安 ？

た分布を示し、北に近接し1号・2号方形土塊、3号方形竪穴がある。

平均規模は短軸122cm、長軸196cm、深さ23.6cmで、壁のたちは直に近い、したがって、矩形に近い断面を呈する。長軸方向は1号・10号土塊が真北に近い方向を指すが、密集する他の土塊は東西方向を指し、N-92°-E~N-96°-Eの幅に入る。

堆積土は、黒色土とシルトの混在土が主体で、各土塊に共通する。重複する土塊の4例においても、相互の堆積土に大差はない。

出土遺物は全くなく、時期と性格を特定し得ないが、集中の様相と、規模、形態から同性格の土塊であることが推定できる。

(3) 方形土塊

3基の検出で、いずれもEブロックに分布し、1号・2号土塊は東半・3号土塊は東半にある。

1号・2号土塊は隣接して位置し、近接して3号方形竪穴、長方形土塊群がある。両者とも12号竪穴住居跡を切る。規模、形態、構築状況、堆積土等が近似する。出土遺物は2号土塊堆積土中から陶磁器片と土師器片が出土した。

性格は両者同じとみられるが用途は明らかでない。2号土塊堆積土中からの陶磁器片出土と遺構記述の項で既述した堆積土の様相から近世以降の新しい時期が想定され、出土遺物から3号方形竪穴との関連も考えられる。

3号土塊は、すべて前二者とは様相を異にし、堆積土と底面に土師器、須恵器片を含み、竪穴住居跡と同時期の可能性がある。

6 方形竪穴状遺構

1号~3号を一括して同じ呼称を用いたが、それぞれ様相が異なる。

1号・2号はBブロック西半に、3号はEブロック東半にあり、前者は3~5号・7号掘立柱に近接し、後者は1号・2号方形土塊と長方形土塊群に近接している。

1号は2m×3m規模、2号は3.45m×3.85m、3号が4m×4mで、規模、形状で2号、3号は類似する。現状での1号は、2号・3号に比べ非常に浅くわずかに落ち込んでいる程度である。

堆積土も三者三様で、1号・2号はほぼ単層、3号では人為堆積がある。1号での出土遺物はなく、2号で釘と砥石、3号では環状鉄製品、寛永通宝、近世陶器、多量の桃の種子が出土した。また、1号は3号掘立柱建物より新しい。

以上から、これらの遺構の性格は確定できないが、時期は、1号・3号の状況からみて上層

近世を上るものではない。

7 焼土遺構 (第89表)

焼土遺構としたものは火気使用に関連するもので32基ある。形態や構築方法で分けると大概次のようになる。

A類 平面が円形もしくは楕円状(隅丸方形状も含む)を呈し、断面は皿状(他も含む)を基本とする他類に抽出した遺構以外はこの類に含まれ大半の数になる。

B類 平面形がダルマ状、すなわち、煙出し様の小突起をもつもの 4号・8号・17号

C類 短軸に対し長軸比が大きく、竈様の構築が推定されるもの 18号～21号

D類 竅穴状で方形プランを推定されているもの 22号

E類 長楕円状で壘を施設するもの 23号

F類 浅いくぼみおよび堆積のみもの 29号・30号・31号

大雑把に以上のようなものに分けられる。

A類の中で、北段丘崖近くのA・Bブロックの西半に集中する遺構で1号・3号・5号～7号・9号はB類の4号・8号を含め一定の範囲に集中し、北東から南西方向に並ぶ、A・B類が共存するが、小突起の有無を除けば規模的にも類似する。また10号～14号・16号も前者と同様の様相をもつし、形態的に15号・16号も同類の可能性はある。

堆積土に炭を多量に持つのが大半で、底面が固く焼けて強い火力を受けたと推定されるものもあり、B類の4号・8号と共伴しており火気使用の意図的施設で、ほぼ同時期とみられる。

出土遺物は14号に鉄製品がある。16号が近世と推定される3号掘立柱建物より新しい例はあるが、全体的な時期特定には資料に不足する。

A類の中でも、24号～28号は土師器、須恵器等を共伴し、竅穴住居跡と同時期と推定され、調査区中半以南に分布する。したがって厳密には既述のA類とは異にするべきものである。

C類はBブロック東半に集中する。削平が相当およんでいるものもあるが、燃焼部、煙道、煙出しと灰原を明瞭に認める20号に代表されるように、竈と想定される遺構群である。長軸方向は一定しないが、焚口位置が西とみられるものはない。

遺物の出土は全くなく時期特定はできない。ただし、類似の遺構が柳田館遺跡⁸¹、北館遺跡⁸²等にみられる。

E類の23号は2号・61号住に近く、明らかに壘を施設し火気を使用したもので、今次調査では他に例をみない。

D・F類については事実の記述の項での説明をもって替え本項では省く。

総体的にみて、調査区北側のA・Bブロックに多数分布し、これらは時期を特定できないも

第89表 焼土遺構一覧表

遺 構 名	写輪径×長輪径 (cm)	検出面からの深さ (cm)	形 態			現地 土質	重 複	検出し方向	遺 物	時 期
			構 造	平 面 形	断 面 形					
1号(Aj18-1)	70×85	6	土 壁	楕 円 形	皿 状	？	2号より新 下に柱穴状ピット		不 明	
2号(Aj18-2)	70×80	45	土 壁	楕 円 形	箱 状	？	1号より旧、柱穴 状ピットより旧		不 明	
3号(Aj18-3)	40×85	15	土 壁	不 整 形	皿 状	有			不 明	
4号(Aj21-1)	80×85 (30×35)	18 (15)	土 壁	デ ル マ 状	東西パイプ状	有			不 明	
5号(Aj21-2)	70×80	15	土 壁	楕 円 形	洗面器状	有	6号より旧		不 明	
6号(Aj21-3)	65×75	17	土 壁	楕 円 形	皿 状	有	5号より新		不 明	
7号(Ba21-1)	75×85	9	土 壁	楕 円 形	皿 状	有	8号より新		不 明	
8号(Ba21-2)	？×85 (35×40)	20 (16)	土 壁	デ ル マ 状	南北パイプ状	有	7号より旧		不 明	
9号(Ba24)	70×100	17	土 壁	隅 丸 方 形	皿 状	有	？		不 明	
10号(Be18)	80×130	20	土 壁	楕 円 形	洗面器状	有			不 明	
11号(Be15-1)	東西90	18	土 壁	不 整 楕 円 ？	洗面器状	？	12号より旧		不 明	
12号(Be15-2)	東西90	15	土 壁	楕 円 形 ？	洗面器状	？	11号・柱穴状ピットより新		不 明	
13号(Bd18-1)	？×100	9	土 壁	楕 円 形	皿 状	有	柱穴状ピットより旧		不 明	
14号(Bd18-2)	90×110	27	土 壁	楕 円 形	ボ ー ル 状 ？	？		鉄製品	不 明	
15号(Bf15)	65×80	8	土 壁	楕 円 形	皿 状	？			不 明	
16号(Be21)	60×100	10	土 壁	楕 円 形	皿 状	有	3号建物より新		近世以降	
17号(Be68)	50×70 (方型24×24)	10 (5)	遺 状 ？	デ ル マ 状	ボ ー ル 状	有	ほぼ真北	鉄製品 土師、須恵器片	不 明	
18号(Ba68-1)	20～50×98	4	土壁又は礎状？	ひょうたん状	皿 状	有	ほぼ真北		不 明	
19号(Ba68-2)	60×90	7	土壁又は礎状？	水ノ壺状	皿 状	有	N-180°-E		不 明	
20号(Ba68-3)	40～70×245	18～22	礎(埋道・埋出)		舟 底 状	有	N-180°-E		不 明	
21号(Be68)	50～55×135	11～17	礎	ひょうたん状	舟 底 状	有	N 90°-W		不 明	
22号(Be59)	40×40	10	土 壁	円 形	皿 状	？	2号建物・新田不 明		不 明	
23号(Bg77)	60×135	5～30	土 壁	長 楕 円 形		有		土師壺3 A B 16片	平 安	
24号(L465)	105×145	10	土 壁	楕 円 形	皿 状	有		土師 須恵の壺	平 安	
25号(L465)	120×220	15～25	土 壁	不 整 楕 円 形	逆 凹 状	有		土師 須恵の壺、A環	平 安	
26号(M65)	58×65	12	土 壁	楕 円 形	皿 状	有		土師壺、直刀	平 安	
27号(Oa27-1)	25×33 27×55	7	小ピット	楕 円 形	皿 状	有			平 安 ？	
28号(Oa27-2)	65×97	15	土 壁	不 整 楕 円 形	皿 状	有			平 安 ？	
29号(Bd15)	75×135	7	浅い落ちこみ	不 整 形	皿 状	有	1号方形礎穴状より新		近世以降	
30号(Ba69)	110×140	厚 10	堀	楕 円 形		？	7号建物より旧	土師ウメ 土師海磁器	近世又は 以降	
31号(Ba56)	60×90	厚 5	堀	楕 円 形		？		土器片	平 安 ？	
32号(Oa80)	東西 120a 南北 170	20	築 穴 状	方 形 ？		有		土師小壺	平 安	

のが多い。ただ、この地域は近世と推定される掘立柱建物が集中する点から、これらとの関連も考えられるが現時点では確認がない。

注1 「東北自動車道関係埋蔵文化財関係調査報告書」IV 岩手県教育委員会 昭和55年

注2 「東北自動車道関係埋蔵文化財関係調査報告書」V 岩手県教育委員会 昭和55年

8 溝 (第90表)

9条の検出であり、規模は上幅0.3m～1.65mとなるが、1m以下が大半である。長さは調査区外までのびるため特定できるものは少なく、6号が14m、9号が80mである。方向をみると、東南→北西が4条、東西2条、南北2条、南西→北東1条である。断面は半円もしくは鍋底状を呈するものが多く、逆台形状もみられる。堆積土は単層のものが多く、3号・4号では砂や粉状バミスを含み、3号では堆積過程の中で水流の痕跡がある。

また、その用途の中で明らかに水を流したとみれるのは3号であり、平行している4号も可能性が強く、7号も底に細砂を認める部分があり可能性がある。9号は築地内溝に直交し排水路的なものが想定される。他については確認できる資料をもたない。

重複関係で1号～5号・8号は竪穴住居跡を切り、7号は11号・12号掘立柱建物を切っており、竪穴住居跡以降の時期と推定される。9号溝は57号住居跡よりも古い可能性があり、築地内溝に対するあり方から竪穴住居跡の時期に比定できる可能性がある。また、3号・4号は堆積土中の粉状バミスの降下年代が築地外溝等のものと同じであれば、竪穴住居跡の時期を大きく下らないことも想定されるが、なお検討を要する。

第90表 溝 一 覧

遺構名	長さ (m)	幅 (m)		検出面からの 深さ (m)	断面形	方 向 向	重 複	遺 物	時期
		上幅	下幅						
1号(Cb7)溝	10以上	1.5	0.5	0.4	逆台形	N-106°-E	3号住より新		不明
2号(Hb12)溝	31以上	0.6	0.2～0.45	0.13～0.3	半円状	N-95°-E	9・10・11号住より新	須恵器、鉄製品	不明
3号(He21)溝	60以上	1.65	0.4	0.3～0.4	逆凸状	N-113°-E	112-113-121-122号 住より新	A・B類環	不明
4号(Hf24)溝	60以上	1.0	0.5	0.26～0.35	逆台形	N-113°-E	上と同じ		不明
5号(Ib12)溝	45以上	0.57	0.4	0.12	鍋底形	N-108°-E	116号住より新		不明
6号(Lf80)溝	14	0.45	0.3	0.16	*	真北・N-10°-E			不明
7号(Na80)溝	175以上	1.0	0.55	0.15	*	N-20°-E	11・12号建物より新		不明
8号(Pf33)溝	22以上	0.3	0.23	0.11	*	N-93°-E	48・49号住より新		不明
9号(Sb77)溝	80	0.7	0.5	0.09	逆台形	ほぼ真北	21号円形土壘・57号住	須恵器	平安?

ii 発見された遺物

本遺跡からは坏形土器を中心として多量の遺物が出土している。主として古代を中心とするもので、推察される城柵に関わる遺物としては平安時代初期の典型的な一例とも解される。

土器類は、土師・須恵器等で総称されるもので、坏・椀・双耳坏・コップ形土器・高台坏・蓋・甕・鉢・壺等と多様な器種がある。甕の中には赤色塗彩を施すものもあり、また、墨書を有す坏・高台坏等が9点含まれる。

鉄製品も量的に多い出土をみせる。直力・刀子・鉄鏃などから鉄斧・鎌・紡錘車・釘等まであり、他に馬具の一部もある。また、器種が確定できない破片も相当数ある。器種毎の総量は刀子・鉄鏃の類が多くなっている。本遺跡の特性が看取される一要因でもある。

石製品は、砥石で代表される。零石川上流に位置する一帯を産地としている。キメの細かい良質のものが多い。他に土錘と同じ役割を持つと推される足方様製品がある。中央部付近にくびれのある石であるが、特に加工痕が認められない。

土製品としては土錘があるが点数は少ない。また、装飾品等は発見されていない。特異なものとしては、素焼きの粘土に依る輪の羽口片が8点と製鉄に関わる還元炉等がある。何れもP・Qブロックの西側からの出土である。

他に漆紙、漆器、硯等がある。硯は何れも円面硯の破片である。

古代以降の遺物には、古銭、陶磁器等がある。古銭は宋銭と寛永通寶である。宋銭は3枚あり、大観通寶・大平通寶・紹聖元寶と判読される。寛永通寶には古寛永も含まれる。他に不明古銭が1点ある。陶磁器は破片のみの出土であり、何れも近世以降の比較的新しい時期とされる。

植物遺体としては桃の種子核が多量にあるが、何れも現代種のものである。また、製品化された木炭や固く緻密な木目を残る珪化木等もみられる。

1 分類・考察他

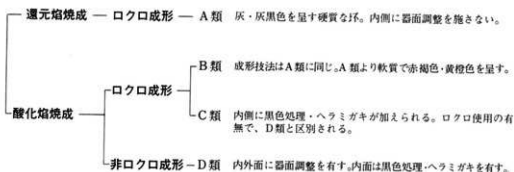
以上が本遺跡出土遺物の概要である。各々の詳細については順を追って記していくが、分類の必要なものについてはその都度細分し、結果と考察も併記することとする。その後で、古代を中心としたまとめを記す。但し、遺物量の少ない土器や鑑定を要した遺物については記述を省略する。後者の遺物については、V章の鑑定結果を参照されたい。

以下については、(1)坏形土器、(2)高台坏、(3)台付皿、(4)双耳坏、(5)蓋、(6)甕・鉢・壺形土器、(7)鉄製品、(8)製鉄関係遺物について、(9)石製品、(10)硯、(11)漆紙・他、(12)古銭、(13)陶・磁器の順に記していく。なお、墨書土器については、坏形土器の最後に付記している。

また、出土遺物に関する総まとめは、本項の末尾に述べることにする。

(1) 坏形土器

坏形土器は出土点数が最も多く360近くを数える。ここでいう坏形土器とは碗形のものや猪口乃至コップ形を呈するものをも総称していることを予め断っておく。これらの坏は焼成方法の相違やロクロ使用の有無などから次の様に大別される。即ち、還元焰焼成のロクロ成形坏・酸化焰焼成のロクロ成形坏・酸化焰焼成の非ロクロ成形坏の3種類である。このうち酸化焰焼成のロクロ成形坏は、内側の器面焼成の有無などから更に細分され、最終的にはA・B・C・Dの記号で仮称される四種類のタイプに分類している。



還元焰焼成のA類は所謂須恵器の坏である。一方の酸化焰焼成のB・C・D類は、従来から知見する土師器の範疇にも含まれようが、B類についてのみ補則を加える。ここでいうB類は製品化された時点での外見上からくる区分が主であり、発生までの経緯については特に問題としていない。結果として酸化焰焼成に依るといふ事実からA類と一線を画す坏群である。酸化焰焼成の坏内においては、器面調整の相違からC・D類とも区別されることはいうまでもない。従って、この観点では生産者の意図に関わる見解並びにその結果から派生する焼き損じの須恵器、等の解釈に固執するものではない。繰り返しになるが、本来的には須恵器生産を意図したものであったとしても、最終的にA類と区分可能な要素が看取される限りに於いて設定された一群の坏である。但し、広義には須恵器からの系譜上にあることの他に、独自の生産体制の中で発生も有り得るといふ可能性も否定していない。

以上、B類設定の基本的立場を示したが、次に各類の詳細について触れて行くこととする。

既述の如くに大別された各類の坏は、D類を除いて分離し技法・再調整の有無、形態などの様相から更に細分することが可能である。従って、まず分類記号について説明を付し、その後に一覧表を示す。各類の分類記号は一覧表に併記しており、分類判例図については各類の項毎に掲示する。

分類の細目は、一覧表の最上段に示している通りであるが、法量・比率等については記号化

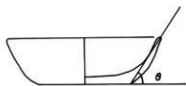
せず、実測値をそのまま記入するに留めている。これは記号の組み合わせに依る繁雑化を防ぐための配慮もあるが、分類の主眼を切離しと再調整の有無・部位等に関わる部分に置いた結果でもある。

端的に言って、分類記号は下記の項目に依る組み合わせで表示されている。

種別	切離し技法	調整の有無	調整技法	調整部位			
A 類	a. ヘラ切	1. 無調整	(1) 回転ヘラ削り	イ. 底部面			
B 類					2. 有調整 ⇒	(2) 手持ヘラ削り	ロ. 体部下端
C 類							
D 類	c. 不明	3. 不明	(3) その他	ハ. 体部下端～底面			

即ち、切離しが判明する無調整の環は、例えばA-a-1(ヘラ切無調整のA類)、C-b-1(糸切無調整のC類)等の様に表示される。また、再調整のある環については、調整の有無の記号を省略し、切離し技法の後に調整技法の記号を直接連続させている。具体的には、A-a-(1)-ロ〔ヘラ切によるA類。ロ. 体部下端に、(1)回転ヘラ削りを有す。〕、B-c-(2)-イ〔切離し不明のB類。イ. 底部面に、(2)手持ヘラ削りを有す。〕、等としている。但し、広く再調整のある環と呼称する場合は、A-a-2、B-c-2、C-b-2等と各類毎に一括している。

なお、外傾角度(θ)については第122図を参照されたい。



第122図 外傾角度模式図

因みに、各類毎の組み合わせに依る全タイプを下記に示すが、磨減・剝離等によって詳細不明のものについては除外する。

A類・A-a-1, A-b-1, A-a-2→A-a-(1)-ロ、A-a-(1)-ハ、A-a-(2)-イ、A-a-(2)-ロ、A-a-(2)-ハ、A-b-2→A-b-(1)-ハ、A-b-(2)-ロ、A-b-(2)-ハ、A-c-2→A-c-(1)-イ、A-c-(1)-ハ、A-c-(2)-イ、A-c-(2)-ハ。

B類・B-a-1, B-b-1, B-a-2→B-a-(1)-イ、B-a-(1)-ロ、B-a-(1)-ハ、B-a-(2)-イ、B-a-2-ロ、B-a-(2)-ハ、B-b-2→B-b-(2)-ハ、B-b-(1)-ハ、B-c-2→B-c-(1)-ロ、B-c-(1)-ハ、B-c-(2)-イ、B-c-(2)-ロ、B-c-(2)-ハ、B-c-(3)-イ、B-c-(1)・(2)-ハ、B-c-(1)・(3)-ハ。

C類・C-a-1, C-b-1, C-a-2→C-a-(1)-ロ、C-a-(1)-ハ、C-a-(2)-ロ、C-a-(2)-ハ、C-b-2→C-b-(1)-イ、C-b-(2)-ハ、C-b-(1)・(2)-ハ、C-c-2→C-c-(1)-ロ、C-c-(1)-ハ、C-c-(2)-イ。

以上の如き多様のタイプが存在するが、各々については次頁の一覧表中に併記している。

第91表 坏形土器総一覧表

遺 跡 名	番 号	発 見 日	発 見 地	種 別	口 縁 形 状	口 縁 径	口 縁 高	口 縁 厚	口 縁 重	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	口 縁 容	備 考								
																									高	厚	重						
																												高	厚	重			
2号(Ⅷ7)	2	1	1	A	a	1																			内面に多数のカーン状存在								
		2	2	A	a	(2)	f																										
		3	3	B	a	(2)	f																										
		4	4	-	B	e																											
3号(Ⅷ7)	6	1	4	B	e	(2)	f																										
		7	2	-	B	e																											
4号(Ⅷ7)	8	1	6	A	a	7																											
		9	2	-	A	a	1																										
5号(Ⅷ9)	10	1	9	A	a	(1)	f																										
		11	1	10	A	a	(2)	f																									
		12	2	11	A	a	(2)	f																									
		13	3	12	B	a	1																										
		14	4	13	A	a	(2)	f																									
		15	5	14	A	a	1																										
		16	6	15	B	a																											
		17	7	-	A	a	1																										
		18	8	-	A	e	(2)	f																									
		19	9	-	A	b	1																										
		20	11	-	C	a	1																										
6号(Ⅷ9)	11	12	-	B	a	(1)	f																										
		13	-	A	a																												
		14	-	C	e																												
		15	-	B	e	(2)	f																										
		16	2	19	A	a	(2)	f																									
		17	3	-	A	a	1																										
		18	5	21	C	a	(1)	f																									
7号(Ⅷ7)	12	7	-	A	a	1																											
		8	9	-	A	e	(2)	f																									
		9	9	-	A	e	(1)	f																									
		10	10	-	A	a																											
		11	11	-	A	a	(1)	f																									
		12	12	-	A	e	(1)	f																									
		13	13	-	C	a																											
		14	14	-	C	a																											
		15	15	-	A	a	(1)	f																									
		16	16	-	B	a																											
8号(Ⅷ3)	13	1	25	A	a	1																											
		2	-	A	b	(2)	f																										
		3	-	C	b	(2)	f																										

機種名	番	実	写	増付	仕様	標準	調整	調整	法	量	幅	厚	容積	重量	消費電力	備考					
																出	備				
																		出	備		
8号機(150)	45	3	A	*	1					12.5	9.8	3.9	1.9	3.3	40°	A-w-1	床	面	75		
	46	4	27	A	*	(2)	⇒			12.3	7.8	4.1	1.8	3.2	50°	A-w-(2)-0	キャツド内、キャツド右側		65		
	47	5	28	A	*	1				13.5	7.6	4.0	1.8	3.4	50°	A-w-1	床	面	55	底面は自動の色消し(写真)に対応	
	48	6	29	A	*	(2)	⇒			13.8	7.8	4.6	1.8	3.0	50.5°	A-w-(2)-0	床	面	50	調整のための色消し不明	
	49	7	30	A	*	1				13.0	8.4	4.3	1.6	3.1	60°	A-w-1	床	面	50		
	50	8	-	A	*	1				13.2	17.0	4.2	1.7	3.1	50°	A-w-1	床	面	40		
	51	9	-	A	*	1				13.8	17.0	3.8	1.9	2.6	50.5°	A-w-1	床	面	30		
	52	10	-	A	*	1				13.8	18.0	3.8	1.8	3.4	50°	A-w	床	面	30	底面は写真で示す(可動)、調整不明	
	53	11	-	A	*	(2)	⇒			13.3	8.1	4.8	1.6	2.8	60°	A-w-(2)-0	床	面	40	調整のための色消し不明	
	54	12	13	B	*	(2)	⇒			13.2	9.0	4.2	1.7	3.2	50.5°	B-w-(2)-0	キャツド右側		20	機体上部?	
	55	13	-	A	*	1				13.8	8.0	4.7	1.7	2.9	50.5°	A-w	床	面	20	床面に固定	
	56	14	-	A	*	(1)	⇒			14.4	18.25	4.5	1.8	3.2	50.5°	A-w-(1)-0	家庭、業務上		20	椅子用一部(1)	
	57	15	-	A	*	(2)	100			14.2	18.0	4.9	2.4	2.9	40.5°	(A-w)-(2)-0	家庭、業務上		15	底面は写真で示す(可動)、調整不明	
	58	16	-	B	*					14.4	19.25	3.5	1.6	4.1	50°	B-w	床	面	直上	15	機体上部、調整不明
	59	17	32	A	*	(1)	⇒			8.9	5.6	6.3	1.6	1.5	75.5°	A-w-(1)-0	キャツド右側		0		
	60	23	-	A	*	1				13.8	7.2	3.8	1.9	3.4	50°	A-w-1	機	体	直上	30	底面に固定
	61	24	-	A	*	1				13.8	18.0	3.4	1.6	3.4	50°	A-w-1			20		
	62	25	-	A	*					13.8	-	-	-	-	-	A-欠	床	面	直上		
	63	26	-	C	*					13.2	-	-	-	-	-	C-欠	床	面			
	9号機(150)	64	1	38	B	*	1				13.2	9.0	3.5	1.5	3.8	50°	B-w-1	機	体	直上	38
65		2	39	B	*	(1)	⇒			12.2	7.4	4.3	1.6	2.8	50°	B-w-(1)-0	床	面	面	80	
66		3	40	B	*	1				14.4	9.0	4.3	1.6	3.3	50°	B-w-1	機	体	直上	30	機体で自動的である。
67		4	-	B	*	(1), (2)	⇒			14.4	8.2	4.2	1.6	3.3	50°	B-w-(2)-0	機	体	直上	30	調整のための色消し(写真)、内面は写真(1)、後面は写真(2)で示す(可動)
68		5	41	C	*	(1)	⇒			13.2	7.2	4.7	1.8	2.8	50°	C-w-(1)-0			下	60	調整のための色消し不明、床面に少量のコーン(1)
69		6	42	B	*	(2)	⇒			14.2	7.0	3.6	2.0	3.9	44°	B-w-(2)-0	機	体	直上	50	調整のための色消し不明、内面に少量のコーン付着
70		7	-	A	*	(1)	⇒			13.2	7.4	3.9	1.7	3.2	50°	A-w-(1)-0	機	体	直上	40	
71		8	-	B	*	(1)	⇒			14.0	18.0	3.4	1.8	3.9	50°	B-w-(1)-0	機	体	直上	40	調整のための色消し不明、機体で自動的
10号機(150)	72	9	-	B	*	(1), (2)	⇒			14.0	17.4	4.4	1.9	3.3	50.5°	B-w-(2)-0	機	体	直上	20	調整のための色消し不明、椅子用(1)、後面(2)で示す
	73	1	-	A	*	(1)	⇒			14.0	18.0	3.4	2.1	4.1	40°	A-w-(1)-0	機	体	直上	40	調整のための色消し不明
	74	3	-	A	*	(1)	⇒			7.2	-	-	-	-	A-b-(1)-0	キャツド				椅子用の一部と後面外周に(1)	
	75	4	-	C	*	(2)	⇒			6.2	-	-	-	-	C-b-(2)-0	機	体	直上			
10号機(150)	76	1	45	B	*	1				12.5	8.6	3.5	1.8	3.6	47.5°	B-w-1	機	体	直上	80	機体下部、調整不明、キャツド内、キャツド右側
	77	2	46	A	*	(2)	⇒			14.4	7.0	4.6	2.1	3.1	50°	A-b-(2)-0	キャツド、業務用		50		
	78	3	47	A	*	(1)	⇒			13.2	7.2	4.9	1.8	2.7	50°	A-w-(1)-0	家庭、業務用		60	調整のための色消し不明、内面は写真(1)、後面(2)で示す	
	79	4	-	B	*	(1)	⇒			14.0	18.25	5.0	1.8	2.9	50°	B-w-(1)-0	キャツド、家庭、業務用		20	底面は調整不明、内面に少量のコーン付着	
	80	5	-	A	*	1				15.0	19.0	4.2	1.7	3.6	54.5°	A-w-1	床	面	面	30	一部自動的
11号機(150)	81	6	-	B	*	1				13.2	17.25	3.8	1.8	3.5	50.5°	B-w-1	機	体	直上	30	
	82	7	48	A	*	(2)	⇒			9.4	5.8	5.9	1.6	1.9	70°	A-w-(2)-0	業務用、左、右、下		0	機(1)	
	83	1	55	A	*	(1)	⇒			13.5	8.0	3.9	1.7	3.5	54.5°	A-w-(1)-0	床	面	面	80	調整のための色消し不明、自動の色消し(写真)に対応
12号機(150)	84	2	56	A	*	(2)	⇒			15.0	18.0	4.3	1.9	3.5	50.5°	A-w-(2)-0	機	体	直上	20	調整のための色消し不明
	85	1	57	A	*	(1)	⇒			13.0	7.2	4.9	1.8	2.7	50°	A-w-(1)-0	機	体	直上	20	底面は写真(1)、内面に少量のコーン付着
12号機(150)	86	2	-	A	*	1				12.8	18.25	4.2	1.6	3.0	41°	A-w-1	機	体	直上	20	
	87	5	58	D	*	キャツド				12.8	11.2	4.2	1.1	3.0	-	D	キャツド右側		50	内面に写真(1)で示す(可動)で示す、調整不明、椅子用(1)、後面(2)で示す	
145号機(150)	88	1	63	B	*	1				13.4	8.0	4.3	1.7	3.1	50.5°	B-w-1			下	20	調整

種 別 区 画	番 号	区 画 種 別	種 別	用途	用途	用途	法 定 量			外 積 積 算 率 (%)	外 積 積 算 率 (%)	外 積 積 算 率 (%)	分 割 記 号	備 考		
							延 べ 積 算 面 積 (㎡)	延 べ 積 算 容 積 (㎡)	延 べ 積 算 容 積 (㎡)					高 度 区 画	備 考	
140 (F40)	80	2	44	甲	1		13.9	7.4	4.4	1.8	3.2	甲-a-1	キヤツ内上層	定形	内外面均等減算し	
	90	3	45	甲	1		14.5	7.4	4.9	2.0	3.0	甲-a-1	キヤツ内下の層	第1	1階部分が長方形で、	
	91	4	-	甲	1	(1)	〃	13.5	7.4	4.9	1.8	3.4	甲-b-(1)-〃	〃	35	底部は特殊のみ(2)
	92	5	96	甲	1		13.5	8.4	3.6	1.6	3.8	甲-a-1	キヤツ内	50	キヤツ地上(二次分割)による分割面積が	
	93	6	-	甲	1		(14.0)	-	-	-	-	甲-a-1	床 面 上	定形	1階部分が長方形で、	
150 (F10)	94	1	68	甲	1		13.5	7.4	4.4	1.8	3.1	甲-a-1	床 面 上	定形	1階部分が長方形で、	
	95	2	69	甲	1		14.4	8.8	5.3	1.7	2.8	甲-a-1	床 面 上	第1	1階部分の一部長方形で、	
	96	3	-	甲	1		14.0	8.0	4.2	1.8	3.3	甲-a-1	床 面 上	第1		
	97	4	70	甲	1	(2)	〃	12.2	6.2	4.3	2.0	3.0	甲-a-(2)-〃	床 面 上	70	調整のための区画(不明)で、内部に少量のキヤツ付付。
	98	5	71	甲	1	(1)	〃	(13.0)	7.0	4.6	2.0	2.9	甲-a-(1)-〃	床 面 上	55	調整のための区画(不明)
160 (G70)	99	6	72	甲	1		(14.0)	7.0	4.8	2.0	3.0	甲-a	床 面 上	55	内外面均等減算し調整不明	
	100	7	-	甲	1		(14.0)	7.2	3.7	1.9	3.8	甲-a-1		40	日影の制限(2.5倍未満)であるが確認	
	101	8	-	甲	1		(13.0)	7.6	3.8	1.8	3.6	甲-a-1	床 面 上	30		
	102	9	73	甲	1	(1)	〃	11.4	7.2	6.8	1.4	1.7	甲-a-(1)-〃	床 面 上	定形	
	103	10	74	甲	1	(2)	〃	(11.2)	10.0	3.9	1.8	1.9	甲-a-(2)-〃	床 面 上	50	
180 (G50)	104	1	81	甲	1		15.6	8.4	5.3	1.9	2.9	甲-a-1	床 面 上	定形		
	105	2	82	甲	1		13.0	8.0	4.1	1.6	3.2	甲-a-1	床面上、キヤツ、内P。	50	内外面均等減算下、キヤツ内地上による二次分割	
	106	3	-	甲	1		12.7	7.2	4.6	1.8	2.8	甲-a-1	床面上、キヤツ、内P。	55		
	107	4	83	甲	1		13.4	7.6	4.5	1.8	3.0	甲-a-1	階 建 土 庫 上 等 的 使 用 面	55	底部はキヤツの積算面積がキヤツ内積算面積より少ない	
	108	5	-	甲	1		(14.0)	8.0	4.2	1.8	3.5	甲-a-1	階 建 土 庫 上 等 的 使 用 面	30	底部はキヤツの積算面積がキヤツ内積算面積より少ない	
170 (G30)	109	6	85	C	文	(1)	〃	(11.4)	-	-	-	C-a-(1)-〃	キヤツ内、床面上	20	内部の瓦葺き処理が指示されている	
	110	9	-	甲	1		(14.0)	17.0	3.8	2.0	3.7	甲-a-1	階 建 土 庫 上 等 的 使 用 面	20		
	111	10	-	甲	1		(14.0)	-	-	-	-	甲-a	階 建 土 庫 上 等 的 使 用 面	20		
	112	11	-	C	文	(2)	〃	(13.0)	-	-	-	C-a-(2)-〃	キヤツ内			
	113	1	87	甲	1	(1)	〃	13.6	7.2	4.1	1.9	3.3	甲-b-(1)-〃	新キヤツ付内	80	内外面均等減算下、底部は特殊のみ(1)
190 (G10)	114	2	88	甲	1	(2)	〃	13.4	5.6	4.0	2.4	3.4	甲-b-(2)-〃	新キヤツ付内	80	底部は特殊のみ(2)
	115	3	-	甲	1		(14.4)	10.0	4.2	1.8	3.4	甲-a-(1)-〃		20	調整のための区画(不明)	
	116	4	-	甲	1	(1)	(10)	(14.4)	10.0	4.0	1.7	3.7	甲-a-(1)-〃	キヤツ内	10	調整のための区画(不明)調整不明
	117	7	-	C	文	(1)	〃	(13.0)	5.2	4.6	2.7	3.0	C-a-(1)-〃	P ₁ 、床 面 上	30	内外面均等減算下
	118	8	90	C	文	(1)	〃	(13.6)	10.0	4.0	2.1	3.4	C-a-(1)-〃	床 面 上、階 建 土 庫 上	40	
180 (G10)	119	9	91	D	部Pフロ		10.8	4.8	4.0	2.3	2.7	10.0	D	外 面 上 部 階 建 土 庫 上 等 的 使 用 面	40	外部上部階建土庫上等的使用面がキヤツ内積算面積より少ない
	120	10	92	D	部Pフロ		14.1	9.4	4.5	1.5	3.2	12.0	D	外 面 上 部 階 建 土 庫 上 等 的 使 用 面、下層に改修あり。	70	
	121	1	-	甲	1		13.2	8.0	4.0	1.7	3.3	甲-a-1	P ₁ 、床 上	定形		
	122	2	95	甲	1		13.5	7.2	4.4	1.9	3.1	甲-a-1	キヤツ内	定形	内部に少量のキヤツ付付	
	123	3	96	甲	1	(1)	〃	(14.0)	8.0	3.5	1.6	3.5	甲-a-(1)-〃	階 建 土 庫 上	70	日影の制限(2.5倍未満)であるが確認(2.5倍未満)による調整面積が、調整のための区画(不明)による
180 (G10)	124	4	-	甲	1		(14.0)	8.8	3.6	1.4	3.1	甲-a-1	階 建 土 庫 上	20		
	125	5	97	甲	1		(13.2)	17.0	3.5	1.9	3.8	甲-a-1		25	内外面均等減算し	
	126	6	-	甲	1		(13.2)	17.0	4.5	1.7	2.9	甲-a-1	床 面 上	20		
	127	7	-	C	文	(2)	〃	(14.0)	6.4	4.7	2.2	3.0	C-a-(2)-〃	床 面 上	20	内外面均等減算下、底部も(2)あり
	128	8	-	C	文			(14.0)	9.0	4.9	1.6	3.0	C-a	床 面 上	40	調整のための区画(調整不明)
190 (G10)	129	1	99	甲	1	(1)	〃	12.3	7.6	3.8	1.6	3.2	甲-a-(1)-〃	床 面 上	定形	底部(1)の中心がずれている10%確認(2)より調整されている
	130	2	100	甲	1		14.2	7.0	4.0	2.0	3.6	甲-a-1	キヤツ内	第1	底部は長方形で示されている。	
	131	3	-	甲	1		(14.0)	10.0	3.7	1.5	3.8	甲-a-1	床 面 上	20		
200 (F410)	132	2	-	甲	1	(2)	〃	(14.2)	17.0	3.4	2.0	4.2	甲-a-(2)-〃	P ₁ 、階 建 土 庫 上	20	

通 号 表	番 号	区 画 番 号	種 別	用途 区分	調 査 年 次	調 査 部 位	法 量			容 積 率	外 積 角 度 (度)	分 割 区 画 号	備 考			
							延 床 積 算 面 積 (㎡)	延 床 積 算 容 積 (㎡)	延 床 積 算 容 積 率 (%)				高 土 道	(%)	備 考	
																(a)
24号(北)71	177	5	A	e	(2)	イ	18.0	8.0	3.1	2.7	3.4	A-a-(12)-e	床 面 上	15	調整のため調整し不明、底辺は短く(2)	
	178	4	B	e			15.0	7.0	4.4	2.0	3.5	B-c	外 積 上	10	内外面共敷設済みで調整し・調整不明	
24号(南)18	179	1	A	a	1		18.0	7.0	3.6	2.7	3.6	A-a-1	敷 地 上	15		
	180	2	C	a	(1)	ロ	13.0	7.2	4.4	1.9	2.0	C-a-(1)-ロ	敷 地 上	80	底辺の調整は不明	
27号(南)18	181	1	A	e	(2)	イ	18.0	7.6	3.9	3.8	3.5	A-a-(12)-e	敷 地 上	41	調整のため調整し不明	
	182	2	A	a	(2)	イ	13.0	7.6	4.0	3.8	3.4	A-a-(12)-e		30	底辺は短く(2)	
	183	3	A	a	(2)	ハ	14.0	7.0	4.0	3.9	3.6	A-a-(12)-ハ	敷 地 上	35	底辺は短く(2)	
29号(南)21	184	4	A	b	1		-	7.0	-	-	-	A-b-1	敷 地 上			
	185	1	A	a	1		14.0	7.8	4.6	3.8	3.1	A-a-1	床 面 上	50		
29号(南)25	186	1	A	b	1		13.5	6.8	3.9	3.7	2.9	A-b-1	高 敷 床 面 上	80		
	187	2	B	e			15.0	8.0	4.4	3.1	2.8	B-e		35	内外面共敷設済みで調整し・調整不明	
	188	3	B	e	(1), (3)	ハ	19.0	10.0	5.6	2.3	3.4	B-a-(1)-ハ	キ ャ ッ プ 敷 上	15	床子道は(1)1、底辺は床子道に調整して短く、調整不明	
	189	4	B	e			14.0	8.0	4.1	1.7	3.6	B-e	床 面 上	45	内外面共敷設済みで調整し・調整不明	
	190	5	B	e	(2)	ロ	11.0	6.8	6.7	1.6	1.8	B-a-(12)-ロ	P ₁	上	70	調整しやすい、トップ型
	191	10	C	b	(1), (2)	ハ	14.0	7.0	4.3	2.1	3.3	C-b-(12)-ハ	P ₁	内	25	
	192	11	B	a	(1)	ロ	13.2	8.2	4.1	1.6	3.2	B-a-(1)-ロ	キ ャ ッ プ 右 敷 設 床 面 上	変形		内面全面にうるし付着
	193	14	A	a	1		13.4	6.8	5.0	2.0	2.7	A-a-1	キ ャ ッ プ 右 敷 設 床 面 上	変形		内面全面にうるし付着、1階の床面美しい
40号(南)42	194	15	A	a	1		-	7.0	-	-	-	A-a-1		8	内面にうるし付着 (図面は)	
	195	1	A	a	1		13.8	7.6	4.4	3.8	3.1	A-a-1	床 面 上	50		
40号(南)43	196	2	A	a	1		13.4	7.6	3.8	3.8	3.5	A-a-1	床 面 上	変形		内外面共敷設済み
	197	3	A	a	1		13.8	7.8	3.8	2.7	2.8	A-a-1	床 面 上	60		
	198	1	A	a	1		14.2	7.8	3.9	3.8	3.6	A-a-1	敷 地 上	70		
41号(南)27	199	2	A	a	1		11.1	7.2	3.2	3.5	3.8	A-a-1	床 面 上	70		
	200	4	A	a	(2)	ロ	14.0	-	-	-	-	A-a-(12)-ロ	床 面 上			
42号(南)30	201	1	A	a	1		13.5	8.0	4.2	3.7	3.2	A-a-1	床 面 上	変形		内面に少量のカーボン付着
	202	1	A	b	(2)	ロ	14.0	8.0	4.4	2.1	3.3	A-b-(12)-ロ	敷 地 上	15	(2)によって積が決められている	
44号(南)33	203	2	A	e			14.0	7.0	3.7	3.9	3.8	A-e	積 出 道 上	15	内外面共敷設済みで調整し・調整不明	
	204	3	B	a	(2)	ロ	13.0	-	-	-	-	B-a-(12)-ロ	敷 地 上			
	205	1	A	a	1		13.8	6.8	4.4	2.0	3.1	A-a-1	床 面 上	38		
44号(南)33	206	2	B	a	1		13.0	8.2	4.4	1.6	2.0	A-a-1	床 面 上	30	扉の色調が写真写しに近い	
	207	3	A	a	1		13.6	7.2	3.9	3.9	3.5	A-a-1	敷 地 上	85		
	208	4	B	a	(2)	ハ	13.2	7.4	4.9	1.8	2.7	B-a-(12)-ハ		35	扉調である。	
	209	5	B	a	1		12.8	8.0	4.2	1.6	2.0	B-a-1	敷 地 上	80	内外面共敷設済み	
	210	6	A	a	1		13.0	8.4	3.6	2.2	3.8	A-a-1	敷 地 上	45	底辺は短くゲタがはいている。	
	211	7	A	a	1		13.0	7.0	3.4	3.8	4.1	A-a-1	新キヤップ敷設、新キヤップ付着	48		
	212	8	B	a	1		14.0	8.4	3.8	1.8	3.9	A-a-1	新キヤップ	30		
	213	9	A	a	1		13.0	7.8	4.6	3.8	3.0	A-a-1	敷 地 上	80		
	214	10	A	a	1		14.0	10.0	4.0	1.7	3.6	A-a-1	敷 地 上	40		
	215	11	B	e			13.0	7.0	3.8	3.8	3.6	B-e	新キヤップ敷設内	10	内外面共敷設済みで調整し・調整不明	
	216	13	A	a	1		14.0	10.0	3.8	1.7	3.7	A-a-1	敷 地 上	30		
47号(南)15	217	14	C	e	(1)	(ロ)	13.0	10.0	4.4	1.6	3.1	C-e-(1)-ロ		20	調整のため底辺の調整し・調整不明	
	218	15	A	b	1	(ロ)	13.0	8.4	3.8	3.9	3.5	C-b-(1)-ロ		40	内外面共敷設済みで調整し・調整不明、底辺は短縮のみ(1)	
	219	16	A	a	(2)		14.0	10.0	3.8	1.9	3.9	A-a-1	敷 地 上	90		
	220	1	B	a	(1)	ハ	11.1	6.0	4.5	3.9	2.5	B-a-(1)-ハ	敷 地 上	80	底辺は短縮のみ(1)	

調査年度	集約年度	集約区画番号	集約地番	集約地番	集約地番	用途	用途区分	面積			%	%	外周長(延坪)	分割番号	備考				
								(㎡)	(㎡)	(㎡)					高	厚			
47号(47-03)	集約地目録	221	2	182	B	a	(1)	〃	12.8	8.9	3.8	1.6	3.4	50'	B-a-(1)-〃	床 面 上	70	底面は外周の中心線で算定する。	
		222	3	-	B	c	(2)	〃	14.7	8.6	5.6	1.7	2.6	54.0'	B-c-(2)-〃	床 面 上	60	外周に多量のカーボン付着	
		223	4	-	A	b	1			12.8	4.6	3.7	1.9	3.5	50.3'	A-b-1	床 面 上	80	底面に塗膜有り。
		224	5	-	A	b	1			12.6	47.4	4.1	1.7	3.1	50'	A-b-1	地 盤 上	15	
		225	6	180	C	a	(2)	〃	〃	18.6	7.8	4.3	1.9	3.4	51'	C-a-(2)-〃	地 盤 上	80	
		226	7	-	C	e	(1)	〃	〃	13.0	18.2	4.1	2.1	3.2	50'	C-e-(1)-〃	床 面 上	10	調整のための切戻し不明
		227	8	-	A	b	1			-	6.8	-	-	-	-	A-b-1			もがきが行われたと見られる。
48号(48-03)	集約地目録	228	1	-	B	e	(1)	(10)	13.2	18.0	4.7	1.9	3.6	49'	B-e-(1)-10	タ ッ プ 内	20	内外面が削減して底面の切戻し・調整不明	
49号(49-03)	集約地目録	229	1	-	A	e	(2)	〃	18.2	18.0	4.5	1.8	3.2	54.3'	A-e-(2)-〃	タ ッ プ 左 輪	20	調整のための切戻し不明	
50号(50-03)	集約地目録	230	2	-	C	e	(1)	〃	13.6	7.4	4.3	1.8	3.0	54.3'	C-e-(1)-〃	床 面 直 上	90	調整のための切戻し不明	
51号(51-03)	集約地目録	231	1	-	C	e	次		18.0	-	-	-	-	C-次	タ ッ プ 内				
52号(52-03)	集約地目録	232	1	181	A	a	1		12.9	8.0	3.6	1.4	3.6	52.0'	A-a-1	タ ッ プ 右 床 面	定形	内外面にカーボン付着	
53号(53-03)	集約地目録	233	2	-	A	a	1		13.8	8.0	3.9	1.7	3.5	53'	A-a-1	地 盤 直 上	70		
54号(54-03)	集約地目録	234	1	-	A	a	1		13.7	8.0	4.3	1.7	3.2	50'	A-a-1	床 面 定形			
		235	2	182	A	a	1		12.8	9.0	1.0	1.4	3.2	50.3'	A-a-1	床 面	90	底面付近は多量の切戻し・調整不明	
		236	3	180	A	a	(2)	〃	〃	13.6	7.8	4.5	1.7	3.0	50'	A-a-(2)-〃	地 盤 上	80	内に少量のカーボン付着
		237	4	-	A	a	1			12.2	7.0	3.6	1.7	3.4	54'	A-a-1	地 盤 上	80	内外面が削減している
		238	5	180	A	a	1			14.5	8.4	4.9	1.7	2.0	50.3'	A-a-1	地 盤 上	75	底面中心付近の切戻し・調整不明
		239	6	-	A	a	1			13.4	7.0	4.7	1.9	2.9	54.3'	A-a-1	床 面 直 上	50	
		240	7	-	A	e	(2)	〃	〃	14.6	8.6	4.3	1.7	3.6	53'	A-e-(2)-〃	床 面	45	調整のための切戻し不明
		241	8	-	B	b	1			13.6	7.0	4.7	2.0	2.9	54'	B-b-1	地 盤 上	40	内外面が削減している
		242	9	-	A	a	1			13.2	16.8	3.8	2.0	3.5	49'	A-a-1	床 面	40	内外面にカーボン付着
		243	10	-	A	b	1			13.4	7.0	3.9	1.9	3.5	49.3'	A-b-1	床 面、地盤上	40	
55号(55-03)	集約地目録	244	11	-	C	e	(2)	f	13.1	7.0	4.5	1.9	3.0	55.2'	C-e-(2)-f	タ ッ プ 内	90	底面のための切戻し不明	
56号(56-03)	集約地目録	245	1	181	A	b	1		13.2	7.4	4.2	1.8	3.1	53'	A-b-1	床 面、地盤上	85		
		246	2	-	B	e			13.4	18.0	4.2	2.2	3.2	49.3'	B-e	P ₁ 床 上	10	底面が少なく切戻し・調整不明	
		247	1	184	A	a	1			13.5	7.6	4.3	1.8	3.1	53'	A-a-1	床 面	定形	
54号(54-04)	集約地目録	248	2	184	A	a	1		13.6	8.8	1.4	2.1	3.1	46.3'	A-a-1	床 面	定形	底面が削られている	
		249	3	-	A	a	1			14.0	7.2	1.8	1.9	3.7	50'	A-a-1	床 面	定形	底面が削られている
		250	4	-	A	a	1			12.7	8.0	4.1	2.1	3.1	52'	A-a-1	タ ッ プ 右(地盤上、床面中央部)	定形	底面が削られている。内外面が削られている可能性がある
		251	5	-	A	a	1			14.0	8.0	4.2	1.8	3.3	50.3'	A-a-1	床 面	定形	底面が削られている
		252	6	200	A	a	1			12.3	8.4	3.9	1.5	3.2	41.3'	A-a-1	P ₁ 内	95	
		253	7	181	A	a	1			13.9	7.2	3.9	1.9	3.5	49'	A-a-1	床 面、タ ッ プ 右(地盤上)	95	底面が削られている。10割程度削られている。
		254	8	202	A	a	1			14.0	8.4	4.3	1.7	3.8	50'	A-a-1	床 面	95	底面中央部が削られている。
		255	9	203	A	a	1			14.4	8.0	4.1	1.8	3.5	50'	A-a-1	P ₁ 付 近	90	10割程度削られている。周辺の地盤も削られている。
		256	10	-	A	a	1			13.6	7.2	4.1	1.9	3.3	53'	A-a-1	床 面	90	
		257	11	204	A	a	1			13.8	7.2	4.0	1.9	3.5	49'	A-a-1	タ ッ プ 輪及びタ ッ プ 右(地盤上)	70	底面が削られている
		258	12	-	A	a	1			14.1	7.4	4.0	1.9	3.3	50'	A-a-1	タ ッ プ 右(地盤上)	70	底面が削られている
		259	13	-	A	a	1			12.7	8.4	4.3	1.5	3.0	40'	A-a-1	床 面、地盤上	80	内外面に多量のカーボン付着
		260	14	-	A	a	1			13.9	8.0	4.6	1.7	3.0	55.3'	A-a-1	床 面	50	
		261	15	-	A	a	1			13.7	7.4	4.0	1.8	3.4	50'	A-a-1	タ ッ プ 輪及びタ ッ プ 右(地盤上)	55	
262	16	-	A	a	1			12.9	7.6	3.7	1.7	3.5	54'	A-a-1	床 面、地盤上	40			
263	17	-	A	a				13.5	8.8	3.8	2.0	3.6	49.3'	A-a	地 盤 上	50	底面が少なく切戻し・調整不明		
264	18	-	A	a	1			13.2	6.4	3.9	2.1	3.4	49'	A-a-1	床 面	45	底面が削られている		

通 車 区 間	番 号	X 座 標	Y 座 標	特 別 区 域 等	区 画 上 の 種 別	調 整 部 位	調 整 部 位	法 量			S ₁ /S ₂	外 観 的 見 度 (P)	備 考					
								(a)	(b)	(4)			分 割 区 画 号	(5)	備 考			
																1 階 高 (m)	2 階 高 (m)	3 階 高 (m)
545区(50-0)	205	19	-	A	ベントリ	1. 敷 設 調 整 (柱 部 位)	2. 敷 設 調 整 (柱 部 位)	1	11.0	7.0	4.0	1.7	3.4	54.5'	A-e-(2)-a	床面、階上	30	調整のための区画し不明
	206	20	-	B	k	1			11.0	10.0	5.0	2.3	2.3	52'	B-b-1	階 上	30	
	207	21	-	A	e	(2)			14.0	10.0	3.0	1.8	3.7	49.5'	A-e-(2)-a	P ₁ 付付、階上	15	
	208	22	-	A	e	(2)	(10)		14.0	10.0	3.1	1.8	4.5	51.5'	A-e-(2)-a	床 面 上 中	30	区画の付少く区画し・調整不明
570区(74)	219	1	-	A	a	1			12.0	7.0	2.7	1.8	3.4	52.5'	A-a-1	床 面 下	40	
	220	2	-	A	a	1			12.0	4.0	3.5	2.1	3.5	47.5'	A-a-1	キヤド室横	30	
	271	3	-	A	e				14.0	15.0	4.7	2.6	3.1	45.5'	A-e		10	区画の付少く区画し・調整不明
580区(72)	222	1	-	A	e				12.0	10.0	4.1	2.2	3.3	40'	A-e	階 上	30	区画の付少く区画し・調整不明
	273	1	23	A	k	1			13.0	6.6	4.5	2.0	2.9	53'	A-k-1	床 面	30	
590区(71)	274	2	-	A	a	1			13.0	7.0	3.6	2.0	3.8	48.5'	A-a-1	P ₁ 、階上	30	内面に付着物あり
	275	3	-	B	k	1			14.0	6.0	4.3	2.3	3.3	47'	B-b-1		10	一部青色(区画内面にA類)
	276	5	-	B	k	1			-	7.3	-	-	-	-	B-b-1	階 上		
720区(24-2)	277	6	-	A	a	1			14.0	10.0	3.6	1.6	4.1	54'	A-a-1		10	
710区(51)	278	8	-	A	e	(1)			14.0	10.0	4.5	1.6	3.6	55'	A-e-(1)-a		10	調整のための区画し不明、外面に多量のコーキング付着
1410区(27-30)	279	11	-	A	k	1			13.0	6.6	4.4	2.1	3.1	50.5'	A-k-1		30	
1440区(27-74)	380	12	-	A	a	1			12.0	10.0	4.4	1.6	3.1	50'	A-a-1	階 上	45	
	381	14	-	A	a	1			13.0	7.0	3.6	1.9	3.8	52.5'	A-a-1	階 上	30	
1130区(45)	382	22	-	A	k	(1)			13.0	7.0	4.0	1.9	3.3	53.5'	A-k-(1)-a		30	区画は外側にのみ(1)
	383	23	-	C	x				11.0	-	-	-	-	-	C-x	階 上		
1470区(24-9)	384	25	-	A	a	1			13.0	7.2	3.2	1.8	4.1	49'	A-a-1		40	
	385	30	-	A	a	1			13.0	7.0	3.8	1.9	3.5	54'	A-a-1		30	
130区(24-33)	386	32	-	C	x	(1)	0		12.0	-	-	-	-	-	C-x-(1)-a	階 上		
1410区(36-15)	387	33	-	D	非アゾロ				13.0	3.8	3.3	2.3	2.5	54'	D		40	外面に(2)で区画しアゾロの横(2)から地盤不安
1410区(36-19)	388	34	-	B	a	1			12.0	10.0	4.2	1.9	3.0	55'	B-a-1	階 上	30	色塗(10)を写実写真機から区画(横)より(1)
1410区(36-16)	389	35	-	B	x				14.0	-	-	-	-	-	B-x	階 上		調整
1380区(36-12)	390	39	-	A	a	1			13.3	8.2	3.7	1.6	3.6	54'	A-a-1		45	
	391	40	-	A	a	1			15.0	10.0	2.7	1.7	4.1	49.5'	A-a-1		30	
30(13&20)	392	1	-	A	a	1			13.7	7.2	3.9	1.9	3.5	51.5'	A-a-1	床 面、階上	55	
	393	2	-	A	x				11.0	-	-	-	-	-	A-x	床 面		
410区(27)	394	1	25	A	a	1			13.9	8.2	3.9	1.7	3.6	51.5'	A-a-1	階 上	40	
	395	9	22	A	a	1			11.4	6.4	4.5	1.8	2.5	41'	A-a-1	床 面 上	45	調整
90(24)	396	10	-	A	a				15.0	10.0	3.6	1.7	4.2	48.5'	A-a		25	内外面調整不足(調整不明)
	397	12	23	C	e	(2)	f		12.2	6.8	6.5	1.8	3.5	50'	C-e-(2)-f	床 面	30	調整のための区画し不明
30(13&20)	398	2	28	A	a	1			15.3	9.0	6.8	1.7	2.3	43.5'	A-a-1	床 面	45	外表面に少量の青色付着物
	399	4	-	A	e				13.0	7.0	4.1	1.8	3.4	53.5'	A-e		10	区画の付少く区画し・調整不明
調 上 道 線	300	5	-	A	e				13.0	10.0	4.2	1.6	3.3	50'	A-e		10	区画の付少く区画し・調整不明
	301	9	-	B	k	1			15.0	6.2	7.7	2.5	2.1	58.5'	B-b-1		20	A類の構成、S ₁ 及び付着物
	302	1	-	A	a	1			13.0	6.8	3.5	2.0	3.9	45.5'	A-a-1		25	区画の付少く区画し・調整不明
	303	2	-	A	a	(2)			14.0	10.0	4.2	1.7	3.4	50'	A-a-(2)-a		15	区画は縦(2)
	304	3	-	A	a	(2)			15.0	10.0	4.8	1.8	3.2	54.5'	A-a-(2)-a		15	
	305	4	-	A	a	(2)	0		13.0	7.0	3.6	1.7	3.7	52.5'	A-a-(2)-a		15	
	306	5	-	A	a	1			14.0	10.0	4.2	1.6	3.4	51'	A-a-1		10	
	307	6	-	B	a	1			13.0	10.0	3.8	1.8	3.6	50'	B-a-1		10	内外面調整不足(調整不明)
308	7	-	A	a	1			13.0	7.0	4.1	1.7	3.2	50'	A-a-1		45		

産 産 名	番 号	天 井 高 度	写 真	類別	設置し たい 場所	調 査 日	調査部位	法 量			外 径	外 径 厚	分 割 尺 寸	備 考		
								(mm)	(mm)	(mm)				高 土 面	(%)	
42号No.60 管穴住居跡	309 1	-	A	k	1			(11.2)	(7.6)	3.8	1.7	3.5	52.5'	A-b-1	埋 藏 土	10
	310 1	-	A	k	1			(9.2)	-	-	-	-	-	A-次		
	311 2	-	A	k	1			-	6.8	-	-	-	-	A-b-1		
	312 3	-	B	k	1			(12.8)	5.0	4.5	2.6	2.8	40'	B-b-1		10
10号(住) 遺 跡	313 4	-	B	k	1			(13.4)	5.8	3.5	2.4	3.1	40'	B-b-1		10
	314 1	-	B	a	(2)	ハ		14.4	7.8	5.3	1.8	2.8	39.5'	B-a-(2)-ハ		10
	315 2	-	A	a	(2)	イ		(11.2)	(7.4)	6.0	1.8	2.3	33.5'	A-a-(2)-イ		10
	316 3	-	A	a	1			(14.6)	(8.2)	6.3	1.8	1.4	32.5'	A-a-1	埋 藏 土	10
管 堀 内 遺 跡	317 4	-	B	k	1			-	(8.4)	-	-	-	-	B-b-1		
	318 6	-	A	k	(1)	ハ		12.7	7.2	3.9	1.8	3.3	52'	A-k-(1)-ハ	埋 藏 土	10
	319 7	-	C	k	(2)	ハ		13.9	8.8	6.0	2.9	3.3	45'	C-k-(2)-ハ		10
	320 1	-	A	a	1			(14.2)	(8.2)	6.0	1.7	3.5	36.5'	A-a-1	埋 藏 土	10
管 堀 外 遺 跡	321 2	-	A	a	1			(13.4)	(8.8)	3.5	2.0	3.8	45'	A-a	壁 面 付 近	20
	322 3	-	A	a	1			(14.2)	(8.4)	6.0	1.7	3.8	33.5'	A-a-1	壁 面	20
	323 5	-	A	a	1			16.0	7.0	6.5	2.3	3.3	45'	A-a-1	埋 藏 土	10
	324 6	-	A	a	1			(14.0)	7.8	3.9	1.8	3.6	52'	A-a-1	壁 面	45
10号(街) 跡 戸	325 7	-	A	a	1			(13.8)	6.4	6.0	2.1	3.3	45'	A-a-1	埋 藏 土	45
	326 8	-	A	a	1			(14.2)	7.6	3.7	1.9	2.8	46.5'	A-a-1	埋 藏 土	45
	327 9	-	A	a	1			(14.4)	(7.8)	3.9	1.8	3.7	50'	A-a-1	埋 藏 土	40
	328 10	-	A	a	1			(13.8)	(7.2)	3.9	1.9	3.5	49.5'	A-a-1	埋 藏 土	10
	329 1	-	A	a	1			(13.8)	7.6	6.1	1.8	3.4	55'	A-a-1		40
	330 2	-	B	a	(2)	イ		(11.0)	7.4	3.4	1.8	3.8	45'	B-a-(2)-イ		30
	331 3	-	A	a	1			(14.4)	(7.4)	6.1	1.9	3.5	49'	A-a-1		10
	332 4	-	A	k	(1)	ハ		(14.2)	7.4	3.8	1.9	3.7	48'	A-k-(1)-ハ		10
	333 5	-	A	a	(1)	10)		(12.4)	(8.8)	3.8	1.8	3.3	33.5'	(A-a-(1)-10)		15
	334 6	-	A	a	(2)	ハ		(14.0)	6.4	6.8	2.2	2.9	31.5'	A-a-(2)-ハ	埋 藏 土	10
	335 7	-	A	k	1			(12.4)	(8.4)	4.2	2.0	2.2	50'	A-k-1		10
	336 8	-	A	a	1			(13.0)	(7.8)	3.7	1.7	3.3	34.5'	A-a-1		10
	337 9	-	A	a	1			13.4	7.6	6.6	1.8	3.8	50'	A-a-1		40
	338 10	-	A	a	1			13.7	7.6	6.0	1.9	3.4	50'	A-a-1		10
	339 12	-	A	a	1			(13.4)	7.6	4.3	1.8	3.1	50'	A-a-1		40
	340 13	-	A	a	1			(14.4)	(7.6)	3.2	2.1	4.3	49.5'	A-a-1		10
341 14	-	A	a	1			(13.2)	(7.6)	3.8	1.8	3.3	32.5'	A-a-1		20	
342 15	-	A	e	(1)	イ		(12.8)	(8.2)	4.0	1.6	3.2	40'	A-e-(1)-イ		40	
343 16	-	A	a	1			(13.8)	7.4	3.3	1.9	4.2	49'	A-a-1		40	
344 17	-	C	a	1			(13.0)	8.8	4.3	1.9	3.0	34.5'	C-a		10	
345 18	-	C	e	1			(16.8)	(8.8)	7.6	1.9	2.2	45'	C-e		10	
346 19	-	A	e	(2)	10)		(13.6)	(7.4)	4.2	1.8	3.2	55'	(A-e-(2)-10)		10	
347 20	-	A	a	1			(14.8)	(8.0)	4.3	1.9	3.4	55'	A-a-1	埋 藏 土	15	
348 21	-	C	k	1			(12.8)	-	-	-	-	-	C-次	埋 藏 土		
349 22	-	C	k	1			(12.8)	-	-	-	-	-	C-次	埋 藏 土		
350 23	-	C	k	1			12.7	5.0	4.1	2.5	3.1	45'	C-k-1		10	
竹 花 前	351 1	-	C	k	1			13.2	3.8	3.4	2.5	2.4	55'	C-k-1	埋 藏 土	10
	352 14	-	A	a	(2)	イ		(14.8)	(7.8)	4.6	1.8	3.8	35.5'	A-a-(2)-イ		15

遺跡名	調査年度	調査月	調査地	調査区	調査位置	径			底径	高さ	厚さ	分類記号	備考			
						口径	底径	高さ					出土面	埋没		
高土地点不明	351	31	-	A	a	1			104.00	7.8	4.1	1.8	3.4	A-a-1	80	
	354	36	-	A	c	(2)	19		104.60	18.20	4.3	1.8	3.2	A-c-2(1)~	85	調整のため切離し不明
	355	37	-	B	b	1			104.20	6.6	4.3	2.2	3.3	B-b-1	50	内外底面切離し不明
	356	38	-	B	c	(2)	100		104.40	8.2	5.3	1.8	2.7	B-c-2(1)~	25	調整のため切離し不明
	357	39	-	A	c				103.80	18.00	2.8	1.7	4.9	A-c	81	調整のため切離し・調整不明
	358	40	-	A	a	1			103.40	8.40	4.3	1.6	3.3	A-a-1		

以上、385点についての一覧表を記したが、以下A・B・C・Dの順に詳細を記す。なお、分類の細目についての説明は375P、細目の組み合わせからなる分類記号は第91表を参照して頂きたい。

〈A類〉

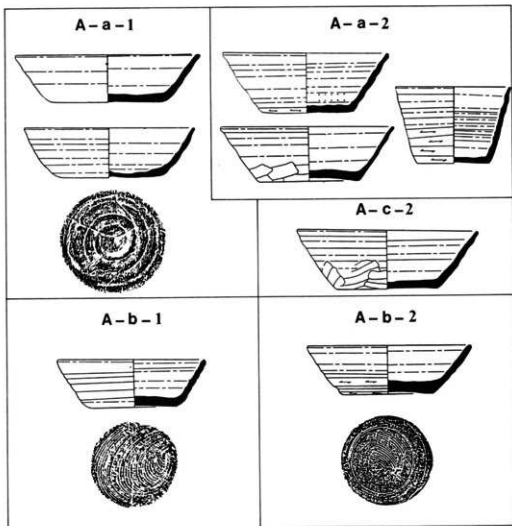
A類は247点ある。この中で、底部の大半が欠失するなど遺存状態の不良のもの、磨滅・剝離等のために切離しや再調整の有無などが判明しないもの、等の例が59点ある。これらについては分類上の区分が確定せず、記号化できないため本項では割愛している。最終的には188点についての記述である。

分類されたA類の代表的タイプは、第123図の判例図に示している。形態的な大別としては、猪口或いはコップ形を呈す環の存在が目立つ。本来的には独立した土器群として設定すべき要因もあるが、本項では環形土器の範疇として把握し、同一の観点で分類したため一括して記載している。

A類は既述の観点からみて、a-1（ヘラ切無調整）・a-2（ヘラ切有調整）、b-1（回転糸切無調整）・b-2（回転糸切有調整）、c-2（再調整のため切離し不明）、等の五様に分けられる。c-2は明らかに再調整に依って切離しが不明となっているもので、磨滅その他に依ると思われる環は除外してある。当然、c-1（切離しが不明で無調整）という組み合わせは設定され得ない。なお、c-2はa-2・b-2に係るもので、本来的には同一系譜上に存在するものであろうが、一応分類上の一タイプとして独立させている。また、a-2・b-2・c-2等の再調整を有す環群は、ヘラ削りの方法やその部位等から更に細分されるが、既述のタイプの中に包括して記す。これらのうち、底面に再調整が加えられるにも拘らず切離し痕が判明するのは、再調整の範囲が底部全面に及ばず外周付近で留まっているためである。

A-a-1（以下はa-1と記す。他類についても同様である。）

a-1は108点ある。ヘラ切無調整のA類環である。概して口径に対する底径比が大きい。口縁形は外反・外傾の二様があり、外傾するものが多い。また、体部に丸味を有す例は少なく、



第123図 A類分類判例図

直線的な立ち上がりをみせる例が目立つ。体部と底部との境界は比較的明瞭なものも絶対的に多く、所謂丸底風のものも微量である。a-1は多くの竪穴住居跡から出土しており、本遺跡内でのほぼ普遍的なセットを構成するとみて大過ないが、一部遺構にあつては偏向したあり方をみせる場合もある。

A-a-2

a-2は24点ある。ヘラ切痕を残す有調整のA類環群である。再調整は回転ヘラ削り、手持ヘラ削りの二通りがあり、更に再調整が施される部位には三様がある。回転ヘラ削り調整を有するものは5点、手持ヘラ削りに依るものは19点となっている。調整部位との組み合わせに依る各々

の点数は第92表の如くである。

形態的には、猪口或いはコップ形を呈す特徴的な坏が4点含まれる。調整技法とその部位の組み合わせが何れも異なっている。この種の坏は、以降に記すA-c-2（再調整のため切離しが不明のA類）の3点と同様に、体部下端から底面に至るまでの部分に必ず再調整が加わっている。

A-b-1

b-1は15点ある。回転糸切無調整のA類坏。コップ形の坏は含まれない。コップ形を除く他のA類に比して、器形・量等に於ける大きな差異はない。a-1・2類との区分要因が、土器製作技法の本質的な相違ではないかとされる切離しに求めたことからみれば当然のこともであろう。従って、形態等については特に傾向性を抽出することはない。

A-b-2

b-2は12点である。回転糸切の切離しに依るもので、体部下端や底面にヘラ削りの再調整が加えられる一群である。底面だけに施される例はなく、ヘラ削りが底面に及ぶ場合は体部下端からの延張であり、しかも底面に於けるケズリの範囲は外周のみに限られている。組み合わせに依る点数は、第93-1表の如くである。

第93-1表 A-b-2類 調整技法とその部位一覧

調整技法	調整部位		計
	体 部 下 端	体部下端～底面	
① 回転ヘラ削り	—	7 [b-1]-ハ]	7
② 手持ヘラ削り	2 [b-2]-ロ]	3 [b-2]-ハ]	5
計	2	10	12

() 内は分類記号

A-c-2

c-2は29点ある。ヘラ削りが底面に加えられ、その結果として切離し痕が消滅した坏群である。器形的には体部が外反気味に立ち上がる例が目立つ。全点についての調整技法とその部位の組み合わせについては第93-2表に示した通りである。

再調整が加えられる範囲は、ハ（体部下端）の部分が多い。この傾向はa-2（ヘラ切有調整）に同じであるが、a-2では②（手持ヘラ削り）が、またA-cでは①（回転ヘラ削り）に依る再調整の点数が多くなっている。その上、①-イ（底面のみ回転ヘラ削り）と②-イ（底面

第92表 A-a-2類 調整技法とその部位一覧

調整技法	調整部位			計
	底面のみ	体 部 下 端	体部下端～底面	
① 回転ヘラ削り	—	1 (1) [a-1]-ロ]	4 (1) [a-1]-ハ]	5 (2)
② 手持ヘラ削り	6 [a-2]-イ]	4 (1) [a-2]-ロ]	9 (1) [a-2]-ハ]	19 (2)
計	6	5 (2)	13 (2)	24 (4)

() 内は分類記号。() 内はコップ類の点数。

93-2表 A-c-2類 調整技法とその部位一覧

調整技法	調整部位		計
	底 面 の み	体部下端～底面	
① 回転ヘラ削り	5 [c-1]-イ]	13 (2) [c-1]-ハ]	20 (2)
② 手持ヘラ削り	1 [c-2]-イ]	8 (1) [c-2]-ハ]	9 (1)
計	6	23 (3)	29 (3)

() 内は分類記号。() 内はコップ類の点数。

のみ手持ヘラ削り)との比も逆転している。

コップ形環は3点含まれる。a-2のそれに比して器高が低く、全体的に小振りである。猪口形といった方が適切かもしれない。再調整はハ(体部下端～底面)の範囲に加えられる。

〈B類〉

B類は底部片をも含めて69点図示した。A類と同様の観点で分類すると、B-a-1(ヘラ切無調整のB類)・B-a-2(ヘラ切有調整のB類)、B-b-1(糸切無調整のB類)・B-b-2(糸切有調整のB類)、B-c-2(再調整のため切離し不明のB類)等の5タイプが設定される。69点中、磨滅・剝離のために切離しが不明になっている環が14点あるが、これらについては分類外とする。各タイプ毎の点数は下表の通りである。

第94表 B類環 切離し・再調整一覧

切離し技法	a. ヘラ切 (B-a)		b. 回転糸切 (B-b)		c. 不明 (B-c)	
	1. 無調整 [B-a-1]	2. 有調整 [B-a-2] (1)回転ヘラ削り (2)手持ヘラ削り	1. 無調整 [B-b-1]	2. 有調整 [B-b-2] (1)回転ヘラ削り (2)手持ヘラ削り	再調整のため 不明のもの	磨滅・剝離の ため不明のもの
調整の有無・技法	1. 無調整 [B-a-1]	2. 有調整 [B-a-2] (1)回転ヘラ削り (2)手持ヘラ削り	1. 無調整 [B-b-1]	2. 有調整 [B-b-2] (1)回転ヘラ削り (2)手持ヘラ削り	再調整のため 不明のもの	磨滅・剝離の ため不明のもの
点数	15 ①	7 [B-a-1] ① 6 [B-a-2] ②	10 ②	1 [B-b-1] ① 1 [B-b-2] ②	15 [B-c-2]	14
合計		28 ①		12 ③	15	14

○内の数字は、底部片の点数を表す。

これらのうち、B-c-2としたものの中に、(1)回転ヘラ削り・(2)手持ヘラ削り以外の調整技法を有す環が3点含まれているが、その詳細は説明文中で記す。

B-a-1

a-1は15点の出土。ヘラ切無調整のB類環である。体部と底部の境界は比較的明瞭であり、口縁の断面形は、外長・外傾の二様がある。体部も含めて内湾気味になる器形は極めて少なく、A類の器形に比して遜色はない。但し、A類よりは軟質のため磨滅の度合は強い。比較的硬質のものは、その分だけ体部の凹凸が目立っている。

B-a-2

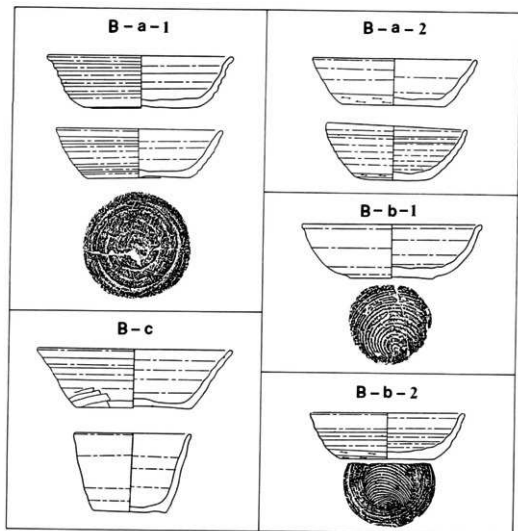
a-2は13点。ヘラ切後に再調整が加えられるB類環である。再調整には(1)回転ヘラ削り、(2)手持ヘラ削りの二様があり、その調整部位との組み合わせ点数は下表のようになる。

組み合わせとしては多様なあり方を示していると言えようが、これといった偏向も特にみられず、数の上ではA類と同様に体部下端～底面に再調整が及ぶ環が若干多い。

第95表 B-a-2類 調整技法とその部位一覧

調整技法	調整部位			計
	イ、底面のみ	ロ、体部下端	ハ、体部下端～底面	
(1) 回転ヘラ削り	1 [a-1-イ]	3 (1) [a-1-ロ]	3 (1) [a-1-ハ]	7 (1)
(2) 手持ヘラ削り	2 [a-2-イ]	1 (1) [a-2-ロ]	3 [a-2-ハ]	6 (1)
計	3	4 ②	6	13 ②

[]内は分類記号。()はコップ形環の点数。



第124図 B類分類判例図

形態的な面からみれば、体部に膨らみを持ち、口縁が直口気味になる坏が3点ほどある。No21・65・220等がそれであり、何れも回転ヘラ削り痕を有している。この種の器形はC類坏に類例を求めることができる。A類には、ほぼみられないものである。

他に猪口に似たコップ形を呈する坏が2点含まれている (No162・192)。この場合は、A-a-2 (ヘラ切で再調整を有するA類坏)・A-c-2 (再調整のため切離し不明のA類坏) にみられた7点のコップ形坏と同様にヘラ削り調整を有しており、その器形も酷似するものである。

B-b-1

b-1は10点あるが、2点は破片である。回転糸切無調整のB類坏群。体部に緩やかな膨らみ

を持つ坏 (No266・301・312・355) と、やや直線的な立ち上がりをもせる坏 (No135・241・275・313) とがある。前者はA類にはあまりみられない器形である。全体的には、No135を除き、a (口径) : b (底径) の割合が2.0以上の数値を示しており、A類に比して口径に対する底径値が概ね小さいという傾向にある。

B-b-2

b-2は完形品がなく、出土点数も僅かに2点である。No43は体部下端～底部の破片であり、No156は反転復元に依って図化したものである。No143は糸切後に体部下端と底面の一部に手持ヘラ削りが加えられる。また、No156は糸切後に体部下端から底面にかけて回転ヘラ削り痕を残す。底面の再調整は軽く加えられたものである。

B-c

切離しの不明なB類の坏群を総称とするが、ここでは、はっきりと再調整が加えられたB-c-2についてののみ取り上げ、磨滅・剝離等で不明な14点については省略する。

B-c-2には15点ある。再調整技法に(3) (その他) の項目が加わり、組み合わせは一層多様になる。その他の技法とは、No165・171・188の底面にみられるもので、一見した限りでは静止糸切の様にも思えるが、木口を利用したナデに依るものである。結果として底部にカキ目様の痕跡を残している。この種の技法はB類にしか見られない。

右表に依れば、再調整はハ(体部下端～底面)に加えられるものが多く、複数の技法が同時に使用された場合は体部下端に回転ヘラ削りを施し、底面には手持ヘラ削りか木口利用のナデが加えられている。

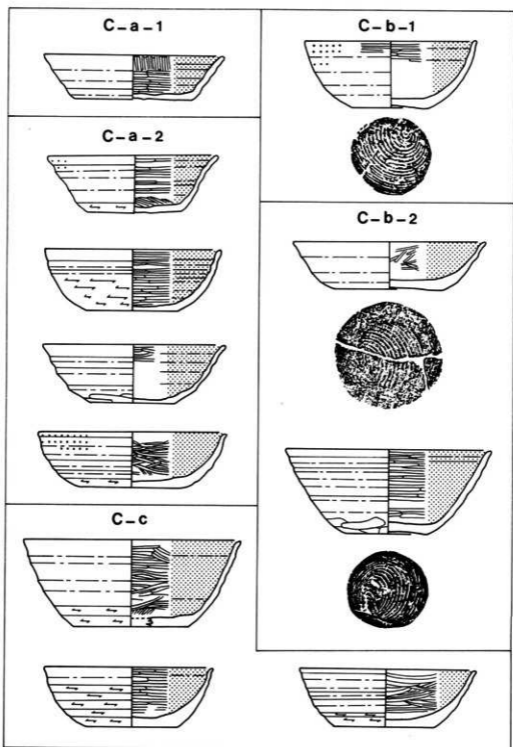
形態的には、体部が外反気味に立ち上がる坏 (No6・54・72・222) がある。この種の器形はB-a-2・B-b-1類にはみられなかったものであり、B-a-1としたものの中に数例の類似坏が散見する程度である。A類との比較でみれば、再調整のある坏群に割合多くみられるようである。

コップ形坂は1点だけである (No165)。本来的にはC-(1)・(3)-ハとした坏の範疇に含まれるものかもしれないが、体部外面の磨滅が激しく、体部下端に再調整があったのかについては不明である。

第96表 B-c類 調整技法とその部位一覧

調整技法	調整部位 イ、底面のみ	ロ、体部下端	ハ、体部下端～底面	計
(1) 回転ヘラ削り	—	$[e-1]-ロ$	$[e-1]-ハ$	4
(2) 手持ヘラ削り	$[e-2]-イ$	$[e-2]-ロ$	$[e-2]-ハ$	6
(3) ナデ、その他	$\frac{1}{[e-3]-イ}$ (1)	—	—	1 (1)
(4) 体部下端→1) 底面→→→→2)	—	—	$\frac{2}{[e-1]-2+ハ}$	2
(5) 体部下端→1) 底面→→→→3)	—	—	$\frac{2}{[e-1]-3+ハ}$	2
計	3 (1)	2 *	10	15 (1)

イ)内は分組別、ロ)内はコップ類の点数、ハ)の2点は本来的にロ)に属するものと見られる。



第125图 C类分類判例图

〈C類〉

C類は37点を図化している。このうち底部を欠失する破片が10点、体部下端～底部にかけての破片3点等が含まれる。前者の中には大型で体部下端に(1) (回転ヘラ削り) が加えられるものが2点 (No109・286) あり、他は残存部分での再調整は観察されない。後者の破片は、回転ヘラ削りが底部に加えられるもの (No38)、僅かに残る体部下端に(2) (手持ヘラ削り) が加えられるもの (No75)、の2点である。残る1点 (No23) は、磨滅のため調整の有無は不明である。

残る24点については、ヘラ切無調整のC-a-1 (No20)、回転糸切無調整のC-b-1 (No350)、ヘラ切後再調整のC-a-2 (No27・127・170・180・225)、糸切後再調整のC-b-2 (No42・191・218・319)、再調整のため切離し不明のC-c-2 (No68・117・118・157・172・217・226・230・244・297) があり、他に磨滅のため切離しが不明のもの (No112・128) と、切離しは判別するが再調整の有無が不明のもの (No344) がある。

C-a-1

ヘラ切無調整のC類環はNo20の1点だけである。器高が低く、底径が大き目である。A類によくみられる器形を呈している。

C-b-1

回転糸切無調整のC類環はNo350・351の2点ある。No351は隣接する竹花前遺跡出土のものである。位置的にみて本遺跡との関わりが想定されたため同様の取り扱いをしたものであるが、概ね新しい時期に比定される。口径に対する底径の割合は比較的小さい環である。

C-a-2・C-b-2・C-c

有調整の環群である。総点数が21点と比較的少ないので一括する。C-a-2はヘラ切有調整のC類、C-b-2は回転糸切有調整のC類、C-cは再調整のため切離しが不明のC類板である。各々の点数については第97表を参照されたい。但し、既述のNo112・128・344の3点については除外している。

第97表 C類有調整坑群の切離し・調整技法・その部位一覧

調整技法	切離し・調整部位		a. ヘラ切 (C-a)		b. 回転糸切 (C-b)		c. 不明 (C-c)		計
	口, 体部下端	ハ, 体部下端～底面	イ, 底面のみ	ハ, 体部下端～底面	イ, 底面のみ	口, 体部下端	ハ, 体部下端～底面		
① 回転ヘラ削り	$\frac{1}{[a-1]-口}$	$\frac{1}{[a-1]-ハ}$	$\frac{1}{[b-1]-イ}$	—	—	$\frac{1}{[c-1]-口}$	$\frac{6}{[c-1]-ハ}$	10	
② 手持ヘラ削り	$\frac{1}{[a-2]-口}$	$\frac{2}{[a-2]-ハ}$	—	$\frac{2}{[b-2]-ハ}$	$\frac{3}{[c-2]-イ}$	—	—	8	
③ 回転+手持ヘラ削り	—	—	—	$\frac{1}{[b-1]-2-ハ}$	—	—	—	1	
計	2	3	1	3	3	1	6	19	

[] 内は分類記号

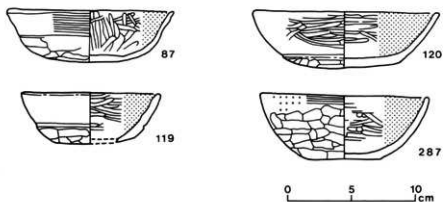
c-1)-1ハ（回転ヘラ削りが体部下端から底面に及び、切離しが不明なもの）が6点と多いが、器形的にみて統一性があるわけではない。No172の大型杯が含まれたり、立ち上がりも外反・外傾・内湾気味の各種がある。c-1)-2)-イ（底面に手持ヘラ削りが加えられ、切離しが不明なもの）の3点にあってもほぼ同様である。他のタイプにあっては、点数が少なく何ともいえないが、切離しや再調整技法とその部位等によって器形があまり限定されない一面を有しているものかもしれない。在地生産に依るA類が登場すれば、当然C類も何らかの形で影響を受けることは必至であるから、生産体制そのものが異なるという背景を有していたとしても、両様の形態・技法が入り込んだ結果として統一性に欠けることにもなるのであろう。

〈D類〉

ロクロ未使用の酸化焰焼成の杯。No87・119・120・287の4点の出土である。坏形土器点数に占める割合は約1%位であり、本遺跡内での明確なセットを構成する坏とは言い難い。

No87は12号（Ec62）竪穴住居跡内のカマド右袖部埋土中、No119・120の2点は17号（Gi09）竪穴住居跡内のカマド焚口前と床面からの出土である。また、No287は未精査遺構の144号（Ka15）竪穴住居跡堆積土上面からの採集に依るものである。No287は未精査遺構が密集している近辺からの出土であるため、これら遺構からの紛れ込みに依る可能性も考えられるが、他の3点にあっては共伴すると見做して大過ないであろう。

No87は口縁付近に横ナデ、体部から底面にかけてヘラ削りが加えられ、技法の境界近くに軽い段を有している。No119・120の2点は、口縁部にヘラミガキ、体部にヘラ削りが加えられ、体部の下方に沈線様の段がみられる。No287は体部の広範囲をヘラ削りする無段・平底の杯である。口縁部に残る横ナデ痕は最終の技法ではなく、軽いヘラ削りが加えられていることが観察される。非ロクロD類杯とロクロ成形杯が共伴するあり方は、一時期に於ける土器変遷の過渡期的様相を呈しているものとも言える。



第126図 D類杯実測図

以上が、坯形土器の分類結果と概要である。分類に付された点数はA類247点・B類69点・C類37点・D類4点となっている。以下については、各坯の特徴や組成の立場から、各類の年代観について触れていく。

D類 (非ロクロ、酸化焰焼成の坯)

D類坯は、奈良時代の典型的な土器群であり、所謂栗罎式或いは国分寺下層式と呼称される形式に比定され得る。特に№119・120・287の3点については国分寺下層式の終末期に属し、平安時代直前の土器とみて大過ない。これらにオーバーラップ乃至は後続する形でA・B・C類の坯群が発生してくるわけであるが、竪穴住居跡の大部分はその土器組成からみて、前代との関わりが薄いと解される。

D類を共伴する12号・17号住居跡に於ける土器組成は、県内にあつては宮地^{Ⅱ1}・猫谷地^{Ⅱ2}・尻引^{Ⅱ3}遺跡等の一部遺構に類例が求められよう。宮城県に至つては「伊治城型組成の土器群^{Ⅱ4}」で代表されるもので、県内では9世紀初頭にその変化点が置かれている。

A類 (ロクロ成形、還元焰焼成の坯)

A類坯は、その量からみて近辺に於ける窯群からの搬入が想定され得よう。後掲の土器胎土分析の結果、杉の上窯群^{Ⅲ5}の近辺から採取された胎土と、本遺跡出土A類坯1点について共通する鉱物組成結果が出ているが、興味ある事実である。また、B類坯についても同様の結果が出ている。

一方、へら切須恵器を主体的に出土する杉の上Ⅱ遺跡にあつては、隣接する窯群からの生産品である可能性が強いとされており、当地方に於けるこの種土器の一供給源たる可能性も否定できないであろう。しかし、本遺跡との関わりについては今のところ明言できず、既述の如く可能性の一端を示すに留める。

本遺跡出土のA類坯は247点を示したが、分類結果は188点についてのみである。

A-a-1 (へら切無調整のA類坯) は、分類された188点中の半数以上の108点を占める。坯部を挽き出した後にへらで起こしたもので、坯部と底部の境界がはっきりしている坯が圧倒的に多い。稀に緩やかな丸底風のものが見られるが一般的ではない。後者は底部の外周付近からの挽き出しであり、その分だけ坯部と底部の境界が不明瞭になったと思われる。これら二者のタイプは、多賀城編年^{Ⅲ7}に於ける6類-a・bと類別された坯群にその類例を求めることができる。量的には6類-bに類似した坯が大半を占め、6類-aに類似する坯は微量である。このようなあり方を、6類-aが漸次減少し6類-bが主流になってくるといふことに換言することが許されるならば、本遺跡A-a-1は多賀城編年に於いて既述の両者がオーバーラップす

る時期—8世紀末～9世紀初頭—からそれ以降という年代観を与えることも可能であろう。

A-b-1 (回転糸切無調整のA類坏) は15点を数える。一部には口径に比して底径が比較的大きいもの、口径に比して底径が小さいもの、等の特徴を見出すことが可能であるが、形態的にはコップ形を除く他のA類と著しく様相を異にするものではない。従って年代的には、切離し技法がヘラ切→糸切という推移を辿るものであるならば、A-a-1よりは新しいといえる程度である。両者が共伴する遺跡には、例えば石田遺跡(III期)・上平沢新田遺跡等が挙げられるが、9世紀の集落ではよくみられるあり方である。但し、ヘラ切と糸切に依る切離しの坯量は一定ではない。本遺跡にあって切離しの判明するA類坏159点の内訳は、ヘラ切132点、糸切27点となっており、糸切は1/5位の割合である。従って、ヘラ切から糸切への主要な変化点を9世紀後半に求めるとするならば、本遺跡のあり方は糸切へ徐々に移行していくという観点からみて、下限を9世紀後半より以前に設定することが可能である。因みに石田遺跡はヘラ切の坏が多く、上平沢新田遺跡では糸切の坏が多くなっており、前者は9世紀前半、後者は9世紀中葉以降に推察されている。一方、官衛・城柵等の遺跡にあっては、胆沢城のA期に相当するSD114溝第3層の土器群や多賀城のC群土器とされた部分で、主体的にヘラ切に依るものを出土しており、何れも9世紀初頭からの年代観が付されている。

再調整を有するA類は65点あり、分類されたA類坏のうち約30%を占める。分類上ではA-a-2 (ヘラ切有調整)、A-b-2 (回転糸切有調整)、A-c-2 (再調整のため切離し不明) に細分し、更に回転ヘラ削り・手持ヘラ削り等の調整技法と、それらが加えられる部位の相違、等があることは先に記した通りである。本項では、これら各類についての年代観には言及しないが、広く再調整を有する坏群として一括した場合、「調整という製作工程の1段階が省略されたという変化点を8世紀後半におくことができる」という観点から、本遺跡A類のあり方も概ね近い時期の組成を示すものと考えている。

コップ形を呈する坏については、他遺跡からの類例が少ない。少なくとも県内に於ける集落跡からは出土例がない。胆沢城SD114溝出土土器の中には同形を呈するものもあるが、この場合は土器であり、本項に於けるC類の範疇にも係る土器である。多賀城に於いては、この種の坏と同形のものはないが、B群・C群として示された土器の中に小型の坏が含まれている。胆沢城・多賀城出土の坏もヘラ削りが加えられており、本遺跡と同様である。類例は少なく、各々の特徴も一様ではないが、この種の坏類が本遺跡と土器組成が類似している部分に於いてみられるのは興味あることである。なお、秋田城では回転糸切無調整の須恵器で同形を呈す坏があるが、この場合は時期的に10世紀以降の可能性があるとされている。

B類 (1)ロクロ成形、酸化焰焼成の坏)